

飛鳥井雅有日記研究

博士前期課程二年 〇五七二〇二一

河野 有貴子

四〇字×四〇行

目次

頁

序

・  
・  
・  
1

第一章 日記『嵯峨の通ひ』の構想

第一節 古典の講読

・  
・  
・  
2

第二節 九月二十九日の記事

・  
・  
・  
7

第三節 「秋惜しむ歌」と『隣女和歌集』

・  
・  
・  
11

第四節 『嵯峨の通ひ』と虚構

・  
・  
・  
15

第二章 雅有の『源氏物語』享受

第一節 雅有の日記と『源氏物語』

・  
・  
・  
23

第二節 雅有と『源氏物語』

・  
・  
・  
26

第三節 『仏道の記』と『源氏物語』

・  
・  
・  
30

第四節 『源氏物語』に倣った行動

・  
・  
・  
33

第三章 雅有の日記の構成意識

第一節 『もがみの河路』の場合

・  
・  
・  
39

第二節 『嵯峨の通ひ』の成立年次と『もがみの河路』

・  
・  
・  
42

第三節 『都の別れ』の場合

・  
・  
・  
49

結び

・  
・  
・  
57

注

・  
・  
・  
58

参考文献目録

・  
・  
・  
68

## 序

飛鳥井・二条（藤原）雅有は仁治二（一二四一）年に左兵衛督教定の子として鎌倉に生まれ、正安三（一三〇一）年に六十一歳で没した。幼名は雅名、母は北条実時の女、姉は藤原為氏の室となった。祖父は『新古今集』の撰者であり、飛鳥井流蹴鞠の祖である藤原雅経である。祖父・雅経の代から関東祇候の廷臣であり、蹴鞠・和歌・学問をもって父・教定と共に、鎌倉幕府と京都の朝廷との両方に仕えた。蹴鞠の家の者として蹴鞠の書『内外三時抄』を残し、和歌の道の者として家集『隣女和歌集』を四巻残している。そして、京都と鎌倉とを往還する間に記した、『仏道の記』、『嵯峨の通ひ』、『もがみの河路』、『都の別れ』、『春のみやまち』の五編の仮名日記がある。

五編の仮名日記は、雅有の青年期から壮年期にかけて記されたもので、そのうちの『嵯峨の通ひ』と『春のみやまち』の二編は、ほぼ事実即して記したと考えられており、その資料的な面に意義があるとされている。雅有の二番目の日記である『嵯峨の通ひ』では、京都の嵯峨の山荘で『源氏物語』の講読を藤原為家・阿仏尼夫妻から受ける三ヶ月の日々の記録である。嵯峨での人々との関わりや、日を追って続けられる講読の様子が記されていることから、鎌倉中期の古典の講読の様子を伝え、他の記には見られない嵯峨の山荘における為家・阿仏尼の姿が見られるという点が評価されてきた。しかし、雅有は単に記録として残したというだけではないようである。雅有は講読の様子と併せて、嵯峨の山荘で居合わせた人々との生き生きとした遣り取りや、蹴鞠や紅葉狩り、大堰河に出掛けて歌を詠むなどする、講読の合間に行われたと見える遊興の日々についても鮮やかに描写している。雅有は、どのような意識でもって、この記を残したのであろうか。資料的な価値に目を向けるのみに留めておくのではなく、雅有の『嵯峨の通ひ』における構想について考察していきたい。その際、日記中の歌と、家集『隣女和歌集』の収録歌とに共通しているものがあり、日記と家集との歌の異同からも見えてくるものがあると考えられる。また、講読を受けた『源氏物語』の内容も、何らかの形で日記に反映させたものと考えられる。雅有の構想、それに伴う構成意識、『源氏物語』の享受について併せて見ていきたい。

雅有の日記は、最後に記された一年間に及ぶ日記『春のみやまち』に至るまでに、さまざまな形で記されている。『嵯峨の通ひ』、『春のみやまち』は、記録的な記、最初に記された『仏道の記』は虚構を含んでいることから、記録というよりも物語的な描き方をされた記であるとの認識になってきている。その一方で、『もがみの河路』、『都の別れ』は、鎌倉への下向の記を中心とした記であるが、構成意識等に関する言及は少ない。これら五編の仮名日記を順に見ていくことにより、雅有のそれぞれの日記における構成意識が見えてくるものと考えられる。本稿では、日記『嵯峨の通ひ』における構想と雅有の『源氏物語』享受、そして、雅有の五編の仮名日記の推移を見ながら、それぞれの記の持つ主題と構成、雅有の構成意識について考察していく。

## 第一章 日記『嵯峨の通ひ』の構想

### 第一節 古典の講読

『嵯峨の通ひ』は、文永六（一二六九）年の出来事を記した飛鳥井雅有の日記である。雅有の残した五編の日記のうち、『仏道の記』に続いて、二番目に書かれたものである。この日記は次のように起筆されている。

過ぎにし春の睦月より、芦屋の里を住み離れて、花の都に帰り上りたれど、早くより病身を去らぬものなれば、近き衛の名のみして、雲井のよ所に隔りて、小倉の山の麓に母なる人の山里あれば、籠り居て月日を送る。いにしへ、前中書王の住み給へる辺なれば、いと懐かしくて、都の住居も物憂くて、心を養ふばかりを取る方にてあり。かゝる所の秋のあはれは、いづくよりも心とまる。つれづれと眺め過ぐすに、此の辺に入道大納言為家卿なん、いにしへより住みけり。この人は、代々の昔よりの知る人なりければ、折々は情を通はし、対面しけり。そこより、土佐の日記、紫の日記、更級の日記、蜻蛉の日記などをおこせたり。誠に女の事なれば、ろんなり。男も仮名に書くらん事、この国のことわざなれば、故あり。伊勢物語も秋津島の文字にてぞあるべし、などいふ。うるはしき事は、げに真名にてもありなん。されば、その方はさ様に書きぬ。歌方などは、かやうにこそあらめと覚ゆれば、今より書きつく。過ぎにし方の事をも、思ひ出だして書き加ふべし。（注1）

#### 『嵯峨の通ひ』

雅有は、鎌倉幕府と京都の朝廷との両方に仕えていたため、鎌倉と京とを往還することが多くあった。往還時の旅の記録は、この『嵯峨の通ひ』には記されないが、残る四編の日記に記されている。この時は、芦屋から京へ戻ったものの、近衛の少将とは名ばかりで、病のために出仕も叶わない状況であったため、母の里のある小倉の山の麓、嵯峨に「籠り居て月日を送る」。嵯峨は昔、前中書王と呼ばれた兼明親王（注2）がお住まいであった辺であるから、親しみを覚える場所で、都の住まいも気詰まりなので、心の保養をする場所となっていた。このような場所の秋の風情は、どんなところよりも心をひきつけられるものである、と言う。

ここに登場する「入道大納言為家卿」は藤原為家のことである。為家は、康元元（一二五六）年に五十九歳で出家し、晩年は後妻に迎えた阿仏尼と嵯峨の山荘に住んだ。この嵯峨の山荘は、為家の父・定家より譲り受けたもので、嵯峨の中院と呼ばれる場所である。『嵯峨の通ひ』の十月一日の記事には「例の中院に行きぬ。」と記し、為家の山荘のことを指す。雅有は、実姉が為家の子・為氏の室であることから、為家とは縁者である。それ以上に、「代々の昔よりの知る人なりければ、折々は情を通はし、対面しけり」と序にあるように、雅有

の祖父・雅経は定家と共に後鳥羽院に仕え、共に新古今集の撰者であった。さらに雅有の父・教定は為家と親しく接していた(注3)。そして、文永六年の今、二十九歳の雅有は七十二歳(注4)の為家と親密である。飛鳥井家の親子三代と定家・為家父子との長年の付き合いが、両者の間にはある。ここまでの序で、雅有が嵯峨の中院に住む藤原為家・阿仏尼夫妻の許に通うようになることを知らせ、日記を書くに至る経緯として、為家から借り受けた「土佐の日記、紫の日記、更級の日記、蜻蛉の日記」に触発された旨を記している。この四つの日記のように仮名で書く記については、虫損の箇所「多」を補い、「多んあり」とし、女の手によるもので艶やかな趣がある、と解する。「歌方などは、かようにこそあらめ」と、歌に関することは仮名でなければならぬと思うので、今から仮名で書いておく、と言う。執筆の動機を示し、さらに「過ぎにし方の事をも、思ひ出だして書き加ふべし。」と、回想記であることも明記する。雅有の他の四編の日記には、執筆動機に当たる事は記されていない。雅有の日記の五編全てに関わる序とも言うことができる部分である。続いて、『嵯峨の通ひ』で、日付を付した最初の記事について触れたい。この記事以降、『嵯峨の通ひ』は、日付を記す、日次日記の形をとる。

長月ながの中の十日あまり三日の夜なれば、名を得たる月もなり。さるは、嵐山あらしの近きしるしにや、小倉をくらの山の名を変かへて、雲霧もなく晴れたる空に、華はなやかにさし昇る月のさやけさ、見ん人、心の隈くまも晴れぬべし。かゝる所の今宵こよひの月を、たゞなほざりに見んこと、いと口惜くちおしかるべしとて、すゞむしなる人を誘さそひて、見る人も人、と言いひて、かの入道の山莊さうへ行きぬ。主人出で、喜よろこぶ。昔は雲の上の光をのみ、見慣らひ侍みならりき。中なごろは葎むらの門に鎖し籠り侍りしかども、猶情なまけある人おのづから訪とひ来る人侍りしに、今いまなりては老を憎にくむにや、言問ことふ人もなくて、今宵こよひも寂しく眺ながめてひとり侍りつるに、渡り給へるにこそ、さらに昔恋むかししく思おもひ出づること多くて、いと止とどめ難がたき老の涙なみだに、名高なだかき光をさへやつし侍りぬる、とて殊ことに興おこぜらる。『嵯峨の通ひ』

後の名月である九月十三夜、嵐の名を持つ嵐山が近いせいから、「小暗」の意味を合わせ持つ小倉の山の名に相応しくなく、雲、霧も吹き払われたように晴れ渡った空である。そこに「華やかにさし昇る月」を、風流を解する為家入道らと見ようと、弟の基長を伴い、嵯峨の中院に出かけて行く。基長はこの日記中、侍従であるのでその異称「すゞむし」と呼称される。主人の為家は二人を歓待する。「昔は雲の上の光をのみ、見慣らひ侍りき」以下は、為家の言葉である。昔は宮中でお仕えし、華やかな生活に慣れていた。そう遠くない昔は門を閉じて籠っていたけれども、そんな時でも風流を好む人が訪れることもありましたが、今となつては老いを嫌つてか、訪れる人も絶えてしまった、「今宵も寂しく眺めてひとり侍りつる」時に雅有らの来訪があつたのである。為家は言葉を尽くして、訪れる人の絶えた「葎の門」に、再び「情けある人」が通うようになったことを喜ぶ。この後、月百首の歌を為家、阿仏尼、基長、雅有が参加し詠む。この日から、雅有は嵯峨の中院へ通い始める。

次の記事は、『嵯峨の通ひ』の中核とも言える、古典の講読が始まる日である。

十六日、秋の雨、時雨めきて、風の音も野分だちながら、いと激しからず、いとおもしろき日なり。もの思ふ宿の萩の下葉は気色ばみて、今よりの寝ねがて思ふも悲し。彼処の寂しさ思ひやられて、例の二人連れて渡る。伊勢物語の覚つかなき所々を記し出だして、取り出だす。主人殊にめで、伝へおきたることども、さらに秘せず言はる。昔より心得ぬことゝて、齋宮、連歌をば言はれず。□れば、□と、もとより心得たれば苦しからず。皆問ひ果て、明日よりは源氏を始むべき由を語らふ。持たせたる酒取り出で、盃あまたくだり流れて、連歌して、夜更くれば帰りぬ。

『嵯峨の通ひ』

九月十六日、秋だというのに、降る雨は冬の時雨のようで、吹く風は野分のように激しい風情ある日である。雅有は、『伊勢物語』の「覚つかなき」箇所を為家に問う。その際、難解な、あるいは解釈の行き届かない箇所を書き出して持参したらしい。この時、為家は「殊にめで、伝へおきたることども、さらに秘せず言はる」と、雅有の様子に殊に感心して、家の秘伝を教えることを厭わず、雅有と向き合う。さらにこの日は、「皆問ひ果て、明日よりは源氏を始むべき由を語らふ」と、『伊勢物語』の次は『源氏物語』の講読を始めたといふ、雅有が自ら願ひ出、持って来た酒を取り出し、酒宴となり、連歌をする。こうして、雅有は嵯峨の中院において、『源氏物語』五十四帖を通して講読を受けることとなり、この日以降、日を追って講読の様子が記されるようになる。

十七日、昼ほどに渡る。源氏始めんとて、講師にとて女あるじを呼べる。簾のうちにて読まる。まことにもしろし。世の常の人の読むには似ず、習ひあべかめり。若紫まで読まる。夜にかゝりて、酒飲む。主人方より、女二人を、土器取らす。女あるじ、簾のもとに呼び寄せて、此の主人は、千載集の撰者の孫、新古今、新勅撰の撰者の子、続後撰、続古今の撰者なり。客人は、同新古今撰者の孫、続古今の作者なり。昔よりの哥人、かたみに小倉山の名高き住処に宿してかやうの物語のやさしきことども言ひて、心をやるさま、ありがたし。此の頃の世の人、さはあらじ、など、昔の人の心地こそすれ、など、やう／＼に色を添へて言はる。男主人、情ある人の年若いぬれば、いと酔ひさへ添ひて、涙落とす。暁になればあかれぬ。

『嵯峨の通ひ』

九月十七日の昼から『源氏物語』の講読は始められた。講師として読み上げる役に、女あるじ・阿仏尼が呼ばれた。講読を始めて一日目にして、桐壺巻から若紫巻まで進んだという。昼から夜までの間に五巻分も読み進めたことになる。この講読は、教わる側の雅有も、教える側の為家、講師である阿仏尼も、熱が入っていたものと思われる。阿仏尼が簾

の中で読み上げる様子を「まことにおもしろし。世の常の人の読むには似ず、習ひあべかめり」と雅有は評している。『源氏物語』の本文の校合と、読み方による解釈の教授を中心にといった講読であつたと見える。三田村雅子氏は、この部分について、「この山荘での源氏伝授は、どちらかと言えば阿仏尼が主役であり、彼女が「講師」として読み上げた源氏物語は特別な声調があつて魅力的だったという。読経道だけでなく、こうした源氏読みにも一定の声調があつたことを物語る貴重な資料と言えよう。(注5)」と述べておられる。『嵯峨の通ひ』は、こうした資料的な価値があるという点に重きがおかれ、評価されてきた。それは、『源氏物語』をはじめとする、古典講読の様子が記されている点にある。

しかし、嵯峨の中院に集つた両者は、単なる教授者、被教授者というだけではないように見える。十七日、講師として講読の場にいる阿仏尼は、昔からの歌人である雅有と為家とが、小倉山の住処に宿し、こうした物語の情趣を語り合い、思いを馳せる様を、めつたにない素晴らしいことであると評する。この阿仏尼の言葉を雅有は「やう／＼に色を添へて言はる。」と記すが、阿仏尼の言葉からは言葉を尽くしただけではなく、その喜びも伝わってくる。また、情趣を解する主人、為家は、酒の酔いも加わり涙を落とす。雅有の目を通して、居合わせた人々の様子が記される。

『嵯峨の通ひ』では、その後、日を追つて『源氏物語』の講読が続いていく。この日記中で『源氏物語』の講読についての記載がある日は二十三日に及ぶ。翌々日の九月十九日には末摘花巻から花散里巻までを、二十日には「暮るゝほどに行きて須磨、明石ばかり聞きて帰らぬ」と続く。読む巻の量は日によつて違い、次の講読まで日が空くことはあるが、『源氏物語』の巻が途切れることはない。思うように講読が進まない日もある。二十八日の「今日は騒がしとて、殊更簀火の巻ばかりなり。」のように客人の訪れによつて一卷で終える日や、十月二日の「今日は梅が枝より若菜の半らばかりにて、暮れぬれば帰らぬ。」と日暮れを中断の理由とする日もある。また、十一月八日の「例の源氏総角なり。その後連歌なり。」と、一日の記載がこれだけで終わる日や、さらに短いと二十四日、手習。」と記載されるだけの日もある。この短く記載された日に続く記事が、九月十七日から始められた『源氏物語』の講読の最終日である。

廿七日、手習の残り、夢の浮橋果てぬ。やがて古今取り寄せて、一わたり読むべき由を言へば、主人興に入りて、家の秘本、記ある所には点合ひ、読みにくきことには声さしたる本を取り出で、これは起請を書きて、人に見せぬ本なれども、心ざしありがたければ、授け奉らんとて、まづその本を読むべし。悪き所どもを聞きて直さんとして、次第に点・声写し、難義を尋ね究む。秋の下にて日暮れぬ。 (『嵯峨の通ひ』)

十一月二十七日の記事である。「手習の残り、夢の浮橋果てぬ。」とあり、『源氏物語』五十四帖を三ヶ月間程で読み通したことになる。『嵯峨の通ひ』に記される古典の講読は、『源氏物語』では終わらない。雅有はこの日、講読が終了すると、「やがて古今取り寄せて、一わたり読むべき由を言へば、あるじ興に入りて」と、間を置かず、続けて『古今集』の講読を願い出る。為家もそれに快く応じ、九月十六日にあつた『伊勢物語』の講読の時と同

じように、家の秘本を披露するなどしている。この際、「これは起請を書きて、人に見せぬ本なれども」と秘本である旨を伝えながらも、「心ざしありがたければ、授け奉らん。」と、雅有の熱意を賞賛して、伝授すると言う。伝授の方法は、雅有が読むのを聞いて、為家が悪い箇所を直すというものであったらしい。秘本の句点などを書き写し、難しい箇所を質問し究めたとする。『古今集』の伝授を受けたばかりのこの日は、二十巻のうちの「秋の下」まで伝授されたところで日が暮れてしまったという。

『井蛙抄』巻六には、為家による『古今集』の伝授について、次のような記載がある。

又云。民部卿入道に、古今の説をうけむとて参ぜし時、法師にて聞書などはしなれたる程に、そのために定為をぐして侍しかば、今日はさしあふ事あり。後日に可来、之由被仰て、内々、なにとて人をばつれたるぞと被申し。仍、後日に一人まかりて、説をうけ侍りき。(注6)

『井蛙抄』巻六・雑談篇・二十七

孫の為世が「古今の説をうけんとして参ぜし時」のことである。この時、為世が伴っていたのは、法師であり弟の定為である。それにも関わらず、為家は、伝授を行うことをせず、二人を帰らせ、為世には「なにとて人をばつれたるぞ」と定為を伴ったことについて注意をしている。為世の手による記述ではなく、また伝授も家の秘伝であるためか、詳細は記されない。しかし、孫である為世には秘伝の伝授に関する厳しさを窺わせるが、『嵯峨の通ひ』においての雅有と相対する際、為家はためらいなく秘本を伝授している。為家の孫である為世は、雅有の甥にあたる。世代を越えた家の繋がりが、さらには血縁の上の繋がりもあり、結び付きが強いとは言え、雅有は秘伝を授けられる位置にはないはずである。『嵯峨の通ひ』で行われた講読について、井上宗雄氏が次のように述べておられる。

為家と阿仏尼との生活は源承和歌口伝や井蛙抄にみえる断片的資料によっても窺知されるが、「嵯峨のかよひ路」が最も詳しい。晩年の為家はすぐ「酔ひ泣き」したものとみえる。そして為家は博学で、極めて好学な人物である。阿仏尼は正しく才女である。(注7)

先に挙げた『古今集』の伝授の箇所をはじめとして、『井蛙抄』巻六の雑談篇に、為家に関する記述は多い。この記録は、為家の孫、為世に師事した頼阿の著である。その中で語られる歌人としての為家は、御子左家の秘伝を守る者として、厳格である。室町期に完成を見たと言われるこの記は、頼阿が居合わせた場のことを記したのではなく、為世からの聞き書であり、歌壇の逸話を集めた記録書である。井上氏の挙げておられる「断片的資料」のもう一方、歌学書『和歌口伝抄』においては、為家の二男である源承（為定）の記したものであるが、執筆された意図として、二条家と対立する冷泉家を徹底的に批判することがある。そのため、阿仏尼に関する記は特に批判の色が強く、章段に分けて分析的な見方をする記である。どちらも、記録的な面の強い文書である。それに対して、『嵯峨の通ひ』では、為家の歓待ぶり、阿仏尼による雅有評も温かみを感じられ、資料的な価値以上に、文芸的な価値も注目すべき点であると思われる。

『嵯峨の通ひ』は、十一月二十八日を最後の記事とする。



廿八日、巳の刻ばかりに行きて、古今廿巻を習ひ通して、奥書取りぬ。暮れぬれば、例の酒あり。主人のいはく、大納言未だこれほど委しく受け通したることなし。いはんや、源氏沙汰せず。又、こと人はた、かく細かに沙汰したる人、昔も今も聞かず。ありがたき由返す／＼色代せらる。大方は源氏にも古今にも不審残る所々あれど、外はなきに同じければ、これほど我が国の才学ある人はあらじと覺ゆ。更くれば帰りぬ。『嵯峨の通ひ』

『古今集』の伝授を始めて一日で、「古今廿巻を習ひ通して、奥書取りぬ。」と、伝授を終える。為家は、子の大納言為氏でさえ、このように委しく伝授を受け通したことはないと言ひ、『源氏物語』の講読も行っていないという。日記の最後は為家の雅有評と、雅有が古典講読に対する思いを述べて、『嵯峨の通ひ』は筆を置く。古典に触れ続けた、嵯峨の中院における記は、ここで終わりである。

この三ヶ月程の間に行われた古典の講読について、森田兼吉氏は、次のように述べておられる。

暦年によつて作品を分けるのではなく、主題によつて暦日を区切り、主題にふさわしい題名をつけるなど構想も働いている。『嵯峨のかよひ路』は、為家から『古今集』の秘伝を受けた十一月二十八日で終わっている。為家山荘での学習の終了した以上、この作品はもう続ける意味はない。(注8)

森田氏が「作品」と称されているように、日記『嵯峨の通ひ』は、先行の日記文学に触発されて書き始めたものであると、雅有自らが序で記している。「作品」として成立させることを目指し、雅有は構成に注意を払ったものと見える。途切れることなく続く、『源氏物語』をはじめとする古典の講読を記すのは、『嵯峨の通ひ』という日記が、題名にも表れるように、「嵯峨の中院に通ひ、古典に触れる日々」を書くものであったことを示す。同時に、中院に集う人々の心情や言葉を詳しく記している。雅有の『嵯峨の通ひ』は、『井蛙抄』のように記録性に目が行く作りのものでも、『和歌口伝抄』のように、批判的な目をもって記したものでもない。雅有が記したのは、講師として素晴らしい読みをする阿仏尼であり、家の秘本をためらいなく伝授し、古典に対する熱意を持ち続けている為家の姿である。そこには、教授する側とされる側という立場は違つていても、同じ目線で古典に親しむ者同士、真つすぐな姿勢が見える。

## 第二節 九月二十九日の記事

為家の嵯峨の山荘で行われた古典の講読が、『嵯峨の通ひ』の主題であると述べた。しかし、主題だけを絞って記せば、単調な日々の記録でしなくなってしまう。この日記中、雅有は古典の講読だけでなく、探題和歌や蹴鞠、紅葉狩りをした日なども記事に載せてい

る。そうした日々の一日として、『源氏物語』の講読が続く中、雅有は小倉山に近い、大堰河に出掛けている。

廿九日、今日は秋果つる日なれば、彼処に渡りて会あるべけれど、心地悩ましければ、行かず。さるほどに、いかゞ、今日は大堰河にて秋惜しむ歌よまざらん、と唆す人あれば、乗り具して行きぬ。夕づく日山の紅葉にうつろひあひて、疾き遅き色々見え分かれて、遅れさきだつ露のけぢめも思ひ知る。みぎはの芦の花、岸の雪かと、げにぞ見ゆるや。御所の前なる紅葉の、殊に色深き木のもとを占めて、三首の歌よむ。

ともなる人、懷より墨筆取出でたれば、河の水してみぎはの石にすりて書く。人の歌は覚え。悪けれど、その折の歌なれば、もらさず。(後略) 『嵯峨の通ひ』

「秋果つる日」、つまり秋の終わりの日である九月の最終日、二十九日の記事である。前日の二十八日には篝火巻の講読が行われたが、この日は気分が優れなかったので、為家の山荘であるはずの会には行かず、「いかゞ、今日は大堰河にて秋惜しむ歌よまざらん。」と、勧める人と連れ立って出掛けたのである。この日の大堰河の情景の描写に、雅有は和歌や漢詩を重ね合わせている。

769 水無瀬殿にて和歌よみ侍りけるに 定家  
夕づく日むかひの岡の薄紅葉まだきさびしき秋の色かな(注9) 『玉葉和歌集』

まず定家の歌を引歌とし、「夕づく日山の紅葉にうつろひありて」とし、夕日が山に照り映えて、紅葉のもう色づいているものや、未だ色づいていないものが見えろし、続く「疾き遅き色々見え分かれて、遅れさきだつ露のけぢめも思ひ知る」の部分は、次に挙げる元方の歌を踏まえる。

381 題知らず 元方  
遅く疾く色づく山も紅葉々は後れ先だつ露や置くらむ (注10) 『後撰集』七・秋下

色とりどりで、どの葉に早く露が置いたのか分かるという。さらに続けて詩句を用いて、秋の情景を描写する。

368 三秋岸雪花初白 一夜林霜葉尽紅 温庭筠  
『和漢朗詠集』卷上・霜

「みぎはの芦の花、岸の雪かと」の部分は、『和漢朗詠集』の上句の描写と重ねている。秋の三ヶ月のことを指す「三秋」であるが、ここでは、そのうちの九月を指す。九月の最終日に見ることのできた秋の情景(注11)である、水際の芦の花の白さがまるで初雪が降ったように見えることを記し、続けて「げにぞ見ゆるや」と、なるほど詩句にある通りの情景が見えるものだ、と言う。さらに同じ温庭筠の歌の、今度は下句の、一夜で林に霜が降り、葉が全て紅になったという一瞬を捉えた詩句の情景を踏まえ、「御所の前なる紅葉の、

殊に色深き木のもとを占めて、三首の歌よむ。」と、亀山御所の前にある紅葉の、とりわけ色が濃い木の下に座り、三首の歌を詠んだとする。先に挙げた、定家、元方、の二首の歌と温庭筠の詩句とを辿ると、雅有の見た大堰河の情景が出来上がる。雅有が、巧みに引歌を用いて情景を描写していることが分かる。そして、伴っている人が懷から墨と筆を取り出したので、水際の石で墨をすって書く。人の歌は覚えておらず、出来は悪いが、その折に詠んだ歌なので省くことなく載せるという。この日の記事には続けて「九月尽」の題で詠んだ自らの歌を配しているのだが、それらの解釈については次節で詳しく述べていく。雅有は「秋果つる日」であるこの、九月の最終日に大堰河を訪れたことで、こうした秋の情景を見ることができたということ強調している。

ここで、雅有が記している、大堰河で九月に和歌を詠むことについて見てみたい。行事として見ると、宇多天皇の大堰河行幸に遡る。『古今著聞集』には、紀貫之の手による仮名序が残されている。

亭子院の御時、昌泰元年九月十一日、大井川に行幸ありて、紀貫之、和歌の仮名序書けり。

あはれ、わが君の御代、なが月のここぬかと昨日いひて、のこれる菊見たまはん、またくれぬべき秋を惜しみたまはんとて、月のかつらのこなた、春の梅津より御舟よそひて、わたしもりをめして、夕月夜小倉の山のほとり、ゆく水の大井の河辺に御ゆきし給へば、久かたの空にはたなびける雲もなく、みゆきをさぶらひ、ながるる水ぞここにこれる塵なくて、おほん心にぞかなへる。(後略)(注12)

『古今著聞集』<sup>479</sup>亭子院の御時、大井川行幸に紀貫之和歌の仮名序を書く事・卷十四・遊覧

貫之の残した仮名序には続けて、大堰河の景物を用いた題で、貫之や貞信公ら六名の歌人の歌が配されていたのだが、その和歌の部分の多くが散逸してしまっている。雅有がこの日に大堰河に出掛けた日の描写は、この貫之の仮名序に準えたものであると考えられる。仮名序に「くれぬべき秋を惜しみたまはんとて」とあるのを受けて、雅有は「いかゞ今日は秋惜しむ歌詠まざらん」と言う人の言葉を記し、表現を仮名序と重ねている。また、「夕づく日、山の紅葉にうつろひありて」という表現も、仮名序の「夕月夜」を受けてのものである。

次に、日を追って進む『源氏物語』の講読の面から、この九月二十九日の記事について考えてみたい。まず挙げるのは、大堰河に出掛ける前日の記事である。

廿八日、入道の子の大納言為氏有馬より帰りて、初めてきたれりとして、消息あれば、ゆきぬ。今日は騒がしとて、殊更篝火の巻ばかりなり。主人方より、例の酒取り出でたり。連歌、殊に今日は上手そひたれば、聞き所あり。あはれなる句どもいできて、老人などは酔ひ泣きす。日暮れば、皆あかれぬ。『嵯峨の通ひ』

九月二十八日には『源氏物語』篝火巻の講読が行われている。為家の子・為氏が有馬から帰ったので、雅有は中院に会いに出掛け、同時に『源氏物語』の講読も行われている。「今日は騒がし」と、為氏の来訪を理由に、篝火巻だけの講読であった。後は、いつもの通り

酒が出され、連歌は上手が揃ったため聞き所があり、感極まった為家は酔い泣きをしたという。この翌日、雅有は大堰河に出掛けている。大堰河を訪れたのは「秋果つる日」、九月の最終日であり、翌日は月が替わって十月一日となり、暦の上でも、実際に目に見える景色も冬となる。

神無月一日、例の中院に行きぬ。行幸より檣柱に至る。今日は冬立つ日なるに、い

つしか気色ばかりしぐれて、軒の紅葉の争ひ落つるもうちつけなりと覚えて、艶あり。

主人もいと興じて、心に籠めて表はさざらん事、いと耐へがたしとて、冬五十首の題

を探りて詠む。(後略)

『嵯峨の通ひ』

十月一日には、『源氏物語』の行幸巻から講読が再開され、間に藤袴巻を挟んで、檣柱巻に至る。冬になったからであろうか、時雨模様で、軒の紅葉が争うように散り落ちるのも季節に合っており、風情がある。前日に大堰河で見た見事な情景は、「秋果つる日」を逃してしまえば、見ることでできなかった情景であったことが分かる。主人の為家もこの冬になつたばかりの情景を見て、心の内に収めたままでは我慢できないと、冬五十首の歌を題を探って詠む、という。以下、雅有も含めて居合わせた者たちの詠歌が十一首配されている。九月二十八日には篝火巻の講読があり、二十九日の大堰河の記事を挟んで、十月一日には行幸巻、藤袴巻、檣柱巻の講読があつたことが分かる。こうして見ると、九月二十九日に大堰河で「秋惜しむ歌」を詠んだとする記事は、やはり『源氏物語』講読の合間に行われた、遊興の一日であるように見える。

しかし、この日の記事を、講読の合間に行われた遊興の一日としてのみで捉えるには、問題がある。『源氏物語』の巻の順序としては、篝火巻の次に野分巻、そして行幸巻が続く。しかし、二十八日は篝火巻のみの講読であつたし、十月一日には、行幸巻から講読が始まつたことが記されている。二十八日に講読のあつた篝火巻と、十月一日に講読のあつた行幸巻との間には、本来、野分巻があるはずなのである。しかし、その間にあるはずの野分巻の講読が行われたという記載はない。嵯峨の為家の山荘で行われた『源氏物語』五十四帖の講読のうち、この野分巻の一卷だけが講読が行われたことが確認出来ない。また、文永六年の九月は小の月(注13)である。太陰暦で小の月は二十九日が月の最終日であるため、三十日は存在せず、翌日が十月一日となるのは間違いない。さらに、『源氏物語』の講読は、九月十六日に「明日よりは源氏を始むべき由を語らふ」とあるように、雅有が自ら願ひ出て、為家がその要請に応じて行われることになったものである。雅有が大堰河に出掛けていて不在の時に、嵯峨の中院で講読が行われたとは考えられない。この日は、中院で『源氏物語』野分巻の講読が行われていたはずなのである。しかし、雅有はそれを記さず、大堰河に出掛けたという記事とした。

『嵯峨の通ひ』九月二十九日の記事を改めて見てみたい。「いかゞ、今日は大堰河にて秋惜しむ歌よまざらん」という言葉を言つた「唆す人」に関して、実人名は不明である。また、同一人物であろうか、懷から墨と筆とを取り出した「ともなる人」という人物も不明である。『嵯峨の通ひ』の中で、雅有が伴って出掛けた人物は、名や官職名が明記されている。それが、大堰河に出掛けたとする日だけ、実に曖昧な記述となつてゐる。雅有は、架

空の「唆す人」を登場させ、事実を曲げて、大堰河で三首の「秋惜しむ歌」を詠んだと考えられる。そこには巧みに引歌を用い、この日に掛けたことにより見ることが出来た光景を描き出している。

このように見ると、貫之の大堰河行幸の仮名序と表現を重ねたことにも、別の見方ができる。表現の上で準えたということも勿論あるが、それだけではなく、仮名序にある「くれぬべき秋を惜しみたまはん」という言葉から、九月の最終日に日を設定し、「夕づく日」と記した時間帯も、仮名序の「夕月夜」を受けて定めたものと解したい。古典の講読のために嵯峨に通う雅有は、嵯峨に近い大堰河に当然出掛けたことがあるであろう。しかし、その日は九月二十九日ではなかった。従って、この日の記事を作り上げるために、大堰河行幸の仮名序を踏まえ、時刻と日付の設定を行ったのである。記事の構成に工夫を加えて、雅有は虚構の一日を作り上げたことが分かる。先に述べたように、『嵯峨の通ひ』は資料的な認識が強く、従って虚構の入り込む余地はないと考えられてきた。しかし、こうした根拠から、雅有の残した虚構の跡が見えるのである。

大堰河で「秋惜しむ歌」を詠んだとする九月二十九日には、実際には、為家の山荘で『源氏物語』野分巻の講読が行われており、雅有は、この日に大堰河には出掛けていない。事実は、いつも通りに中院で行われた『源氏物語』の講読に参加していたのである。では、『嵯峨の通ひ』で欠かすことができないはずの講読を省いてまで、雅有が大堰河に出掛けたことを九月二十九日の記事に記したのはなぜであろうか。

### 第三節 「秋惜しむ歌」と『隣女和歌集』

九月二十九日の記事、一日分を虚構で作り上げた雅有であるが、野分巻の講読の後に大堰河に出掛けたとしても良かったはずである。『嵯峨の通ひ』の中には、一日の記事に講読の後に行われた蹴鞠や神楽の練習、紅葉狩りに出掛けたことなどを併せて記す日も多くある。しかし、雅有は敢えて大事なはずの講読の方を省き、大堰河に出掛けたとする記事を優先している。雅有がこの日の記事で残したかったことは何なのであろうか。次に挙げるのは、第二節で挙げた九月二十九日の記事の続きである。雅有の詠んだ「秋惜しむ歌」三首が配されている。

#### 河九月尽

① 紅葉々の流れもやらぬ堰にも澱まずくゝる秋の月波  
九月尽恋

② 我涙けふは忍ばじ人間はゞ秋に別るゝ袖と答へよ  
九月尽述懐

③ 秋は尽きぬ袖は時雨の隙もなしあはれ三笠の山の名もがな

この所にて小倉、嵐をば捨てゝ、三笠の山をしも心ざす事、たよりなければ、中将を望む頃なれば、そこを託言にて詠めりしかど、今見れば、いづれもみな悪し。消つべくや。  
『嵯峨の通ひ』

これらは三首とも、雅有詠であり、大堰河の景物を用いた題詠である。まず、④の「河九月尽」の歌である。紅葉葉の流れきれない堰があったとしても、澱むことなく、河を括り染め込んでいる「秋の月波」であることだ、という。第五句の「秋の月波」は、次に挙げる歌の考え方を元にしていてと考えられる。

屏風に、八月十五夜池ある家に人あそびしたる所 源順  
171 水の面に照る月なみをかぞふれば今宵ぞ秋の最中なりける（注14）（『拾遺集』三・秋）

源順の歌の「月なみ」は、「水面に映った月」と、毎月、あるいは月の順序を表す「月次」の意を併せた意である。④の歌では、月が映った河という実景と、秋の月日が経つことを併せて詠み、月の流れは留まらず、惜しんでも九月は終わってしまうのだ、という感慨が見える。

次に⑤の「九月尽恋」の歌であるが、第一句で「我が涙」と、呼びかけの形をとる。私の涙よ、今日は流れるままにしておこう、もし人が涙の理由を問うことがあれば、秋に別れる涙で濡れた袖なのだと答えなさい、という。秋が去ってしまうことを悲しんでいるのであり、逢えないこと、あるいは失恋のために流す涙ではないのだ、とする。

最後に⑥の「九月尽述懐」の歌は、秋が終わってしまった、冬に降る時雨で濡れる袖は乾く間がないとし、袖が濡れるのを遮るための笠が欲しいという。その笠は、「三笠の山」の名を持つている。「三笠の山」は、近衛府の高官、つまり少将、中将、大将の異称（注15）であり、雅有は官位の昇進を望む心をこの歌に託している。この時の雅有は、正四位下で近衛少将（注16）であり、中将への昇進を望んでいた。「三笠の山」は、奈良にある山で、山麓には藤原氏の氏神を祀る春日大社がある。当然、京都の嵯峨から見ることはいできない。そのことを、⑦の歌の後で触れ、小倉山、嵐山を臨みながら、それらを題材とせず、「三笠の山」を心にかけることは、抛り所のないことであるが、中将を望む頃であったので、それを託して詠んだのだと記している。

「九月尽」の題で詠まれた「秋を惜しむ歌」三首のような題詠の場合、九月十三日には月百題の歌、神無月一日には冬五十首の歌を詠んだとする記事があるが、両日とも居合わせた人々の歌も記している。九月十三日の記事にある、月百題の歌の場合は、「このほかの人々の歌、またなほ歌数はありしかど、覚えずなりしかば書かず。」と雅有は記し、歌数が多くあり、覚えきれなかったので書かない、とする。百首歌のうち、十四首を書き記した上での、この注記である。十四首の内訳は、為家が六首、阿仏尼が四首、侍従基長が一首、そして雅有自身の歌の三首を含めての十四首であり、雅有詠の歌のみを記すというのではない。同じ注記であるのに、「人の歌は覚えず」と書く、大堰河の記事は、常の雅有の注記とは異なる。併せて、「悪けれど、その折の歌なれば、もらさず」、「今見ればいずれも皆悪し。消つべくや。」と記す部分も、三首の歌を省くことなく載せながら、言い訳めいた書き方をしている。この注記とも言える箇所は、大堰河に出掛けたとする日に記したのではなく、後になって、日記執筆時に回想を付すように記しているものである。本当に歌の出来が納得いかず、載せるべきでないと判断したならば、日記の構成時に省くことができたはずである。それにも関わらず、三首の歌を配したことには、雅有の何らかの意図があると考えられるであろう。

ここで、雅有の家集『隣女和歌集』について触れたい。『嵯峨の通ひ』の雅有詠の歌十二

首のうち、七首が『隣女和歌集』に収録されている。家集は、時間の流れと共に、詠んだ歌を配しているもので、詠んだ時の形を留めているものである。それに対して日記では、記事に合わせて歌を配す形をとり、日記構成時に作歌することや、既に詠んだ歌を記事に入れることもある。家集『隣女和歌集』には、④、⑤の歌は収録されていない。この日の記事では唯一、⑥の歌が『隣女和歌集』巻二に収録されている。

#### 述懐

869 秋はいぬ袖は時雨の隙もなしあはれ三笠の山の名もがな（注17）（『隣女集』巻一・雑）

同じ歌なのだが、題は「述懐」であり、詞書もない。雅有はこの「述懐」の歌を「九月尽述懐」の題に変え、さらに第一句を「秋はいぬ」から「秋は尽きぬ」に変えている。こうして、九月の最終日に詠まれたとする「秋惜しむ歌」の中に組み込んでいたのである。この歌が詠まれた時期は、『隣女和歌集』の巻二が、文永二年から六年までの雅有の詠歌が収録されている（注18）ことから、『嵯峨の通ひ』の他六首の『隣女和歌集』と共通する歌と同様、『隣女和歌集』から再録されたものである。それに対し、『隣女和歌集』には収録されていない、④の「河九月尽」、⑤の「九月尽恋」の歌は、この日の記事に合わせて、日記構成時に作歌したものと考えられる。

ここでは、⑥の歌に注目してみたい。この歌に見られるような、近衛中将の位を望む気持ちには、雅有の家集である『隣女和歌集』に多く表れている。

#### みかさ山

1518 こえわぶる三笠の山の峯のまつつれなき名のみとしはへにけり（『隣女集』巻三・雑）

転任事申し侍りしに、奏者心に入れずしてひさしくありて、五月五日雨のふり侍りしに、人のもとへ申しつかはし侍りし

1666 いかにせん我が身ふり行くさみだれにたのむみかさの山はかひなし（巻三・雑）

#### 除目

1667 この秋はわがなもらすなみかさ山さのみ時雨にそでやぬるべき（巻四・雑）

2548 中将を申侍しかどもかなはずして嘆き侍し頃、寄月述懐といふ事をよみ侍し中によそにのみみかさの山の峯の月うら山しくも月はみるよを（巻四・雑）

これらの歌に表れているように、この時期の雅有の昇進への思いは強い。『隣女和歌集』巻三には文永七年から八年までの詠歌が、巻四には文永九年から建治三年までの詠歌が収録されている。雅有の近衛中将への昇進が叶うのは、文永十一（一二七四）年（注19）であり、文永六年の日記である『嵯峨の通ひ』から五年も後のことである。家集では実景である「三笠の山」を臨みながら昇進が叶わぬまま年月だけが過ぎることを歎く。その歎きは人へ遣る手紙の中にも表れるほどで、この巻四・一六六番の歌は、後に『続拾遺和歌集』に収録されることとなる（注20）。また、「除目」の詞書の歌は、巻四・二五五番では「おなじころ、秋の除目ちかくなりて、さようの事うれへ申人のまうできて、歌よみ侍しつゝめでに」の詞書でも収録されている。さらに「寄月述懐」として詠んでいる歌は、同じ題で八首詠まれたうちの一首である。どの歌も思うに叶わぬ中将への位への思いを訴えてくる。近衛中将への昇進が叶うまでの五年間の間に、雅有は何度も「三笠の山」を詠み、中将の

位を望む気持ちと嘆きをこめていることが見える。

このことは、『嵯峨の通ひ』にはどのように表れているであろうか。近衛中将への昇進について、日記中では「転任の事」という語を用いて記されている。

廿四日、転任の事、院女房南御方良平公女に申さんとて、その甥こいの野寄の法眼良珍のもとに近ければ、君思ふとはなしに、例れいの二人連れて、徒歩よりぞ行く。さるほどに藤大納言為氏、来合ひたり。主人あるじまた酒取り出で、強しふ。これを聞きて、中院の入道、孫むまこの兵衛督ぐ為世具ぐして、また加はる。連歌一折して、日暮くるれば酔あひ乱れて帰るに、主人あるじの法眼もあり。道みちなれば、過ぎがたしとて、この家に乱れ入る。大納言ぞ酔あひ過ぎたりとて、京へ歸りにし。この白拍子出で、遊ぶ。思はずに出でたれば、人々驚おどろきて、殊けうに興あり。夜更ふくれば人々歸りぬ。

『嵯峨の通ひ』

十月二十四日の記事である。雅有は『嵯峨の通ひ』で官位の昇進を望むだけではなく、行動を起こしたことを記している。『隣女和歌集』の転任が叶うまでの間に詠まれた歌や、日記中に◎の歌に詠んだ官位を求める心、転任への思いや嘆きを、雅有は心の内に留めているだけではない。知人である野寄法眼を頼りに、南御方という女房に働きかけをしようとする。南御方は、野寄法眼の叔母で記事には「院女房」とあるが、それだけではない。十月一日の冬五十首の探題歌の記事で、座に居合わせた野寄法眼の紹介に「この歌は、月花門女院の御乳母の縁にて、御仏事など取り沙汰する人なり。今日もその御月忌にて、御仏事して歸りざまに立ち寄られたり。」とある。南御方は、月花門女院の乳母であり、その母・大宮院に仕えた女房であったとされる。後嵯峨院の第一皇女である綜子・月花門女院は、文永六年三月一日に二十三歳で没しており、同年のこの日、十月一日はその月忌に当たる。こうした仏事にも参加するほど、宮廷の中でも力を持っている南御方に働きかけることで、雅有は近衛中将への昇進を叶えようとしたのである。

雅有と法眼とは頻繁に行き来があり、雅有は法眼を自邸に招いたり、野寄に出掛けて行ったりもする。野寄法眼が関わる記事となると、これだけには留まらない。両者の付き合いは、親しい友人同士といった風である。しかし、やはり転任に関する記事に、野寄法眼は登場する。

二日、転任の事、内々書写法眼につきて、南みなみの御方に仮名かなの申文を付く。昨日、つくる由申さるゝによりて、喜よろこびに、野寄に向かふ。酒取り出で、すこし飲のむ。中院より使あり。浦より遠とほに、とあり。隔へだつるとはなきに、とて、すゝむし具ぐして行く。もとより大納言ありて、酒飲のみけり。すこし遊びてやがて歸りぬ。

廿二日、転任の事に、野寄のよの法眼のもとへ参まうでぬ。そのほどに、絹綿きぬわたのあまた中院へ遣る。暮くるゝほどに行きぬれば、源氏はなくて、酒を飲のみ飲のみて歸りぬ。

『嵯峨の通ひ』



十一月二日と二十二日の記事である。南御方に渡すよう、法眼に申文を託していたのが、渡したとの連絡を受けたようである。申文は、官位の昇進や任官についての申請書である。それを法眼が南御方に届けたとの知らせを受け、その礼のために、野寄に向かったとする。二十二日は、法眼の許を訪れたことしか記されていないが、おそらく南御方からの返答を受け取ったものと考えられる。

雅有は、『嵯峨の通ひ』の中で官位の昇進を叶えるために、行動を起こしたという事実を示しながら、その詳細は明らかにしない。さらに、「転任の事」だけを記して終わる日はない。続けて居合わせた人々との酒宴の様子を記し、『源氏物語』の講読はないものの、為家の山荘に出掛けたと記す。「転任の事」の記載がある日は、『源氏物語』講読の時と同じく、酒宴のことを記して日を終える書き方をし、講読の合間、あるいは講読と同じ日にあった出来事として雅有は記している。この点は、九月二十九日の大堰河の記事とは対照的である。

『源氏物語』の講読は、『嵯峨の通ひ』では欠かすことのできない事柄であるが、それと同じくらい、近衛中将の位を切望する雅有の思いが大きかったことが分かる。それを示すためには、大堰河に出掛けたことを講読と同じ日にあった出来事とする訳にはいかなかったのである。日記『嵯峨の通ひ』の中には、官位に関する記載は少なく、記載がある箇所も簡潔に済ますのが殆どである。官位を求める気持ちを書き省くことはしないが、かなり制限をして記しているように見える。『嵯峨の通ひ』の中で、雅有の官位を求める思いが顕著に表れているのは、九月二十九日の「秋惜しむ歌」のうちの◎の歌、「三笠の山」を題材に詠んだ部分である。この一首で、近衛中将の位を望む気持ちを強く打ち出していることが分かる。九月二十九日の記事で、この内情を吐露した和歌を配したからこそ、他の「転任の事」と記す記事を簡潔な記述に留めたと言っても良いであろう。『隣女和歌集』に収録されていない㊦の「河九月尽」、㊧の「九月尽恋」の歌は、日記構成時に作歌し、文永六年に詠まれた◎の「九月尽述懷」の歌に至る流れを作ったものと見える。この一首に『嵯峨の通ひ』における、「転任の事」に対する雅有の心情が集約されているのである。

#### 第四節 『嵯峨の通ひ』と虚構

九月二十九日に大堰河に出掛けたとする記事のように、雅有が日記中に虚構を用いるのは、『嵯峨の通ひ』が初めてのことではない。『嵯峨の通ひ』の前に成立した日記に、『嵯峨の通ひ』と同じ文永六年の『仏道の記』(注21)がある。この雅有最初の日記からも、虚構の箇所を指摘することができる。

『仏道の記』は四部構成で、(一)鎌倉から嵯峨、芦屋への上洛の記、(二)明石での観月の記、(三)仏道修行の記、(四)帰京と奈良、伊勢への旅の記がそれぞれ記されている(注22)。(一)の上洛の記は、明石を目指して旅程を大幅に省略して記し、(二)の明石での観月に間に合うよう上洛を急ぐ姿を記す。上洛した雅有は、(二)で「八月十五夜、去年の本意とげんと思へば、まだ暁、明石へと心ざして出づ」と、昨年から願い続けて叶わなかった中秋の名月を明石で見ることを、今年こそは実現させようと決意を込めて出掛けて行く。(一)で上洛を急いだ時とは対照的に、長い八月十五夜の様子が鮮やかに描かれる。次に挙げるのは、月を見るた

めに明石の浦に舟で漕ぎ出した場面である。

雨は降るとも、舟に乗りて漕ぎ出でんこそ、様変りたる思ひ出ならむとて、大きな  
る舟して、みぎは遠く出でぬ。おぼろなる波の上に、釣する舟の篝火数しらず。星か  
と見えて、今宵さへ猶□□□なり。少し更くるほどに、雲なごりなく晴れて、今ぞ此の  
浦の名目ひある。

『仏道の記』

雨は降っていても、舟に乗って漕ぎ出すのがいつもと違った趣向となり、思い出になる  
うかと大きな舟で、岸から遠く離れた海上で雲が晴れるのを待つ。ぼんやりとした月明か  
りの差す波の上には、釣りをする篝火が数えきれないほど多い。それが星かと思える程で、  
空と海とが一体化しているように見えたのである。この場面は、『伊勢物語』を踏まえた表  
現である。

帰り来る道遠くて、うせにし宮内卿もちよしが家の前来るに日暮れぬ。宿りの方を  
見やれば、海人の篝火多く見ゆるに、かの主人の男よむ。

晴るる夜の星か河辺の蛍かもわが住む方の海人の焚く火か

とよみて、家に帰り来ぬ。(注23)

『伊勢物語』八十七段)

「晴るる夜の星」とする『伊勢物語』と重なり合うように、夜が更けてきた頃に、雨も  
止み、雲も晴れ、念願であった明石の名月を見ることができたのである。雅有は続けて月  
が現れた喜びを記す。

歌どもありしかど覚えず。ある人、

宵の間に曇らざりせば月影のかくばかりやはうれしからまし

曇りなき明石の浦の月影に光添へたる海人の篝火

『仏道の記』

雅有自身も歌を詠んだようであるが覚えていないと記し、「ある人」が詠んだ歌を二首配  
している。宵のうちに曇らなかったならば、名月がこのように嬉しいものとして見る事が  
出来たであろうか、と言い、さらに、空を覆っていた雲がなくなり美しく照る月明かりに、  
一層光を添える釣舟の篝火であることだと詠む。

しかし、これらの歌が含まれている『隣女和歌集』巻二・秋を見ると、日記とは違う光景  
が見えてくる。

493 同夜にあかしにまかりて侍りしに、くもりて侍りしかば  
まちえたるこよひの月はくもれどもあかしのうらの名にぞなぐさむ

494 ふくるほどに、はれて侍りしかば  
よひのまにくもらざりせば月影のかくばかりやはうれしからまし

495 こころある人こそなけれあきのよの月も名高きうらのとまりに

496 昔よりおもひしことはこれぞこのこよひの月をあかしにてみる

497 舟のりて読侍りし

明石がたおきにこぎいでゝ月みるをつりするあまの名をやたつらん

498 あかしがたよき月よにこぎ行けばあはぢの島にちどりともよぶ

いさりびをみて

499 くまもなき明石のおきの月かげにひかりそへたるあまのいさり火『隣女』巻二・秋

「同夜」は「八月十五夜」である。ここでは、詞書を辿ってみた。家集では、「くもりて侍りしかば」と曇った空を歎き「明かし」の名に慰められることだとし、「更けるほどにはれて侍りしかば」と詞書して、三首を詠み、名高き月を賞する。そして、ようやく「舟のりて読み侍りし」と舟に乗って詠んだ歌を配す。月がはっきりと見えるようになってから、舟を海上に漕ぎ出している。日記には「雨は降るとも、舟に乗りて漕ぎ出でん」とあるが、家集からは雨が降っていた様子は見えない。そして、「いさりびをみて」詠んだ歌を配す。夜更けになり、ようやく雲が晴れたので月明かりの中、月を追うように舟を出したというのが現実であつたらしい。この箇所の日記と家集との差異に関して、佐藤恒雄氏は「家集の詞書や歌の配列が事実そのままであるという保証はどこにもないが、月もない降雨中の夜の海上へ船をくり出すことが現実的でないことを勘案するならば、事実は家集の自然さの方にあつたと思いたくなる。伊勢物語の一場面をふまえた行文ともども家集との比較の上で臆断すれば、この部分で雅有は、事実を曲げることとわず、現実を再構成しなおして、より劇的で印象的な効果をねらったのだと考えざるをえない。(注24)」と述べておられる。明石での観月を叶えることこそが目的であつた雅有は、その感慨を、一つの物語を語るように記しているのである。

また、家集の四九四番、四九九番の歌は、『仏道の記』で「ある人」が詠んだ歌と同じものである。ここに出てくる「ある人」の歌二首は、どちらも雅有詠として家集に収録されているものである。雅有は日記中で「歌どもありしかど覚えず。」としながら、別人の詠として二首を配す。この部分は、雅有が自らを臆化させて表現したものと解することができ、『嵯峨の通ひ』の九月二十九日の記事で「唆す人」、「伴なる人」と架空の人物を登場させたことと繋がる方法であると言える。名月を觀賞し、その感慨を歌に詠む人物と、雅有は同じ舟に居ながら、各々が別の方法で感動を表している。雅有は歌を詠むことなく、じつと月を見上げているのである。作者である雅有は、作中の人物と自らとを切り離しているように見える。

そうして月を眺めるうち、舟では酒が取り出され、連歌をする。

舟の中にて、酒飲み、連歌して、四五反、淡路島、明石の間を漕ぎ廻るほど、笛を取り出でゝ、折に合ひたる調子吹きて、海青楽吹くに、思ほえず漕ぎ来る舟より、笙・箏を吹き合はせたり、折からいひ知らずおもしろし。一、二反して、東の舟、西の舟、声たつることなし。

『仏道の記』

舟で淡路、明石の間を漕ぎ廻るうち、笛を取り出し、海青楽を吹いていると思いがけず漕ぎ寄せてきた舟から、笙、箏を吹き合わせた。それは「折りからいひ知らずおもしろ」

く、一、二度合奏した後は、「東の舟、西の舟、声たつることなし。」と沈黙し、皆が感慨に耽る。家集には、この散文の箇所に該当する詞書や歌は見当たらない。果たして現実であつたのであろうか。雅有たち以外にも、名高い明石の月を指して来訪し、舟を漕ぎ出し八月十五夜の月を眺めた人々がいたのかもしれない。情趣を解する人々がこの日、海上に集つたことを雅有は記す。しかし、この場面は、『白氏文集』の琵琶引に「東船西舫悄无言、唯見江心秋月白（注25）」とある部分を踏まえたものと見える。琵琶引の世界と重なり合うことで、この場面は一層印象的なものとなるのである。

『仏道の記』には他にも虚構の跡が見られる。明石での観月に続いて記される、(三)雅有の仏道修行の記である。

十月ばかり、昔朝夕馴れたりし人、藤衣にやつれて、上なき道にのみ心を深くかけて、国々を歩きしに、唐土へ渡らむの心ざしにて、道なればこの所に廻りきぬ。やう／＼にこしらへいひて、この外山の奥、み山の麓に、里より五十丁ばかり登りて、昔寺房などありけるが、今はあと／＼見ゆる礎だになし。かしこに庵を結びて、昔の跡をおこし□□たたるを継ぎて住むべき由をいひ□□れもさるべきにこそとて、留まりぬ。『仏道の記』

旧知の者が雅有の許に僧衣で訪れ、諸国を行脚していたが、唐土へ渡りたいのだと言つて来た。雅有はこれを、言葉尽くして宥め、近く山奥に庵を結んで住むように言い、「昔朝夕馴れたりし人」もこの説得を受け入れ、逗留することになる。この雅有最初の記を『仏道の記』と呼ぶのは、奥書に「右雅有卿佛道の記也、奥端欠、且所々不足歟、此内之御詠、隣女集ニアリ」と、雅有の後裔、飛鳥井雅威の手によって記されていることに起因する。明石での観月の場面と共に、この日記で多くの紙面を割き、情感豊かに記される場面であることから、雅威はこの場面をこの記の中心と見たのであろう。雅有が仏道修行に関わる様子が綴られている。雅有自身、仏道修行に取り組んでいる様子も記している。

廿日ごろ、嵐いと激しき夕暮れ、心の澄むにまかせて行きぬれば、日は入りぬ。やがて止観の正修行の所読み、談義して、座禪時を移すに、柴垣の真白く見ゆるに、明けぬる心地して、松の戸を押し開けたるに、霜夜の月光ことに清く、心の闇も晴れぬらんかし。庭に立ち出で、見るに、三千世界は眼の前の氷のほか、敷くものぞなき。木末を渡る嵐に類ふ峰の猿の声、軒端に畳む岩根を落つる滝の響き、またなくあはれるなるは、かゝる所の住居にや、とばかりありて、やう／＼明け行く空に横雲かきくれて、降りはじめたる雪、ことに寂しさまる心地して眺めたるに、高き峰、険しき巖□□みあてたる雪の空より降り来るさま、雲井に見ゆる滝と覚えたり、里にては、かゝる雪はいまだ見慣はず。いかにも日ごろに色にし□□心は移りはて、眺めたる

を、かの心清く、憂き世を思ひ離れたる、聖心に諫められて、また立ち帰へる空しき  
床の上、壁に向ひぬる。  
『仏道の記』

心澄むまに、庵に向いたところで日暮れとなった。そのまま摩訶止観の正修行の箇所を読み、説法を聞き、座禅を組んで、しばらくすると、柴垣が真っ白に見えて、夜明けのような気がして松の戸を押し明けた。霜の置いたような夜月の光はとりわけ清く、「心の闇も晴れぬらんかし。」という。庭に下り立って見渡すと、「三千世界は眼の前の氷のほか、敷くものぞなき。」とし、次第に明けて行く空に、雲が広がり、雪が降って来る様子に、「心は移りて」物思いに耽ってしまう。心を澄まし、俗世への執着を断ち切った聖の心を経て、再び修行に専念しようと、床の上で、壁に向かって座った。雅有の葛藤と共に、真っ白に冴える月光から、夜明け、雲が空を覆い、雪が降って来る情景の描写により、時間の経過が見える。心を仏道修行に向けたかに見えた雅有であるが、それも長くは続かない。

かくて三日ばかり籠りゐて、帰りざまに、深山の苞にて、みづから垣穂の真木の下  
枝伐りつゝ、炭焼き待るとて

思ひきや真木立つ山に炭竈の煙立つる身とならんとは

今は我れ葎の宿に門鎖して無しと答へて住むべきものを

やがて住みはてぬ心よわさのみづから悲しくて

朝夕は我とわが身をいさめても背かれぬ世の果てぞ悲しき  
『仏道の記』

籠ってから三日目、雅有は下山する旨を記す。帰る間際に「深山の苞」として、雅有自らが垣根にした木の下枝を切り、炭を焼いたという。この三首の歌を配し、俗世を離れられなかった自らを歎き、仏道修行を終える。ここから、雅有が記そうとした心情を読み解くことも必要であるが、ここでも事実と乖離した記であることに注目したい。雅有が仏道修行に対して憧憬の念を持っていたことは確かだが、雅有自身が身体を動かし、庵を結び、仏道修行に専念したとは思えないのである。家集から、日記に記された事実との乖離が見える。

山ふかきいほりにまかりて炭やくをみ侍て

829 おもひきやまきのと山のたにのとにけぶりをたててすみやかむとは『隣女』巻二・雑

『仏道の記』では、自らが木の下枝を切り払い、炭を焼いたとし、同歌を配している。しかし、家集からは、雅有自らが炭を焼いたという事実は見えない。思ってみたであろうか、木々の茂る外山の谷の入り口に煙を立てて炭を焼いていようとは、と驚きの籠った歌を詠んでいる。佐藤恒雄氏が「雅有は決して本気で仏道修行に入ろうなどと考えてはいない。仏道修行も観月と同じ次元の風流韻事としか認識していないといってもいいだろう。雅有はただ、なまの事実や感動を矯めなおし、仏道へ志深く、修行をしてみたけれども、結果、かくして住み果てぬ身を悲しみながら下山するという、一場の物語を構成し、自らをその主人公として描き出したのである。(注26)」と述べておられるように、この箇所も、

明石での観月の場面と並んで物語的に記された部分なのである。雅有は、自ら炭を焼くようなことはしていない。仏道修行に憧れを持ち、見知ったことを自らに近づけて記したのである。綿々と仏道修行に対する思いを記し、実体験ではなく見て知った出来事を、自らが行ったこととして主体的に記している。最後に、庭先の情景を見て、仏道修行から切り離されたとする描写は印象的である。『仏道の記』の大きな二箇所は、事実を大幅に改変して、一方は自らと切り離し客体化して月を眺め、一方では自らに近づけて主体化し、仏道修行に専念しているように記していることが分かる。一編の日記の中に、二つの方法を用いていることが見えてくる。読み解くと対照的に見える虚構の方法(注27)であるが、どちらも日々の記録というよりも、物語化、作品化を目指しているのである。

『嵯峨の通ひ』からは、一見すると、『仏道の記』に見られたような事実の改変は見えてこない。しかし、九月二十九日の大堰河に出掛けたとする記事ほどではないが、『嵯峨の通ひ』には他にも虚構の痕跡が見える。

廿四日、朝顔がほより初音はつねに至る。昨日聞ききし巻まきに、小鳥ことりを萩の枝えだに付つくことありき。

折節ふし、小鳥ことりを人のもとより贈おくる。萩の枝えだに付け、酒具さけぐして、二人自ら持ち持ももちて、主人しゅじんの前に置をく。殊けうに興あぜらる。主人方あるじがたよりも酒取り出いで、殊ことに興ある日なり。連歌れんが例れいのことなり。今日は帰りぬ。

『嵯峨の通ひ』

この九月二十四日の記事については、雅有の『源氏物語』享受の一端として第二章で詳しく述べるが、松風巻の講読が前日にあり、それに合わせたかのように「折節」、ちょうど小鳥が人の許から送られてきたので、それを持って嵯峨の中院に出掛けたとある。雅有が手配した小鳥を「折節」人から贈られたものだ、と言ったと考えられる。ここからこの日の『源氏物語』に準えた趣向は始まっている。「昨日聞きし巻」は、『源氏物語』松風巻のことを指す。

今日は、なほ桂殿にとて、そなたさまにおはしませぬ。にはかなる御饗応と騒ぎて、鶺鴒せいらども召したるに、海人のさへづり思し出でらる。野にとまりぬる君達、小鳥しるしばかりひきつけさせたる萩の枝など苞かぶにしまいれり。大御酒あまたたび順流れて、川のわたりあやうげなれば、酔ひに紛れておはしまし暮らしつ。おのおの絶句など作りわたりて、月はなやかにさし出づるほどに、大御遊びはじまりて、いといまめかし。

『源氏物語』松風巻

雅有らが為家の山荘を訪れて、小鳥を「萩の枝に付け」たものを土産として持参することとを始めとし、主人の為家が酒を取り出すこと、酒宴の後に作歌するに至る、全ての行動が、松風巻と趣向を合わせて記されていく。為家らとの講読の延長として、実際の行動でも、日記中の表現の上でも、少しの事実の改変によって趣向の凝らされた場面を作り出すことに成功しているのである。

また、九月二十九日の大堰河に出掛けたとする記事以外で、「転任の事」に対する心情を見せないことも、意図的な省略であるとすれば、雅有が日々の出来事やそれに伴う心情か

ら、『嵯峨の通ひ』に乗せるべきことを選び取ったことが見える。「転任の事」で重要な役割を負っていた野寄法眼との別れの歌を遣り取りする場面でも、『隣女和歌集』との異同から見えてくるものがある。

廿日、宿木の残り、東屋果てぬ。書写法眼、いまだ野寄にも帰られずして、京に居られたれば、文を奉る。やうくの戯言いひ、下り近き由書きて、奥に別れなん後ぞ知らるゝ同じ世の都の中も隔て有る身は返し

同じ世の隔てもつらし嶺の雲誰が心よりかゝり初めけん

また久しく障る事どもありて、会はぬ人のもとへ、申し遣り侍りし。

芦分くるみなとの小舟うきふしに障りがちなる程を恨むな返し

芦分くるみなとの小舟さもこそは思はぬ方の障るなるらめ

『嵯峨の通ひ』

雅有の下向が近いことを伝え、野寄法眼と別れの歌を交わしている。雅有は、同じ世でありながら「隔て」があるためすぐには会うことの出来ないお互いのことを詠み、法眼からの返歌も、同じ世に居ながら隔てがあるのはつらいことで、高い峰に雲が懸かるように、誰の心により懸かり初めたのでしょうか、と別れを惜しむ。その後配されているのは、「また久しく障る事どもありて、会わぬ人のもとへ、申し遣り侍りし」歌で、雅有から恋人と思われる相手に宛てた歌のようである。湊に芦を分けて入る小舟のように、差し障ることが多いので、逢うことが妨げられることを恨みに思わないで欲しいのです、と雅有は詠み、相手からは、自分の他に思う相手がいらつしやるために逢うことが妨げられるのでしょうか、と切り返された歌が贈られてきている。しかし、雅有が贈ったとされる歌は、『隣女和歌集』巻三には次のように収録されている。

1477 寄舟恋  
あしわくるみなとのを舟うきふしにさはりがちなるほどをうらむる

『隣女和歌集』巻三・恋

『隣女和歌集』では、「寄舟恋」と詞書され、女性の立場で詠まれた、題詠の独詠歌であったことが分かる。誰かに宛てて贈った歌ではなかったのである。それを雅有は日記に、第五句を「程を恨むな」と変え、恋人と思われる女性に向けた歌として配し、それに恋人からの返歌を加えている。この題詠の独詠歌を用いる方法は、『嵯峨の通ひ』の成立年次に関する問題も孕んでいるため、第三章で改めて述べるが、野寄法眼との別れの歌を交わした後、この二首を配したことは、この日を都と親しい人々との別れの場として設定していることが考えられる。

従来の論では、雅有の他の四編の日記、特に『仏道の記』と比べて、『嵯峨の通ひ』には虚構あるいは構成に伴う事実の改変は無いものと考えられてきた。なぜなら『嵯峨の通ひ』の日を追って記事を書き連ねていく構成からは、虚構の日を組み込む余地が見当たらない

からである。それ故、『嵯峨の通ひ』の評価は、古典講読の様子を知らせる資料的な側面に目が向けられてきた。しかし、先に挙げたように、実際は事実を改変した箇所には、それぞれ雅有が描き出したい事柄や場面があることが分かる。教授されたばかりの『源氏物語』を一日の中の行動に取り入れ、為家たちと共に趣向を凝らした日とし、下向の時が近づいた折の歌を記すだけでなく、贈答歌を連ねて別れの場面に演出を加えることもしている。その虚構の中の一つ大きなものが、九月二十九日の大堰河に出掛けたとする記事なのである。

『嵯峨の通ひ』の序に相当する部分で、雅有が「土佐の日記、紫の日記、更級の日記、蜻蛉の日記など」に触発されて日記執筆に至った旨を示しているが、雅有は為家から届けられたこれらの日記を記録としてではなく、物語に近いものとして捉えたのであろう。これらの日記作品を踏まえて、『嵯峨の通ひ』は、日次日記の形を取りながら、『仏道の記』と同じく、作品として作り上げようという意識が働いているものと考えられる。それは、読者を意識した作りであるとも言うことができる。前節までで指摘してきたように、『嵯峨の通ひ』には、一日の出来事全てが虚構である記事までも存在する。九月二十九日に、本来あるはずの野分巻の講読が無いことに気付かなければ、『源氏物語』の講読の合間に行われた遊興の一日と読める。大堰河に出掛けたとする記事には、読む者が容易には気づかないように工夫が凝らされている。視覚的な効果として、引歌や『和漢朗詠集』の詩句を用い、水際の芦や紅葉による色鮮やかな大堰河の「秋果つる日」の情景を描き出し、九月二十九日の夕刻に大堰河で「秋惜しむ歌」を詠むことの意義を強調する。秋の終わるこの日に、大堰河に出掛けたことと見ることのできた情景を受けて、歌を詠んだ、とする。さらに貫之の手による宇多天皇の大堰河行幸仮名序の時刻や場面を投影して、この日の記事を事実として読ませる。この日の記事には、一編の日記の調和を乱さないようにしながら、そこには譲ることのできない心情が込められている。抑えることのできない心情を吐露する場として、この日の記事は作られたのである。挿入された記事は極めて自然であり、古典の講読という大きな主題が揺らぐことはない。『仏道の記』の明石観月の場面のようになり、ひたすら印象的に物語的な記を目指しているのは、日次日記として破綻をきたしてしまふ。方法としては、『仏道の記』の仏道修行に専念しようとする姿を綿々と綴ろうとした場面に近い。この『嵯峨の通ひ』の構想としては、現実よりも真実らしく記すということが雅有の目指したところであったようである。それを可能にする方法として、雅有は『嵯峨の通ひ』でも虚構を用いているのである。



## 第二章 雅有の『源氏物語』享受

### 第一節 雅有の日記と『源氏物語』

『嵯峨の通ひ』には、為家・阿仏尼夫妻から『源氏物語』の講読を受ける雅有の姿がある。第二章では、『嵯峨の通ひ』における主題である、『源氏物語』と雅有との関わりについて触れたい。『嵯峨の通ひ』の中で雅有は講読の様子だけでなく、日記中の表現にも『源氏物語』を重ね合わせている。

十六日、秋の雨、時雨めきて、風の音も野分だちながら、いと激しからず、いとおもしろき日なり。もの思ふ萩の下葉は気色ばみて、今よりの寝ねがて思ふも悲し。彼処の寂しさ思ひやられて、例の二人連れて渡る。  
〔『嵯峨の通ひ』〕

九月十六日の記事である。秋の雨が、さながら冬の時雨のようで、風の音も嵐のように荒々しいものの、そう激しくもなく、たいへん風情のある日である。この部分には、『古今集』が引歌として引かれている。

題知らず

読人知らず

221 鳴き渡る雁の涙や落ちつらむ物思ふ宿の萩の上の露（注28） 〔『古今集』巻四・秋上〕

220 秋萩の下葉色づく今よりやひとりある人の寝ねがてにする 〔『古今集』巻四・秋上〕

物思いに沈む萩の下葉は色づき、今から先の寝付かれない秋の夜長が訪れることを思うと悲しい、と言う。そして、「彼処の寂しさ思ひやられて」と為家のことを思い遣って、雅有と弟の基長は嵯峨の中院に出掛けて行く。これは秋の寂しさと共に、同月の十三日に「言問ふ人もなくて、今宵も寂しく眺めて一人侍りつるに、渡りたまへるにこそ、さらに昔恋しく思ひ出づる事多くて」と雅有らの訪れを、喜びの涙を流して迎えた為家の様子が背景にある。この後、雅有は『伊勢物語』の難解な箇所を為家に問い、『源氏物語』の講読を始めて欲しいと要請する。『古今集』の引歌の箇所の前に、「秋の雨、時雨めきて」とある部分は、『源氏物語』蓬生巻に重なる表現がある。

雨そゝきも、猶秋のしぐれめきてうちそそけば、「御傘さぶらふ。げに木の下露は雨にまさりて」と聞こゆ。御指貫の裾はいたうそぼちぬめり。 〔『源氏物語』蓬生巻〕

季節は異なるが、蓬生巻にも「雨そゝきも、猶秋のしぐれめきて」という表現がある。源氏の訪れを、独り待ち続ける末摘花の許を、源氏が須磨から帰還して初めて訪れる場面である。指貫の裾を濡らし、惟光と共に源氏は故常陸宮邸を訪れる。訪れる人の絶えた邸という点で、嵯峨の中院で風流を解する人の訪れを待つ為家の姿とも重ねて、用いた表現であろうか。次に挙げる記事も、時節に関係する表現である。

神無月一日、例の中院に行きぬ。行幸より檣柱に至る。今日は冬立つ日なるに、い

つしか気色ばかりしぐれて、軒の紅葉の争ひ落つるもうちつけなりと覚えて艶あり。  
主人もいと興じて、心に籠めて表はさざらん事、いと耐へがたしとて、冬五十首の題  
を探りて詠む。  
『嵯峨の通ひ』

いつも通り嵯峨の中院に出掛け、講読は行幸巻から横柱巻に至っている。月が変わり、  
暦が冬になったということで、軒の紅葉が争うように落ちるのも、急なことと見え、暦に  
合わせたかのように思えて、風情がある。主人の為家もたいへん面白がつて、心の内に収  
めたままにしておくのは堪え難いことだと言つて、冬五十首の歌を探り題にして詠む、と  
ある。この箇所は、夕顔巻の次に挙げる箇所の影響が考えられる。

けふぞ冬立つ日なりけるもしるくうちしぐれて、空のけしきいとあはれなり。なが  
め暮し給て

過ぎにしもけふ別るゝも二道に行くかた知らぬ秋の暮れかな  
なをかく人知れぬことは苦しかりけり、とおぼし知りぬらんかし。

『源氏物語』夕顔巻

「けふぞ冬立つ日なりけるもしるくうちしぐれて」と、冬の訪れは同様の表現を用いて  
いることが分かる。夕顔巻でも、季節の訪れを感じて歌を詠んでいる。また、『嵯峨の通ひ』  
は冒頭で、嵯峨について「かゝる所の秋のあはれは、いづくよりも心とまる」と、ある部  
分が、「またなくあはれなるものは、かかる所の秋なりけり。」とする『源氏物語』須磨巻  
と重なり合う。さらに講読が進むにつれて、雅有は阿仏尼に勧められて和琴を奏で、野の  
「苞」として小鳥を荻の枝に付けて、為家の待つ嵯峨の中院に持参し、絹と綿とを為家ら  
に送るなどと、『源氏物語』の場面を模した行動も行うのだが、この点については第三節で  
述べる。

『嵯峨の通ひ』で初めて日付が記される記事には、次のようにある。

長月の中の十日あまり三日の夜なれば、名を得たる月なり。さるは、嵐山の近きし  
るしにや、小倉の山の名を変へて、雲霧もなく晴れたる空に、華やかにさし昇る月の  
さやけさ、見ん人、心の隈も晴れぬべし。かゝる所の今宵の月を、たゞなほざりに見  
んこと、いと口惜しかるべしとて、すゝむしなる人を誘ひて、見る人も人、と言ひて、  
かの入道の山荘へ行きぬ。主人出で、喜ぶ。  
『嵯峨の通ひ』

ここでは、実景である「嵐山」、「小倉の山」を文中に記し、嵐の名を持つ嵐山が近い証  
拠か、小暗いを連想させる山の名にふさわしくなく、雲霧も吹き払われたように晴れ渡つ  
た空と、「華やかにさし昇る月のさやけさ、見ん人、心の隈も晴れぬべし。」と月を賞し、  
清く澄んだ月により、見る人の心の内の曇りも晴れることであろうと言う。その名月を、  
風流を解する為家入道と見ようと、雅有は嵯峨の中院へ出掛けて行くのである。

この場面の描写にある「長月の中の十日あまり三日の夜」、「華やかにさし昇る月」、そして「小倉の山」という語句との繋がりで、『源氏物語』夕霧巻に似た場面を見つけることができる。

道すがら、あはれなる空を眺めて、十三日の月のいとはなやかにさし出でぬれば、小暗の山もたどるまじうおはするに、一条の宮は道なりけり。いとどうちあばれて、未申の方の崩れたるを見入るれば、はるばると下ろし籠めて、人影も見えず。月のみ遣水の面をあらはに澄みましたるに、大納言、ここにて遊びなどしたまうし折をりを、思ひ出でたまふ。

見し人の影澄み果てぬ池水にひとり宿守る秋の夜の月

と独りごちつつ、殿におはしても、月を見つつ、心は空にあくがれたまへり。

(『源氏物語』夕霧巻)

九月の十三日の月夜のことである。夕霧は一点の曇りもない月明かりの中で、通りかかった一条の宮に、今は亡き柏木の大納言を思い起こし、秋の情景を歌に詠む。ここに出てくる「小暗の山」は、雅有の地の文と同様の「小暗」であり、月明かりによつて辿る夜道も明るいという情景を示す語句である。ただし『嵯峨の通ひ』とは異なり、实景の小倉山ではない。この場面は、落葉の宮の滞在する小野の山荘からの帰り道の、夕霧の様子を記した部分であり、そこには落葉の宮との通わぬ心に悩む心情も含まれている。したがって、「心は空にあくがれたまへり」という夕霧の様子なのである。静かに広がる「月のみ遣水の面をあらはに澄みましたる」情景とは対照的に、夕霧の心は穏やかではない。

この記事と夕霧巻との語句の一致は、雅有の意図的なものであろう。物思いの原因は異なるが、雅有の記事からも、この場面の夕霧と似た心情を窺うことができる。「心の隈(注29)」は、心にある曇り、陰りであり、転じて人知れず抱いている考え、抱え込んでいる悩み事の意となる。雅有は自らの「心の隈」について、内情を明かすことをしないが、『嵯峨の通ひ』の冒頭で「早くより病身を去らぬものなれば、近き衛の名のみして雲居のよそに隔たりて」と病のために出仕のままならないことへの歎きを記し、九月二十九日に大堰河に出掛けたとする記事に虚構を用いて吐露した心情などを合わせて考えると、近衛中将への昇進を望む心を指すと見える。

九月十三日の記事には、嵯峨の中院に集った為家、阿仏尼、基長、雅有らで月百首の探り題の和歌を詠むこともあって、「見ん人」を「歌の心得をもつて見る人(注30)」と解すこともできる。しかし、雅有が抱えている「心の隈」は、『嵯峨の通ひ』の中で大きなものである。ここでは「見ん人、心の隈も晴れぬべし。」という言葉に、本来であれば晴れるはずの心の内の曇りが、自分は晴れないのだ、と嘆く心情が込められているものと見たい。雅有の心は「華やかにさし昇る月」のある情景とは、かけ離れた場所にあり、夕霧の「月を見つつ、心は空にあくがれたまへり。」という様子と重なり合うのである。雅有の心情が見える箇所が少ない中、この部分は内に秘めていた思いを文中に表した箇所となった。こうした内に秘めた思いが積み重なった結果、九月二十九日に太堰河に出掛けたとする記事のような形で表出されることになったとも言えよう。

また、『源氏物語』の講読が始まる前である「長月の中の十日あまり三日の夜」に、『源

氏物語』と同じ語句、描写を用いたことは、これから始まる講読の導入として、意図的に入れたものと考えることができる。この記が回想記であることは「過ぎにし方のことをも思ひ出だして書き加ふべし。」という言葉や、九月二十九日の記事にも後から書き加えた注記と見える箇所があることから、『嵯峨の通ひ』の成立は、十一月二十八日の講読を終えた後であると考えられる。全ての講読を終えた後に雅有が加筆した箇所であるとも考えられる。しかし、ここでは『嵯峨の通ひ』の冒頭であるこの箇所に『源氏物語』を連想させる語句を用いたことに注目したい。この箇所では雅有は、自らの心情を『源氏物語』の夕霧と重ね合わせるとともに、『源氏物語』の素養があることを示しているのである。

## 第二節 雅有と『源氏物語』

では、『嵯峨の通ひ』に見える、雅有の『源氏物語』の素地はどこで養われたのであろうか。ここで、雅有と『源氏物語』との関わりを整理してみたい。まずは、文永六年以前の雅有の動きを追ってみたい。雅有は、京の朝廷に仕えると同時に、鎌倉幕府にも仕えていた。次に挙げるのは、『吾妻鏡』には、建長二（一二五〇）年三月二十六日の記録である。

廿六日、壬辰、天晴る。將軍家、旅の御所において御遊宴等あり。（中略）次に御鞠會あり。二条侍従仰せを承り、人數を注し申さるる間、秋田城介義景奉行として、巳の一點、人々を催す。午の下剋、教定朝臣以下參進す。武藤左衛門尉・塩飽左近入道をもつて、上鞠の事、教定朝臣に御問答あり。兼教朝臣上鞠の役たるべしと云々。その後、大夫雅有十歳。御鞠を懸の中に置く。教定朝臣その計を計ひ立つ。（注<sup>31</sup>）

（『吾妻鏡』第四十）

將軍家の旅の御所で行われた蹴鞠会のことである。雅有の父・教定の名が見える。蹴鞠の作法の一つである、鞠会の最初に鞠を蹴り上げる役、「上鞠の事」について誰が行うべきか、教定に問いかけがあり、教定は兼教朝臣がその役を行うと良いと答えている。十歳の「大夫雅有」は、鞠を鞠場に置く、置鞠の役を務めている。この日が、『吾妻鏡』に雅有が登場した最初の記録である。この時の將軍は、五代將軍・藤原頼嗣であったが、この二年後の建長四（一二五二）年から、六代將軍・宗尊親王となる。後嵯峨院の皇子であった宗尊親王に、雅有は父と共に仕え、それは親王が謀反の疑いをかけられて將軍を廃される文永三（一二六六）年まで続いた。十二歳から二十六歳まで、雅有は鎌倉において宗尊親王に近侍したことになる。この間に幾度も行われた「御鞠會」には常に教定と雅有の名があり、康元二（一二五七）年には教定と共に宗尊親王に供奉し鶴岡八幡宮に参詣、弘長三（一二六三）年八月一日には、「御所において五首の和歌の題を人々に下さる。二條少將雅有朝臣これを奉行す。」と、和歌に関する事柄にも雅有の名は登場する。

そんな中、教定、雅有の名は見られないが、二人が傍近く仕えた親王の許では源氏談義が行われている。『吾妻鏡』の建長六（一二五四）年十二月十八日の記載には次のようにある。

建長六年十二月大 十八日 丙戌

御所において源氏物語の事御談議あり、河内守親行これに候す。〔『吾妻鏡』第四十四〕

宗尊親王に『源氏物語』を進講した河内守親行とあるのは、源親行のことである。鎌倉を本拠とし、『源氏物語』の諸本のうちの河内本を校訂した人物であり、雅有との贈答歌が『隣女和歌集』に残されていることから、両者の間には交流があったものと見える。鎌倉では『源氏物語』が学問として確立していた。しかし、雅有が鎌倉でどのように『源氏物語』に触れたかという確かな記録は存在しない。

雅有と共に親王に仕えていた父・教定は、文永三（一二六六）年に疱瘡で没し（注<sup>32</sup>）、同じ年に雅有は鎌倉での任を解かれていた。そして、宗尊親王も将軍を廃され帰京を余儀なくされる。雅有が『源氏物語』を学ぶ契機となった事柄について、松原正子氏の次のような意見がある。

これ迄に『源語』の解明を究明せんとするには、何か目標と契機があっただろう。

私は、この契機を父の没する数年前の事件、つまり、『源氏物語絵巻』から普遍した將軍家親王御前の〈屏風の色紙〉が制作されて、父が奉行を務め、その際、家隆の女（或は孫）小宰相から〈絵〉と〈本〉との矛盾（使用した本の異なるのによる）を指摘され、それに携わった者達との論争が行われた事と見做したい。というのも、父は二度目の反駁を受けた折は、反論せずして没してしまっただけである。この事から、父は無念を残して世を去った事が推察され、同時に、二十才余りの青年雅有が、それを見過ごし得なかったであろう事も容易に推察される。（注<sup>33</sup>）

この「事件」は『源氏絵陳状』と呼ばれる文書に残されている。次に挙げるのは、その冒頭の記述である。

当將軍三品親王の御前の屏風の色紙形の源氏の絵かき、弁の局、長門の局、絵の奉行人まさたか、二条兵衛督、前中将雅経の子息、かくれてのち、將軍家の女房小宰相の局は、これ宮内卿家隆の孫なり、難せられけるよし披露によりて、兵衛督ならびに弁の局、長門の局の陳状。（後略）（注<sup>34</sup>）

「当將軍三品親王」は雅有父子が仕えた宗尊親王のことであり、「絵の奉行人まさたか」と記されている人物が教定のことを指している。「二条兵衛督、前中将雅経の子息」とあり、ここから当時の官位、雅経の子であるという点から、教定であると判じられる（注<sup>35</sup>）。將軍家に伝えられてきた源有仁、藤原忠通の手による『源氏物語絵巻』を元に描いた「屏風の色紙形」に、小宰相の局が「難せられるよし披露によりて」と、激しい批判をし、將軍の元に訴状を提出したのである。これに教定をはじめ、弁の局、長門の局は反駁し、こちらにも陳状を提出した。陳状は三問三答であるが、この『源氏絵陳状』は最初にあるはずの小宰相の訴状は残されておらず、これまでの経緯を簡略に記した、先に挙げた教定らの陳状から始まる。教定の名はあるものの、「かくれてのち」とあるように、亡くなった後に出された陳状のようである。そのことを受けて、教定が反論半ばで亡くなり、その無念を晴らすために、雅有は積極的に『源氏物語』の知識を学んでいくようになった、と松原氏は論

じておられる。

一方、この陳状が公開され、教定の名が、この『源氏絵陳状』により記録に残されたことの方に目を向け、三田村雅子氏は次のように言及しておられる。

『源氏絵陳状』の公開は、そのような宮將軍の性格と姿勢を広く鎌倉の人々にアピールするための政治的な演出の意味があつたろう。宮將軍のもとには都にもないような『源氏物語絵巻』の最高傑作（おそらく現在の『国宝源氏物語絵巻』であろう）が所蔵されており、それを粉本にして新に色紙絵屏風が制作されたことを人々に浸透させる効果があり、その色紙絵制作に携わった飛鳥井教定の權威を示し、さらにその教定に対しても互角に論争できるすばらしい教養を持った女房が仕えていることを知らせることが出来たわけである。（注<sup>36</sup>）

雅有は、父の無念を感じ取って『源氏物語』を学ぶ意志を固めたとも考えられるが、鎌倉において『源氏物語』を学んでいた父の跡を継ぐと考えた、とも考えられる。この一件が雅有にどのような思いを抱かせたのか確かなことは分らないが、鎌倉の地で、雅有が父と共に『源氏物語』に触れていたことは事実のようである。

鎌倉において、『源氏物語』に触れた雅有は、文永六年に京の嵯峨の中院で為家・阿仏尼による『源氏物語』の講読を受ける。その内容は、雅有の二番目の日記『嵯峨の通ひ』に記され、翌文永七年には『もがみの河路』、建治元（一二七五）年には『都の別れ』を記す。それ以降の雅有と『源氏物語』との関わりについても触れておきたい。

家集『隣女和歌集』巻四に、鎌倉の宗尊親王の許で源氏談義を催した源親行との贈答歌が収録されている。

これは、百首歌よみ侍ることのつもりたることをよめる

河内入道覚因の許へ、揚名介事とひ侍るとて

2501 君ならでたれにかとはんゆふがほの花のあるじはしる人もなし

返事

2502 ゆふがほのはなのあるじも白露のおきわすれにし袖ぞぬれそふ（『隣女和歌集』巻四）

『隣女和歌集』巻四は、文永九（一二七二）年から建治三（一二七七）年の詠歌が収録されている。この歌が詠まれるまでに、『嵯峨の通ひ』に続く作品である『もがみの河路』と、『都の別れ』を雅有は記している。鎌倉で宗尊親王に『源氏物語』を進講し、河内本を校訂した源親行に『源氏物語』の難義の一つ「揚名介」について尋ね、それに関わる歌の遣り取りである。「揚名介」は、夕顔巻に出てくる役職（注<sup>37</sup>）であり、『源氏物語』の中で難義とされる語である。この贈答歌で分かるように、鎌倉を本拠とした源氏学の中心にいる親行と、京における源氏学の中心である為家との両者から『源氏物語』の教授を雅有が受けたことになる。この時期に雅有の担った役割について、池田亀鑑氏は「このやうな鎌倉における學問の交流は、京都において雅有が二條方と河内方を併せ承け、これを融合せしめた事実と共に、研究史上特筆すべきである。（注<sup>38</sup>）」と述べておられる。雅有が京都で「二條方と河内方を併せ承け」たのは、『嵯峨の通ひ』に見られる『源氏物語』の講読を指している。結果として、御子左家の青表紙本と河内本との両方に雅有が接していたことに

なり、『源氏物語』の本文の校合という大きなことを雅有が成し遂げたということになるのか。しかし、鎌倉と京とで『源氏物語』に精通した人々との関わりを積極的に持ったのは、雅有個人の探究心から自然に起きた行動であると見たい。『嵯峨の通ひ』に記された講読の様子からも窺い知ることができるように、雅有が親行に歌を送り、併せて『源氏物語』の難義について尋ねたのも、純粹に知らないことを知りたいと思う気持ちから動いているように思えるのである。

雅有の五編の仮名日記のうち、最後に記された『春のみやまぢ』の弘安三（一二八〇）年七月二十九日の記事には次のようにある。

廿九日、二条大納言入道資季卿のもとに向かひて、日本紀、源氏の物語難義ども、又、出仕方のことも、日暮らし尋ね聞きてぞ、夜に入りて、内、春宮へは参りぬる。『春のみやまぢ』

弘安三年に雅有は、都において後の伏見天皇となる春宮・熙仁親王に仕える身となっている。為家らから受けた『古今集』の伝授を、今度は春宮に伝授を行う立場となった。「当世の有識」と雅有が評する二条資季に、『日本書紀』と、『源氏物語』の難義について尋ねている。『日本書紀』は、『古今集』の伝授に続けて春宮に進講している途中である。一方の『源氏物語』については特に講読を行ったような記事はないが、『春のみやまぢ』と同年、弘安三年十月三日には、『弘安源氏論義』（注39）と呼ばれる、春宮の御前で行われた『源氏物語』についての論議が行われている。資季に尋ねたのは、この準備も兼ねていたのであるのか。『弘安源氏論義』は、春宮・熙仁親王以下、近臣達八名が参加した催しであり、雅有はその最年長者と見える。なぜか雅有は、自らの日記にこの論議の様子を記していない。雅有の日記には、雅有から数えて十七代後裔となる、飛鳥井雅威の手によって江戸時代、寛政十二（一七〇〇）年に注記が付されている。その雅威の注記には次のようにある。

雅威曰

弘安三年十月五日於春宮源氏論議、具顯朝臣仮名記

上下略

又、いまの世には三のくらゐ藤原雅有なん、源氏の聖なりけり、是は君も民もみなゆるせるなるべし

「具顯朝臣仮名記」とあるのは、『弘安源氏論義』が源具顯の手によって、記されているからである。『弘安源氏論義』の中で雅有は、「源氏の聖（注40）」と称されるに至っていることが分かる。鎌倉で宗尊親王の許で触れた『源氏物語』を始まりとし、父・教定の後を継ぐという決意を固め、文永六年には京の嵯峨の中院で、為家・阿仏尼夫妻の許で『源氏物語』の講読を受けた。河内本の校訂を行った源親行とは難義についての贈答歌を交わし、弘安三年には京で熙仁親王に仕えながら、資季に難義を尋ねに出掛けている。雅有の『源氏物語』に対する探究心は、時が経っても失われることがなかったようである。

### 第三節 『仏道の記』と『源氏物語』

『仏道の記』の成立は、日記中の収録歌が、家集『隣女和歌集』巻二の歌であることから、家集巻二の成立した文永二年から文永六年までの記であるとされる。雅有が『源氏物語』の講読を為家・阿仏尼夫妻から受けたのは、同じ文永六年のことであるが、『仏道の記』の成立よりも後のことである。宗尊親王の許で仕えながら、雅有が鎌倉で『源氏物語』の素地を養ったとすれば、『嵯峨の通ひ』以前の内容を記す『仏道の記』からも、雅有の『源氏物語』の要素が見えるのではないだろうか。

本稿の第一章の第四節で触れたように、『仏道の記』の冒頭で八月十五夜の月見の場所として、雅有は明石を選んでゐる。明石と言え、須磨と共に『源氏物語』を連想させる。光源氏が八月十五夜に月を眺めたのは、流謫の地である須磨からであった。

月のいとはなやかにさし出でたるに、今宵は十五夜なりけりと思し出でて、殿上の御遊び恋しく、所々ながめたまふらむかしと、思ひやりたまふにつけても、月の顔のみまもられたまふ。二千里外故人心」と誦じたまへる、例の、涙もとどめられず。入道の宮の「霧やへだつる」とのたまはせしほど、言はむ方なく恋しく、をりをりの事思ひ出でたまふに、よよと泣かれたまふ。「夜更けはべりぬ」と聞こゆれど、なほ入りたまはず。

見るほどぞしばしなぐさむめぐりあはむ月の都ははるかなれども

(『源氏物語』須磨巻)

源氏は、月の出を見て初めて「今宵は十五夜なりけり」と思い出している。それに対し、雅有はただ、旅程を急ぎ「此の度は、月ごろにて道さえ急げば」と中秋の名月に間に合うように、また「去年の本意をとげんと思へば、まだ暁、明石へと心ざして出づ」と出掛けて行く。この時点で雅有が観月の地に明石を選んだことと、『源氏物語』との結び付きは、日記中からは判断できない。

中秋の名月に間に合うように旅程を急ぎ、雲が晴れたので舟を出し、伴った者達と月を眺めた様子を記す。明石は、古来より月の名所として知られた場所(注41)である。「様変りたる思ひ出ならむとて、大きな舟して、みぎは遠く出ぬ。」と、事実の改変を伴い、「ある人」が詠んだとして配した歌が、家集『隣女和歌集』では雅有詠とあり、本当は歌を詠んでいたのだが、日記中で雅有は黙って月を見上げる自分の姿を記すあたりは、「月の顔のみまもられたまふ。」という源氏の姿と重なるか。しかし、朧化表現を用い、物語的な描き方をしようとしている雅有は、ここでは『源氏物語』を投影して日記を記すことはしなかったようである。

目を向けてみたいのは、同じ『仏道の記』の終盤、九首の歌が短い詞書と共に配されている部分である。九首の歌の内訳は、上洛に際し芦屋で詠んだ歌、上洛途中の歌、そして奈良、伊勢へと出掛けた旅の歌が配されている。大きく見てみれば、この部分は、『嵯峨の通ひ』の後に成立した紀行文『もがみの河路』や『都の別れ』、春宮に仕える日々を記した『春のみやまち』の紀行部分の素となった箇所と言えるであろうか。



正月十日あまり、都へ上らんとて、植ゑ置きたる八重桜を見て

④ 植ゑ置きたる若木の桜咲き初めば告げよわが背子見に帰り来ん (『仏道の記』)

まず、正月の十日頃、上洛に際して詠んだ歌である。この歌が詠まれたのは、『嵯峨の通ひ』の冒頭に「過ぎにし春の睦月より芹屋の里を住み離れて」とあり、「正月十日あまり、都へ上らんとて」とする詞書と合うため、文永六年の一月のことであると特定できる。植ゑ置いた若木の桜が咲き始めたならば、告げて欲しいものです、見に帰ってきましょう、という。「わが背子」は、芹屋の家に残していく人だと考えられよう。春を待ち望む歌であると同時に、都へ上り、この地を去る身である自らの感慨を「植ゑおきし若木の桜」に込めている。

『中世日記紀行評釈集成』で、渡辺静子氏はこの歌の解釈を次のようにしておられる。

歳も改まった正月十日頃、雅有は芹屋より都へと向かう。この折に雅有は、植ゑてある桜を見て「植ゑ置きし」の和歌を詠んでいる。この後に続いて記されるのが、水無瀬殿の懸を見て詠んだ「朽ち残る」の和歌である。この配置から推測するに、「植ゑ置きし」桜とは、蹴鞠の懸に使用するためのものだったと思われる。(後略) (注42)

「蹴鞠の懸」は、懸木と呼ばれる、鞠場の四方に配される木のこと、蹴鞠の際に障壁として植えられ、また、その木に懸かった鞠の落ちて来るのを蹴り上げる技術が練習されていた。この木は、雅有の手による蹴鞠の書『内外三時抄』に「當流にハ、良桜、異柳、坤蛙手、乾松也、是南庭の植様也。(注43)」とあり、飛鳥井流ではこのように、方角と植えられる木の種類が決められていた。桜、柳、楓、松という懸木のうち桜を詠んだ歌が④の歌なのである。他の雅有日記の注釈書を見ても、この歌については、同様の解釈が為されている。

さて、これまで懸木のことを詠んだ歌として、蹴鞠との関わりでのみ解釈されてきたこの歌であるが、この部分には、『源氏物語』須磨巻が重ねられている。

須磨には、年かへりて日長くつれづれなるに、植ゑし若木の桜ほのかに咲きそめて、空のけしきうらかなるに、よろづのこと思し出でられて、うち泣きたまふをり多かり。二月二十日あまり、去にし年、京を別れし時、心苦しかりし人々の御ありさまなどいと恋しく、南殿の桜は盛りになりぬらん、一年の花の宴に、院の御気色、内裏の上のいときよらになまめいて、わが作れる句を誦じたまひしも、思ひ出できこえたまふ。

いっとなく大宮人の恋しきに桜かざしし今日も来にけり (『源氏物語』須磨巻)

流謫の地である須磨で、年が変わった。「植ゑし若木の桜ほのかに咲きそめ」、空もうららかな中、源氏は都のことに思いを馳せる。その際、前の年に都で行われた「一年の花の宴」を思い起こす契機となるのが、「若木の桜」である。須磨の地に生える未だ若い桜は、清涼殿の大きな桜とはあまりにも違い、その視覚的な差異によって源氏の寂寥感は増していく。雅有が上洛に際して詠んだ歌は、「若木の桜」を用いるだけでなく、「植ゑ置きし若

木の桜咲き初めば」とあり、須磨巻の本文で「植ゑし若木の桜ほのかに咲きそめて」とあるのと一致する語、語順を用いていることが分かる。『仏道の記』の成立年は、雅有が為家・阿仏尼夫妻から『源氏物語』の講読を受けたことが記される『嵯峨の通ひ』以前の記事である。しかし、前節で述べたように雅有は鎌倉においても『源氏物語』に親しんでおり、それはこの⑩の歌からも、『源氏物語』の素養があることが分かる。

⑩の歌の「若木の桜」という語句、またその語順が一致することで、『源氏物語』の世界と直接結び付く。須磨巻の源氏同様、雅有も過去に思いを巡らせる。須磨巻では「若木の桜」から、源氏は一年前の大きな清涼殿の桜を思い起こし、一方の雅有は、家業の蹴鞠と結び付いた桜への連想と繋がっていく。この点を、⑩に続く歌との関わりと共に見ていきたい。

みなせとの  
水無瀬殿の懸りを見て

⑨ 朽ち残る桜を見ても忍ぶかな荒れにし宮のいにしへの春  
（『仏道の記』）

続く⑨は、前の⑩の歌の「若木の桜」とは対照的な「朽ち残る桜」を詠み、春が巡ってこようというのに咲くこともなく、朽ちたまま姿を留めている桜の姿に、呆れていたであろう「いにしへの春」を思う、という。上洛途中の歌は、この一首だけである。雅有は、この一首にどのような感慨を込めたのか。

（以下）で、日記中の⑩、⑨の歌に該当する歌を『隣女和歌集』から挙げたい。

桜をうゑおきて、ものへまかり侍るとて

305 うゑおきしわかぎのさくらさきそめばつげよわがせこみにかへりこん

水無瀬殿の柳を見侍りて

271 みなせがはあれにしみやをきてみればくちきのやなぎはるめきにけり

（『隣女和歌集』巻第二・春）

『仏道の記』の「若木の桜」を詠んだ⑩の歌と、『隣女和歌集』の巻二の春の項に載る三〇五番の歌との間に異同はない。続く⑨の「水無瀬殿の懸りを見て」と詞書された歌は、同じく家集の春の項に「水無瀬殿の柳を見侍りて」として、二七一番の歌がある。水無瀬殿は、芹屋から帰京する途中にある後鳥羽院の離宮である。柳も桜も、楓や松と並んで蹴鞠の懸木である。水無瀬殿には、正式な四本の懸木があったことであろう（注44）。家集、日記共に「水無瀬殿」で詠んだ歌であるが、『仏道の記』では柳を桜に代えて作歌している。日記に収録する際に、⑩の歌に呼応する形に雅有が改作したものと考えられる。そして、帰京に際しての心情を詠み込んだのである。「いにしへの春」は、雅有の祖父・雅経や定家の時代を指し示す。後鳥羽院が蹴鞠を好んだことから蹴鞠の家の者として、また歌人として『新古今集』の撰者に選ばれるなど、雅経は重用された。

雅有の家集『隣女和歌集』の序には、「そもそもわがみは、新古今、新勅撰のすがたを心にかけて、なかごろよりは万葉集古今等の心地をいかでかとこひねがへども、箕裘をだにまなびみず」とあり、雅有の歌の目指すところに新古今時代の和歌があることが分かり、「箕裘（注45）をだにまなびみず」、すなわち先祖の仕事を受け継ぐことも充分に出来ていないことを慨嘆する。また、雅有の日記には、この時代に対する憧憬を込めた言葉が見られる。

故宰相の時より和歌所とて、その代にはことにはなやかなりし歌の沙汰なりしを、故柏木の代にも、初めつ方は歌詠み多くて、盛りなりしぞかし。末つ方見給へりし頃は、次第に昔の好き者どもも、言の葉ばかり残し置きて、なかば泉のもとに帰りにしより、殊の外に人なくなりゆきしが、又我代となりては、和歌の浦浪立寄る海人もなくなり、心一つに嘆き悲しめどもかひなし。大方の世にも今は好ける者もなし。さりながら少々語らひ寄せて今日よりぞ着到の番の歌も少し昔に返る心地する。

『春のみやまち』

弘安三（一二八〇）年に記された『春のみやまち』の初日、正月朔日の記事である。雅有の五編の日記のうち、最後に記されたものである。「故宰相」は祖父・雅経のこと、「故柏木」は父・教定のことを指し、和歌に関して華やかな時代があり、歌人も多く栄えていた時代も今では過去のこととなり、自分の代では和歌に携わる人も少なくなり「心一つに嘆き悲しめどもかひなし。」という状況である。数寄者と呼ばれる人もいなくなつたが、何人かに声を掛けて集め、着到和歌を始めるといふのは、少しは昔に返る気持ちがある。この時、雅有は四十一歳となっており、その言葉は、飛鳥井家を支えていく立場となつた重責の中にいる者の言葉として響く。

須磨巻の表現を用いながら、それを家業の蹴鞠と結びつけ、自らの感慨を詠むことに代えている。続く歌に家業の蹴鞠に關係する懸木の桜を登場させ、「朽ち残る桜」から祖父・雅経らの時代に思いを馳せる。祖父達の時代を継承し、蹴鞠の家の者としての気概も見えてくる。そして、それは雅有が『仏道の記』以降、ずっと思い続けていくことでもあった。

#### 第四節 『源氏物語』に倣つた行動

雅有は『嵯峨の通ひ』において、為家・阿仏尼夫妻から『源氏物語』の講読を受けた。約三ヶ月の日記の中で五十四帖全て（注46）を読み尽くすのだが、その記録だけではなく、雅有は、講読の続く『源氏物語』に倣つた行動をしたことを記している。それらを挙げることで、『嵯峨の通ひ』における雅有の『源氏物語』の享受内容が見えるものと考ええる。神無月の初めの講読の後、雅有が阿仏尼に勧められ、和琴を弾く日がある。

五日、若菜の残りより柏木に至る。例の酒取り寄せて飲む。皆人酔ひ乱れて、夜に入りて女房二人出でたり。かの女、箏の琴を取り出で、律に押し下して掻き合す。女あるじの曰く、源氏には殊更和琴をなんほめたれど、今の世となりては、弾く人多からねば、いまださやかなる音を聞かず、とて、責めらる。病年積もりて、清掻きをだに忘れぬる由を、たび／＼かへさひしかど、あまり拒はんも中／＼上手の心地して、

かたはらいたければ、取り寄せて、緒合せばかり掻き鳴らす程に、やがて異より樂を弾き出し侍りしかば、耐へずして付けぬ。樂二、三の後、興ありとて、陪臚の早弾き、弾き出だす。この早弾きは、なべてせぬことなれば、覚えながら、ところ／＼付く。暁になりぬれば帰りぬ。いかばかりかは笑はれけん、まだきびはなる音の、しかも打ち捨て、行方知らずなりにしかば、さこそはありけめ。

『嵯峨の通ひ』

十月五日のことである。講読は前日に「若菜の半らばかりにて、暮れぬれば帰りぬ」と、日暮れを理由に中断した「若菜の残り」から始まっている。柏木巻まで、いつもの通り酒宴となった。女房の一人が箏の琴を掻き合わせたところで、阿仏尼が「源氏には殊更和琴をなんほめたれど、今の世となりては、弾く人多からねば、いまださやかなる音を聞かず」と、雅有に和琴を弾くよう催促する。「今の世となりては、弾く人多からねば、いまださやかなる音を聞かず。」と、奏者の減ってしまった鎌倉中期には、このように言われる和琴を、弾きこなす雅有の様子が記されている。この日の合奏の様子は、後に記される内侍所の御神樂の練習をする記事と併せて、雅有が管絃の道にも長けていることを伝える箇所（注47）でもあるが、ここでは講読の延長として捉え、『源氏物語』との関わりから見てみたい。

「源氏には殊更和琴をなんほめたれど」という阿仏尼の言葉は、『源氏物語』のどの場面を踏まえた言葉なのであるか。和琴は、太政大臣となった頭中将が名手と言われている。

とりどり奉る中に、和琴はかの大臣の第一に秘したまひける御琴なり。さる物の上手の、心をとどめて弾き馴らしたまへる音いと並びなきを、他人は掻きたてにくくしたまへば、衛門督のかたく辞ぶるを責めたまへば、げにいとおもしろく、をさをさ劣るまじく弾く。（中略）心にまかせて、ただ掻き合はせたるすが掻きに、よろづの物の音調へられたるは、妙におもしろく、あやしきまで響く。父大臣は、琴の緒もいと緩に張りて、いたう下して調べ、響き多く合はせてぞ掻き鳴らしたまふ。これは、いとわららかに上る音の、なつかしく愛敬づきたるを、いとかうしものは聞こえざりしをと親王たちも驚きたまふ。

『源氏物語』若菜上

太政大臣の子である衛門督・柏木は、固辞したのを強いて和琴を弾くよう勧められたが、源氏が是非にと勧めたのも納得する程、父に負けぬ素晴らしい音色を響かせた。興にまかせて弾く清掻きに、さまざまな楽器の音色が一つの調子にととのえられていくのは、不思議なくらい感興をそそる響きである。父とは違う音色を響かせる柏木は、じつに明るい調子で、やさしく心にそそる感じで、聞く者たちも感嘆したという。固辞した後には和琴を弾くのは、雅有の阿仏尼との遣り取りと似ている。

次に挙げるのは、若菜下巻の、和琴の登場する場面である。若菜下巻は、雅有が和琴を弾くことになった日に、講読を終えた巻である。

和琴に大将も耳とゞめ給へるに、なつかしく愛敬づきたる御爪音に、ひき返したる

音の、めづらしく今めきて、更に、この、わざとある上手どもの、おどろおどろしく掻き立てたる調べ、調子におとらず、にぎはしく、「大和琴にも、かゝる手ありけり。」ときゝ驚かる。ふかき御労のほど、あらはに聞えて、おもしろきに、おとゝ、御心おちめて、いとありがたく思ひ聞え給ふ。

〔『源氏物語』若菜下〕

和琴はかの大臣ばかりこそ、かく、をりにつけて、こしらへなびかしたる音など、心にまかせて掻きたて給へるは、いとことにもものし給へ。をさをさ際離れぬものにはべめるを、いとかしく調ひてこそ侍りつれ。

〔『源氏物語』若菜下〕

六条院で行われた女樂の場面である。和琴は紫の上が弾き、「なつかしく愛敬づきたる」爪音で、掻き返しの音色もめつたに聞かれぬ当世風で、専門の弾き手の音色にも負けないほど、華やかに聞こえ、大和琴にもこうした弾き方があったものよ、と音色を聞いた夕霧は感嘆せずにはいられない。紫の上の熱心な稽古による、その味わい深い音色に源氏も安堵している。また、和琴の名手である内大臣（頭中将）に匹敵する程、すばらしく整った演奏をした紫の上を夕霧が褒めている。若菜下には女樂の場面があることから、阿仏尼の言葉から始まった合奏は、この日に読み終えた若菜下のこの場面が意識下にあるものと考えられる。ただ、これまで挙げた場面は、和琴と共に、その弾き手の方に注目している。他に、『源氏物語』の中で和琴を褒める場面は、常夏巻に源氏の言葉がある。

をかしげなる和琴のある、引き寄せたまひて、掻き鳴らしたまへば、律にいとよく調べられたり。音もいとよく鳴れば、すこし弾きたまひて、「かやうのことは御心に入らぬ筋にやと、月ごろ思ひおとしきこえけるかな。秋の夜の月影涼しきほど、いと奥深くはあらで、虫の声に掻き鳴らし合はせたるほど、け近くいまめかしき物の音なり。ことごとしき調べ、もてなししじけなしや。この物よ、さながら多くの遊び物の音、拍子をととのへとりたるなむいとかしき。大和琴とはかなく見せて、際もなくしおきたることなり。広く異国のことを知らぬ女のためとなむおぼゆる。同じくは心とどめて物などに掻き合はせてならひたまへ。深き心とて、何ばかりもあらずながら、またまことに弾きうることは難きにやあらん。ただ今はこの内大臣にならずらふ人なしかし。ただはかなき同じすが掻きの音に、よろづの物の音籠り通ひて、いふ方なくこそ響きのぼれ」と語りたまひて（後略）

〔『源氏物語』常夏巻〕

玉鬘との遣り取りの中で、源氏は和琴を取り出して弾く。多くの楽器の中で、音色や拍子を調え合わせることができる優れたもので、大和琴と言つて、たいしたものでもないかに思われるが、どこまでも巧妙に出来ているのだ、と褒めている。本当に弾きこなすのは難しいのだ、と玉鬘に教える。和琴は玉鬘の父・内大臣の得意とする楽器であり、多少の和琴の心得のある玉鬘は、まだ見ぬ父への思いと共に、源氏の語る和琴論に耳を傾ける。さらに源氏は続けて、「御前の御遊びにも、まづ書司を召すは、他の国は知らず。ここにはこれを物の親としたるのこそあめれ。」と、御前での管絃の御遊びの時にも、最初に和琴をお取り寄せになるのは、異国では知らないが、この国では、これを第二の楽器としているためなのでしょう、と和琴を称している。

『嵯峨の通ひ』の十月五日の記事は、『源氏物語』のどこか一場面と重なり合うものではなく、若菜上、下巻と、常夏巻の源氏の言葉などを総合した阿仏尼の言葉に、雅有が応えたものである。この日の合奏は、『源氏物語』の本文に触れるだけでなく、場面を準えて行動するという講読の一端である。阿仏尼からの求めに応じて、雅有は『源氏物語』の講読後も、物語に触れる時間を過ごしている。

嵯峨の中院では、この合奏の他にも『源氏物語』に倣った行動が見られる。今度は、『源氏物語』の一場面と合致する日の記事である。

廿四日、朝顔より初音に至る。昨日聞きし巻に、小鳥を萩の枝に付くることありき。

折節、小鳥を人のもとより贈る。萩の枝に付け、酒具して、二人自ら持ち持ちて、人の前に置く。殊に興ぜらる。主人方よりも酒取り出で、殊に興ある日なり。連歌例のことなり。今日は帰りぬ。

『嵯峨の通ひ』

九月二十四日の記事である。「昨日聞きし巻」は、『源氏物語』松風巻を指している。

今日は、なほ桂殿にとて、そなたさまにおはしませぬ。にはかなる御饗応と騒ぎて、鶺鴒ども召したるに、海人のさへづり思し出でらる。野にとまりぬる君達、小鳥しるしばかりひきつけさせたる萩の枝など苞にしまれり。大御酒あまたたび順流れて、川のわたりあやうげなれば、酔ひに紛れておはしまし暮らしつ。おのおの絶句など作りわたりて、月はなやかにさし出づるほどに、大御遊びはじまりて、いといまめかし。

『源氏物語』松風巻

雅有の記す通りの箇所が松風巻にある。嵯峨の桂の院に滞在中の源氏は、俄に饗応を催す。その際、鶺鴒たちを召し、「野にとまりぬる君達」は、「小鳥しるしばかりひきつけさせたる萩の枝など」と鷹狩りの獲物の小鳥を萩の枝に付け、「苞」として持参する。盃が何度も行き来した後、酔いに興じたまま一日を過ごす。各々が絶句などを次々に作り、美しく月が差す頃になると管絃の遊びが始まったという。同じように雅有も、「折節、小鳥を人のもとより贈る。萩の枝に付け」て野の土産のような形にして持ち、弟の基長と連れ立って、嵯峨の為家の山荘を訪れている。「折節」、ちょうどその折に合わせたかのように、小鳥が送られてくる。「小鳥を萩の枝に付ける」場面が出てくる松風巻の講読を終えた翌日のことである。偶然としては出来過ぎている感が否めない。おそらく雅有は前日に手配し、この日に手元に届くようにしたのであろう。この場面の趣向を調えるために必要なものがある「小鳥」を用意し、「折節」と言ったのである。『源氏物語』を準えた行動は、この小鳥を「萩の枝に付け」ということだけでは終わらない。この行動を受ける形となった為家の反応を見てみたい。

雅有らのこの行動に対して「殊に興ぜらる。」とあり、主人の為家もこの松風巻を受けた趣向には喜んだようである。その後、「主人方よりも酒取り出で」と、為家が酒を取り出したところで、「殊に興ある日なり。」と今度は雅有がこの日の趣向は面白いものであったと言う。松風巻に「にわかなる御饗応と騒ぎて」とあるように、源氏が行ったのは饗応であ

り、主人方が酒や肴を供すものである。為家の山荘で、客人である雅有らが持参した酒を飲んだというのでは松風巻の趣向に添うことにはならない。そこで「御饗応」に合せて、主人の為家が酒を取り出したのである。松風巻の様子に即した動きを今度は為家側がしたことになる。さらには松風巻に「大御酒あまたたび順流れて」とある箇所とも関係するか。

嵯峨の中院を訪れる雅有らの行動と、迎える側の為家の行動が合致して初めて、この日の趣向は成立することになるのである。講読の後にいつも行われる酒宴であったが、この日は『源氏物語』の場面を映したものとなったのである。さらに、松風巻で源氏は「おのおの絶句など作りわたして」と絶句を作ったが、雅有らは「連歌例のことなり」とある。連歌と絶句とは、和歌と漢詩との違いはあるものの、酒宴の後に作歌するという行為は同じである。いつも講読の後に行われる連歌であったが、松風巻と、ここでも照応することとなり、この日の全ての趣向が合致したのである。十月五日には、和琴を阿仏尼に勧められるままに弾いている雅有であるが、前の月の二十四日の記事では、主人側に雅有の方から松風巻に準えた行動を示す。そして、それに為家が応える形となっている。雅有の『源氏物語』の享受は、場面毎に行動を変えることのできる柔軟性が見える。

このように雅有は『源氏物語』の本文に即した行動が講読の一部であるということを示すと共に、日記の文中に『源氏物語』を反映させるという試みをしている。この日のように「小鳥萩の枝に付け」た行動は、別の日の記事にも出てくる。

廿七日、蓮台野の迎へ買ひに行かんとて出でぬ。かの道に、侍従知れる女の家あり。

誘はんとて、車遣り入れて、具して行きぬ。小鳥やうの物、買ひなどして、暮るれば、

その辺近き家を借りて酒飲み遊ぶ。夜更くれば皆具して、武者小路に帰りぬ。鈴虫は、

振り延へて、かの思草に戯れて寝ぬ。明くれば帰しつ。

廿八日、嵯峨に帰りて、かの野の苞とて、小鳥萩の枝に付けて、人のもとに遣はしつ。  
『嵯峨の通ひ』

十月二十七、二十八日の記事である。「蓮台野の迎え買ひに行かん」と出掛けた先で、「小鳥やうの物」を買い求め、翌二十八日に「かの野の苞とて」、前の月の二十四日の記事同様の趣向にして、「人のもとに遣」わしている。贈り先は誰の許であろうか。為家の許だとすると、「殊に興ある日なり。」と評された九月二十四日と同じ趣向を繰り返すことになってしまい、前回の趣向までも打ち消してしまう。前述した松風巻を受けた日とは異なり、持参したのではなく、為家に対したときのように反応を期待する様子も見えない。中院の人々以外に、『源氏物語』の講読の延長上にある行動を見せ、楽しみを共有しようとしているかのようにある。もしくは、日記の表現上の楽しみであったかもしれない。

十一月の『源氏物語』の講読が残り僅かとなった頃にも、雅有は行動を起こしている。

廿二日、転任の事に、野寄の法眼のもとへ参でぬ。そのほどに、絹綿のあまた、中院へ遣る。暮るゝほどに行きぬれば、源氏はなくて、酒を飲み飲みみて帰りぬ。

『嵯峨の通ひ』

「絹綿」を人に贈るといふ箇所からは、宿木巻との関連が考えられる。

明けぬれば帰たまはんとて、昨夜後れて持てまゐれる絹綿などやうのもの、阿闍梨に贈らせたまふ。尼君にも賜ふ。法師ばら、尼君の下衆どもの料にとて、布などいふ物をさへ召して賜ふ。  
(『源氏物語』宿木巻)

この箇所は、宿木巻に重ねて、「京へ帰る薫を、鎌倉へ下る雅有に、阿闍梨を為家に、尼君を阿仏尼に見立てての諧謔か(注48)」とする意見がある。三者の立場は似ると言えるかもしれないが、ここは、十一月も後半になり、寒さも増す時期に季節に合ったものを送ることに意味がある。『源氏物語』に準えて、今の時期に適当なものとして絹と綿とを選んだのであろう。「遣る」とあるように、持参するのではなく、人に送らせ、「暮るゝほどに行きぬれば」と届いた頃を見計らって日暮れになって出掛けて行き、酒を飲み交わして帰っている。宇治を離れる夕霧が阿闍梨と弁の尼達に謝礼として送ったのと同じように、やがて嵯峨を離れる身である雅有の、もうすぐ終わる『源氏物語』の講読に対する謝礼であり、講読をしない代わりに行われた酒宴は、別れの酒宴であつたのである。

以上見てきたように、『嵯峨の通ひ』において雅有は、行動の数々を『源氏物語』に準えて行い、それらを記している。鎌倉で得た『源氏物語』の知識、『仏道の記』に「若木の桜」を用いて自らの感慨を詠むに繋げた歌、そして『嵯峨の通ひ』では、少しの事実の改変を加えることで、日記中の表現を『源氏物語』の世界に近づけている。雅有は、ただ漫然と講読を受けている訳ではない。教授された内容を示すかのように、若菜下に準えて勧められるままに和琴を弾き、用意した「小鳥」を「折節」送られてきたものであると持参し、それを受けて趣向に乗ってきた為家らと共に楽しんだ様子も記す。また、同じ松風巻に準えて今度は蓮台野に出掛けた際に買い求めた小鳥を「人のもと」に送る。また、絹綿を為家の山荘に贈り、講読の謝礼としている。『嵯峨の通ひ』の主題に関わる、こうした講読の一端として示される行動や、『源氏物語』の本文への親しんでいる様子から、雅有の『嵯峨の通ひ』に至るまでの『源氏物語』享受の様子が見えてくるのである。



### 第三章 雅有の日記の構成意識

#### 第一節 紀行『もがみの河路』の場合

文永六（一二六九）年の記事内容である『嵯峨の通ひ』は、嵯峨の中院で行われた『源氏物語』の講読を作品の主題として据え、日を追いながら出来事を記す形を取っている。その中で、切望する近衛中将への昇進を大堰河へ出掛けて行く記事に織り込んで記し、また、『源氏物語』の講読で得た知識を行動に移し、物語の世界に趣向を似せて、教授者である為家らと共に楽しむ様子も記されている。第一章で示したように、雅有は事実を記す形を取りながら、自身の心情を織り込み、日々の記録であることから逸脱しないよう工夫を加えて、事実には虚構を取り入れている。『嵯峨の通ひ』から見えてきたことを踏まえて、雅有の日記全てに渡って見ていくと、雅有の日記の主題と、それを明確にするための構成意識が見えてくるものと考えられる。次に、雅有の残した五編の仮名日記のうち、『嵯峨の通ひ』に続いて三番目に成立した『もがみの河路』をこの観点から見ていきたい。『嵯峨の通ひ』とは全く趣を異にした紀行文であるこの記からも、雅有の構成意識に関わる事実の改変や虚構の痕跡が見えてくるであろうか。『もがみの河路』は、次のように起筆される。

例の浮かれたる身は、倭文の苧環繰り返しつゝ、上れば下るに。『もがみの河路』

この紀行文は、序に相当する箇所がある他の三編の日記とは異なり、短い一文から始まっている。『古今集』の巻二十・陸奥歌を踏まえた表現を用いている。

1092 最上川上れば下る稲舟のいなにはあらずこの月ばかり『古今集』巻二十・東歌

この歌を踏まえて『もがみの河路』という題名も付けられている。序詞の中の「上れば下る」と稲舟が忙しく行き来する様に、一所に留まることの出来ない我が身の嘆きを重ねているのである。この冒頭の一文に続いてすぐに最初の歌が配される。

逢坂にて、

逢坂の山の杉村過ぎがてに閑のあなたぞやがて恋しき 『もがみの河路』

逢坂山の杉の木立を通り過ぎ難く、閑を越えると都がすぐに恋しく思うのだと言い、以降この歌と合わせて十七首の歌が配される構成になっている。そのうちの十六首が家集『隣女和歌集』巻三の収録歌と重なることから、『もがみの河路』は、家集巻三の成立時期である文永七年から八年の間に成立したものと特定される。『嵯峨の通ひ』の翌年に記された下向の記なのである。『もがみの河路』の構成は、『仏道の記』の終盤で歌を連ねて、上洛に際しての思いを「若木の桜」の歌に込めて配し、伊勢や奈良への旅程を記した箇所と似る。続く赤坂で詠まれた歌は、散文の部分からも旅中の情景が伝わって来る書き方である。

赤坂といふ所に泊まりたるに、雪深く降り積もりたるに、今日は道遠しとて、暁深く急ぎ立つ。道も知らぬ雪の中を、駒にまかせて行くほどに、空はやう／＼晴れて、

雲の絶間に月出でたり。

逢ふ人も先立つ跡もなかりけり我が踏み初むる道の白雪

『もがみの河路』

鎌倉に到着するまでの間に、地名の飛ばされる箇所が多くあるが、情景に合った歌を配している。続く地名は、「鳴海潟にて千鳥を見て」、「二村山にて、雪搔き垂れて降れば」、「雪深き、野なる柏を見て」、「尾崎が原といふ所を通るに、凍りたる雪に朝日の輝き合ひたる、いとおもしろし。」と、家集の歌の並びのように、歌以外の散文は淡々と旅程を述べていく。これまでの部分は、概ね家集巻三の冬と雑の歌の詞書と一致しており、文永七年の下向の際に詠まれた歌を配したものと考えられる。このように『もがみの河路』は、地名に添った流れで歌を配しているが、しかし、それら全てが該当の土地で詠まれたものばかりではない。

京なる人をおもひ出で、

忘れずは思ひおこせん心こそ我が偲ぶよりなほかなしけれ

『もがみの河路』

何かに心を寄せて詠むということせず、京に残してきた人のことは心から離れることがない。あなたが忘れていなくて、私のことを思い出すその心は、私があなたのことを思い慕う気持ちよりも一層つらいことであろう、と遠く離れた京にいる人のことを思い遣る旅中歌となっている。しかし、元は家集『隣女和歌集』の巻三・恋に「互思恋」と詞書して収録されている歌なのである。京をかえりみている内容から、鎌倉においての詠であるうか。折々に感じて詠まれたものではなく、題を定め、聞き手を想定せずに独り詠んだ、題詠の独詠歌を旅の途上の詠として配しているのである。

こうした構成は、次の「橋本にて」として詠まれた歌にも表れている。

橋本にて、題を探りて

① 波越ゆる下枝ばかりは顕れて雪に隠るゝ浦の松原

② 冴え凍る袖の夕霜打ち払ひ今日行く里の旅寝しぬらん

③ 降りそむる庭の初雪いつのまに深くも恋の身に積るらん

④ 待ちわびぬ雲井のよその月をだに我が袖避きて夜離れやはする

⑤ ありし世の真野の継橋中絶えて年のわたりに袖ぞ朽ちぬる

⑥ 笹枕主定まらぬ別れかな変る一夜の露の契りは

『もがみの河路』

①は、家集にも「はしもとにて」と詞書されており、文永七年に橋本で詠まれた歌であると考えられる。しかし、続く②は家集巻三・冬に「霜」の題で詠まれた歌であり、③は同じ巻三・恋に「寄雪恋」の題で詠まれている。『もがみの河路』の中で唯一④の歌のみが、家集に収録されておらず、日記の執筆時に作歌されたものであると考えられる。⑤は「寄雪恋」の題で詠まれており、最後の⑥は、「傀儡恋」の題で詠まれた歌である。先に挙げた

「京なる人を思ひ出で」と記して配した歌と同様に、家集卷三・恋の歌が目立つ。この橋本で詠まれた六首について佐藤恒雄氏は、「これらの歌は都か鎌倉の私邸や公の会で詠んだ純然たる題詠歌をよせ集め、あるいは執筆時に詠み加えるなどして旅中の風流を構築しようとしたものと見る方が事実に近いのではあるまいか。橋本での詠歌なら、雪にしる橋にしる傀儡にしる、かくも一般的にはなくもつと特定の何かに寄せて詠むはずではないか。やはり作為と虚構の跡は著しいとみられよう。(注49)」と述べておられる。旅中で探題の歌を詠むのは珍しい。『もがみの河路』の中で雅有は、訪れた地による感慨を歌で記す方法を採っている。その中でこの橋本の場面は、一つの山場を成す。

ただ、雅有が橋本の地に集めた意図を完全に解き明かすことができないことから、次のような意見もある。「もし書き加えるのであれば、他の様々な土地の記事においても加えればいいわけで、旅の途中であるという作品にこうした六首を意図的に纏めるというよりは、本文の通り題を探ったことの方が事実とみるのが妥当であろう(注50)」。これは佐藤智広氏の意見である。この短い紀行文で、雅有が工夫を凝らして旅の模様を知らせようとしていることから、この橋本の場面にも何らかの意味があるものと見たいが、手がかりが少ない。散文による人との別れの場面を記さない代わりに、歌によって人との別れを惜しみ、離れた京にいる人に思いを馳せているように見える。その際の方法として題詠歌を用いたと考えられないか。雅有は、題詠歌を用いて場面を描き出す方法を採用ことが多い。この場面も、その一つと見ることができであろう。この橋本に配された歌のように、題詠の独詠歌を用いた方法については、『嵯峨の通ひ』の成立時期の問題と絡めて、次節で再び述べたい。

橋本で「題を探りて」詠んだ歌に続いて、地名が記されないまま詠まれた歌が配される。

遠近の山々に雪の降りたるを見れば、いと嵯峨の恋しく覚えて

道すがら忘れわびぬる小倉山見馴れし里の雪の面影

『もがみの河路』

ここでは特に「いと嵯峨の恋しく覚えて」と、嵯峨に思いを馳せている。旅の途中も忘れることのできなかった小倉山、この辺は見馴れた嵯峨の里の雪景色に似通っていることだ、と旅中の雪景色と嵯峨の光景を重ねて詠む。雅有によって建治元(一二七五)年に記された、同じ旅程を辿る紀行『都の別れ』には、「小倉山」あるいは「小倉の山」の表記による嵯峨に関連する地名は現れない。『嵯峨の通ひ』以外で「小倉の山」が登場する場面は、雅有の残り三編の日記にはなく、『もがみの河路』のこの歌のみなのである。小倉の山は、『嵯峨の通ひ』に六度登場し、「華やかにさし上る月」などと合わせて描写されることで、『源氏物語』須磨巻の情景と重なり合う場面となり、雅有に『源氏物語』の素養があったことを示す役割も果たす。詠歌の「見慣れし里」は、『嵯峨の通ひ』において雅有が滞在した母の里を指すのか、『源氏物語』の講読のために通い慣れた為家の中院を指すのかは分からないが、前作『嵯峨の通ひ』を意識した上での記載であると考えられる。

この一見、歌を連ねただけにも思える短い紀行文の中に、雅有は旅で出会った目新しい出来事も記している。

昼の乾飯のために、清見が関に立ち寄らんとするに、荒磯の岩間に、海布刈る舟ど

もあり。見んとて、馬より下りて汀に至り、女方にも見せんとて、輿など止めて、海人ども下ろして潜きせさす。海布刈る舟に、侍従、若き侍ども乗り移りて手づから海布刈り遊ぶ。

清見潟波間を分けて潜けども偲ぶ都を見るめだになし  
『もがみの河路』

家集には「清見関にて人のふねにのりて、めなどかり侍りしに」と詞書されている清見が関での出来事である。荒磯の岩の間に海藻を刈り採るための舟があり、近くで見ようと馬から下り水際まで行っている。女達にも見せようと輿も止め、海人たちに潜らせ、弟の基長や若い家来たちは舟に乗り移り、めいめいに海藻を刈り採って遊んだという。旅先でしか味わえない事柄と接した雅有らの賑やかに楽しむ姿が見えるようである。家集よりいくらか長い地の文を付し、旅先で起きた目新しい出来事を、この短い紀行文に盛り込んでいる。それでも、「偲ぶ都を見るめだになし」と都を離れてから日も経ち、楽しい出来事に触れているというのに、都を恋しく思う心情は消えない。楽しさに紛れて都を思う気持ちが消えてしまうことはなく、かえって増しているようである。『もがみの河路』は、歌を配して旅情を伝えながらも、都を偲ぶ思いに還っていく。それが『仏道の記』に見える歌の配列された箇所と異なる点で、下向の際の歌に限定し、それらが一つの主題を持っているのである。「富士の山を見て」、「酒匂に落ち着きたれば、越え来つる足柄山、雪白く見ゆ」と、歌を配し、折々に下向に際しての思い、下向中の望郷の念を歌に詠み、鎌倉に到着した雅有は、次の一文をもつて筆を置く。

故郷に帰り来て見れば、宿もありしながら、人も変らねど、たゞ旅立ちたる心ばかりぞあらぬ心地して、夜もすがらまどろまねず、思ひ明かしつるや。『もがみの河路』

「上れば下るに」と冒頭に記している通り、雅有にとって、故郷と呼び、本拠となっていた鎌倉であつたが、雅有の意識の上では、本拠地と考えているのは都なのである。冒頭と結びとを一致させて、更には歌を主に配して作り上げた紀行文であることから、上落したと思えば再び下向しなくてはならない、慌ただしい身であることを表している。この簡略とも言える紀行文の主題は、一貫している。徹底して歌でもって、旅中のさまざまな事柄を描き出そうとしたことは、家集の歌を配す方法とも異なっており、雅有の構成の跡が随所に見える。この一編は短いながらも、紀行文として独立したものであると考えられる。では、前作『嵯峨の通ひ』とは全く趣の異なるこの記を、雅有はどのような考えをもつて記したのであろうか。

## 第二節 『嵯峨の通ひ』の成立年次と『もがみの河路』

雅有の日記は、四編『仏道の記』、『嵯峨の通ひ』、『もがみの河路』、『都の別れ』が、『飛鳥井雅有卿記事』と外題が付けられ残されている(注51)。この『飛鳥井雅有卿記事』と外題のある四編は、成立年順に一冊に書写されている。雅有が最後に記した一編『春のみやま

ぢ』のみ別の冊子に書写されている。そして、それぞれの日記は、雅有から数えて十七代後裔となる飛鳥井雅威の手によって、江戸時代、寛政十二（一七〇〇）年に注記が付されている。

『もがみの河路』の末尾には雅威の手による次のような記載がある。

雅威曰

弘安三年十月五日於春宮源氏論議、具頭朝臣仮名記

上下略

又、いまの世には三のくらゐ藤原雅有なん、源氏の聖なりけり、是は君も民もみなゆるせるなるべし

記載内容は、雅有最後の日記『春のみやまち』が記された弘安三（一二八〇）年に、春宮御所において、『源氏物語』に関する論議が行われたことに触れている。その論議の様子が記された「具頭朝臣仮名記」の内容を挙げており、「三のくらゐ藤原雅有なん、源氏の聖なりけり」とある。この記載は、『嵯峨の通ひ』で『源氏物語』の講読を受けた二十九歳の雅有が、年を経て四十一歳となった弘安三年には、「源氏の聖」と称されるに至ることを記している。後の伏見天皇となる春宮・熙仁親王の御前で行われ、『弘安源氏論議』と呼ばれた行事であった。

この記載は、『嵯峨の通ひ』の翌年の記であるとされる『もがみの河路』の末尾にある。『もがみの河路』では『源氏物語』の講読はなく、また『源氏物語』に関する記事も無い。さらに『源氏物語』に準えたような語句も見当たらない。このことから、『源氏物語』の講読が行われた『嵯峨の通ひ』に付される注記と捉えるのが適当であると思われる。水川喜夫氏は、この注記が『もがみの河路』の末尾にあることについて、『最上の河路』の奥書は、「弘安源氏論議」の引用に拠っていることから、『嵯峨の通ひ』の末尾に加えられるべきものが、そこに余白がなかったため、『最上の河路』の末尾に書かれたと思われる。（注52）と、注記はやはり『嵯峨の通ひ』にあるべきもので、『嵯峨の通ひ』と『もがみの河路』との二編の間に余白がなかったことから、余白のあった『もがみの河路』の後に記されたと解しておられる。余白がないということは、『嵯峨の通ひ』と『もがみの河路』が面を改めずに書写されたことを示している。しかし、続けて書写されている『仏道の記』と『嵯峨の通ひ』、『もがみの河路』と『都の別れ』、それぞれの雅有の日記は、面を改めた上で書写されているのである。『もがみの河路』と『嵯峨の通ひ』だけが、面を改めず書写されたことには、何らかの意味を持つのであろうか。

この点について、『嵯峨の通ひ』と『もがみの河路』との繋がり、という視点から見たい。『嵯峨の通ひ』は、文永六年の出来事が記されている。一方、『もがみの河路』の題号の下に付された雅威による注記は、「同年 翌年歟可考」とあり、「同年」は見せ消ち、「翌年」以下は朱書きとなっている。「同年」は、『嵯峨の通ひ』と同じ年、すなわち文永六年の記か、翌七年の記であろうと推測した一文である。雅威が内容から判断した結果であろう。文永六年の記である『嵯峨の通ひ』の十一月二十日の記事に、「書写法眼、未だ野寄にも帰られずして、京に居られたれば、文を奉る。やう／＼の戲言いひ、下り近き由書きて」と、野寄法眼に宛てた手紙に、とりとめもないことを書くと共に、下向が近いことを書い

たとある。都と鎌倉との間を往還した雅有は、文永六年にも下向したようであるが、『嵯峨の通ひ』では触れられることなく、この年の下向の記は記されない。『もがみの河路』の下向の記が、それに当たらないかと思わせる。しかし、『もがみの河路』中の十七首ある歌のうち、十六首首が『隣女和歌集』巻三の収録歌と重なり、この家集巻三は、文永七年から八年までの詠歌が収録されている。このことから、『嵯峨の通ひ』の翌年、文永七年の記事であると特定されるのである。従って、『嵯峨の通ひ』と『もがみの河路』の二編は一年の間を挟んで成立した記なのである。

佐藤智広氏は、この点について言及され、「しかし、両者をこのように分けることが可能であるのは、偏に『隣女集』の巻が丁度文永六年と七年とに分かれるからであり、『嵯峨の通ひ』と『最上の河路』の記事内容に時間的断絶があるということは両者から読み取ることが不可能なのである。雅威が『最上の河路』の「同年」を見せ消ちにしながら、積極的に訂せず「翌年歟可考」と朱書きしたに留まったのも、そうしたことによると見て間違いないまい。(注53)」と述べておられる。『嵯峨の通ひ』と『もがみの河路』の内容からは、「時間的断絶」が見えず、逆に言えば内容から両日記の結びつきを指摘することが出来るとしておられる。両日記の結びつきの見える箇所を、次に挙げてみたい。

『嵯峨の通ひ』と『もがみの河路』との内容の上での繋がりを見ていくと、まず、第三章の第一節で触れた、『もがみの河路』の中に「嵯峨の恋しく覚えて」と詠んだ歌があることを挙げることができる。『嵯峨の通ひ』を除いて、雅有の他の日記に嵯峨と関わる描写があるのは、『もがみの河路』だけである。両日記が続いて記されたものであることから、「嵯峨」が登場するのは不自然ではないが、成立に一年の間が空いていると考えれば、意図的に入れたのであろうか。

次に、『もがみの河路』の冒頭の「例の浮かれたる身は、倭文の芋環繰り返しつゝ、上れば下るに」の一文に『古今集』の巻二十の陸奥歌が典拠となっている。佐藤智広氏は、これに対応させて、結びの「故郷に帰り来て見れば、宿もありしながら、人も変わらねど、たゞ旅立ちたる心ばかりぞあらぬ心地して、夜もすがらまどろまれず、思ひ明かしつるなり。」の部分にも、同じ『古今集』の歌が典拠となっていると解しておられる。『古今集』巻一の貫之が初瀬に詣でた時の歌が該当する。

初瀬にまうづるごとと宿りける人の家に、久しく宿らで、ほどへてのちにいたれりければ、かの家のあるじ、かくさだかになむやどりはあると、言ひいだして侍りければ、そこにたてりける梅の花を折りてよめる  
つらゆき

42 人はいさ心も知らずふるさは花ぞ昔の香ににほひける  
『古今集』巻一・春歌上

冒頭と末尾とに『古今集』の歌を踏まえていることから、嵯峨の中院において、十一月二十七、二十八日の二日間で「習ひ通した」『古今集』の伝授のことが雅有の頭にあったため、『嵯峨の通ひ』との繋がりが見えると解しておられる。

また、他三編(注54)の冒頭部分の起筆が、過去を回想して「過ぎにし」と記し、官位から離れた身であること、あるいは官仕えに復帰した身である等、自らの現状を記すことで趣を同じくしている。それに対して、『もがみの河路』のみ、「上れば下るに」と、唐突に始まる感がある。他の三編の序とは異なる筆の運びである。『もがみの河路』の「上れば下

るに」の部分、『嵯峨の通ひ』の冒頭の「芦屋の里を住み離れて、花の都に帰り上りたれど」と呼応するものであると捉えることで、『嵯峨の通ひ』との繋がりが見えると佐藤智広氏は考察しておられる。二編の日記の記事内容の繋がる箇所を指摘していくと、確かに見えてくるものは多い。

これらの指摘をされた上で、佐藤智広氏は次のように述べておられる。

以上のように『嵯峨の通ひ』と『最上の河路』の関係を考えると、両者の時間は故意に作中時間がつなぎ合わされていると言える。とすれば、少なくとも『最上の河路』という題号は、『古今集』典拠を知り、且つ実際は同じ年の記事ではないと判じた他者による命名となろう。大体、雅威書写本において、その題号が「もかみの河池」となっており、佐佐木信綱氏以来、「池」は変体仮名「地」の誤写と見做されてきたが、題号における誤写は、散文の誤写とも、また韻文の誤写とも同列ではなからう。

兎に角も、題号の問題を孕みつつも、『最上の河路』のみ面を改めず書写しているという事実は特異である。そして、それは『嵯峨の通ひ』と『最上の河路』とをつなぐ一つの鍵と考えるのである。(注55)

それぞれが独立した日記、紀行である『嵯峨の通ひ』と『もがみの河路』とが、面を改めず書写され、内容からも繋がりが見えることから、一連の作品として雅有が記したのではないかと述べておられるのである。『もがみの河路』は、第三章第一節で述べたように、独立した主題を持ち成立した一編であるため、『もがみの河路』という命名は、雅有自身によるものと見たいが、佐藤智広氏の「故意に作中時間がつなぎ合わされている」という意見に、注目してみたい。この意見を参考に、『嵯峨の通ひ』と『もがみの河路』の二編の繋がりに関して、次に一歩進めて、成立年次の問題と絡めて考えてみたい。「故意に」繋がったとは言い切れないが、雅有のこの二編の繋がりは、内容から見えてくるものだけではない。

『嵯峨の通ひ』は、題号の下にあるはずの年号が虫損のため不明である。そのため、雅威が朱書きで「文永六年也。入道大納言為家此記に七十二のよし所見、此年齢を以て年号を考しむ」と注記している。これは日記中の九月二十一日に「酔ひにすゝめられて」、主人の為家が雅有に蹴鞠を勧め、再三辞退する雅有に「なほ否べど、七十二の老入道立たれてひらに責めらるれば、かつは歌の師といひ、おとなしき人の命といひ、さのみは返さひがたければ、裸足にて立つ。」と為家が先に庭に下りており、歌の師であり年長者の勧めることでもあるので、とうとう断り続けることができず、素足で庭に下り蹴鞠を行ったという。この時の為家の「七十二」という年齢から、文永六年の内容を記した記であると雅威は判じたのである。『嵯峨の通ひ』に記された『源氏物語』の講読や『古今集』の伝授が行われたのは、文永六年のことに間違いはない。さらに、雅有の家集『隣女和歌集』巻二の収録歌が『嵯峨の通ひ』の歌と共通することも、文永六年の記であるとする根拠となっている。巻二の成立時期が「自文永二年至文永六年」と家集にあることに拠り、これを為家の年齢と合わせて考え、文永六年の記事内容であるとの認識になっている。

雅有の日記の成立について考える時、必ずしも記事内容と成立時期が重なるとは言えない。雅有が日記中に、事実の改変や虚構を用いるなどの工夫を凝らしていることなども鑑みると、嵯峨の中院での講読などの後に加筆や省略をして、『嵯峨の通ひ』は完成した

ものと考えられる。構成には相応の時間を要したのではないだろうか。従来の論には、『嵯峨の通ひ』の成立年次についての明確な指摘はない。『嵯峨の通ひ』本文の成立年次の箇所は虫損であり、現存の資料からの『嵯峨の通ひ』の成立時期を判別することは難しく、雅威による成立年の推定を元にした成立時期の確定、あるいは記事内容の年次確定と、成立時期とを同じと考える論が殆どである。水川喜夫氏は『飛鳥井雅有日記全釈』で「但、著作年月は不明。推定すれば、毎日ではないであろうが、心に留まる出来事は書き留め、最上の河路の旅（文永七年）に出るまでの間に纏めたのではなからうか。（注56）」と推測しておられる。成立については概ね、この考察に拠った捉え方がされてきた。

『嵯峨の通ひ』の成立は、文永六年か、その翌年の七年なのか。雅有は、『嵯峨の通ひ』の完成までに、どの程度の時間を掛けたのであろうか。その答えとなる歌が、『嵯峨の通ひ』の文永六年十一月二十日の記事にある。

廿日、宿木の残り、東屋果てぬ。書写法眼、いまだ野寄にも帰られずして、京に居られたれば、文を奉る。やうくの戯言いひ、下り近き由書きて、奥に

① 別れなん後ぞ知らるゝ同じ世の都の中も隔て有る身は  
返し

㊤ 同じ世の隔てもつらし嶺の雲誰が心よりかゝり初めけん  
『嵯峨の通ひ』

『源氏物語』の講読も、あと六日程で終わりとなる頃である。併せて『嵯峨の通ひ』の記事内容も残り僅かとなった中、雅有は二人の人物と別れの歌を交わす場面を設けている。まず、共に遊興に出掛けるなどの親交があり、「転任の事」では申文を南御方に託す際に頼りとした野寄法眼に雅有は歌を送っている。別れを惜しんで、別れた後に初めて気付くことだ、同じ世にいても「隔て」があるために、すぐには会えないお互いであることだ、と詠む。それに対する法眼の返歌は、同じ世であっても「隔て」があるのはつらいことです、高い峰に雲が懸かるように誰の心から隔てを置きはじめたのであろうとある。「隔て」は、法眼と雅有との僧俗の隔たりを指すか。二日後の二十二日に「転任の事に、野寄の法眼のもとへ参でぬ。」とあるため、この贈答歌の場面が法眼の名が登場する最後の場面という訳ではない。しかし、法眼との直接の遣り取りを記す場面は、『嵯峨の通ひ』の中では、この贈答歌の場面以外にない。

注目すべき箇所は、雅有が野寄法眼との贈答を終えた後に続く歌である。

また久しく障る事どもありて、会はぬ人のもとへ、申し遣り侍りし。

① 芹分くるみなとの小舟うきふしに障りがちな程を恨むな  
返し

㊤ 芹分くるみなとの小舟さもこそは思はぬ方の障るなるらめ  
『嵯峨の通ひ』

野寄法眼との別れの歌を贈りあった同日に、続けて配されている贈答歌である。①の歌は、雅有から「久しく障る事どもありて、会はぬ人のもと」に送った歌である。恋人と思われる相手に向けて送った歌として記されている。この歌の本歌として、『万葉集』巻十一



の歌が考えられる。

2745 題知らず 柿本人麻呂  
湊入りの葦わけ小舟障り多み我が思ふ君に逢はぬころかも (注57) 『万葉集』巻十一

湊に葦を分けて入る小舟のように、差し障ることが多いので、思うように逢瀬が叶わないのです、とする歌である。この歌にあるように、思い通りにならない恋の喩えとして、湊に葦を分けて入ろうとする小舟を用いて、逢うことが妨げられることを恨みに思わないで欲しい、と相手に懇願する歌を雅有は詠んでいる。その雅有の歌に対する歌は、思いがけない妨げがあることでしよう、と暗に他に通う相手がいるから逢えないのでしよう、と切り返した恋人からの返歌である。野寄法眼との別れの贈答歌と合わせて二つの歌の遣り取りを記して、この日の記事は終わっている。

雅有が「久しく会はぬ人のもと」に申し送った①の歌は、『隣女和歌集』の収録歌であり、そこには確かに雅有詠として載る。

#### 寄舟恋

1477 あしわくるみなとのを舟うきふしにさはりがちなるほどをうらむる

『隣女和歌集』巻三・恋

家集の巻三に収録されているこの歌は、第五句の最後の文字に異同が見られるものの、同一の歌である。内閣本を底本とした『新編国歌大観』、『私家集大成』、また、諸伝本のうち最古の写本である高松宮旧蔵、国立民俗博物館蔵(注58)の『隣女和歌集』の確認を行ったところ、この歌の第五句は『隣女和歌集』では「ほどをうらむる」となっている。日記中の①の歌は、第五句を「程を恨むな」としており、異同は最後の一文字のみである。この異同には、どのような意味があるのであろうか。

『嵯峨の通ひ』の①の歌に関しての言及が殆ど無い中、濱口博章氏は『飛鳥井雅有日記注釈』で、日記中のこの歌について「底本「うらむ那」であるが、資料館本は「奈」の草書体であるから、字形は「る」に近い。「うらむる」とあるべきところ。(注59)」と解釈を加えておられる。『嵯峨の通ひ』は、天理図書館蔵本『飛鳥井雅有卿記事』にある写本とは別に、国文学研究資料館蔵の写本もある。濱口氏は両写本の仮名「な」の字形に着目し、『隣女和歌集』の歌そのままに「る」でなければならぬとする解釈をされ、「程を恨むな」とある家集との異同は、誤写のためである、と判じておられるようである。しかし、この「程を恨むな」と「ほどをうらむる」との差異は、写し間違いなどではなく、雅有の手による意図的な改変である。

①の歌は、『隣女和歌集』では「寄舟恋」の題を定めて詠んだ歌であり、相手を想定した歌ではない。第五句を「ほどをうらむる」とし、芦の間を分けてゆく湊の小舟が進みにくいように、差し障ることが多いので、逢うことが妨げられがちになることを恨めしく思うのだという、通いの絶えたことを恨む、女性の立場で詠まれた題詠の独詠歌である。家集に収録されているまゝを日記に再録したのでは、雅有から恋人へ向けて贈った歌にはならない。雅有は、①の歌の第五句を「ほどを恨むな」と改変したのである。この改変を行うことで、雅有から恋人と思われる女性に向けて詠み、逢うことが妨げられることを恨みに

思わないで欲しい、という懇願を込めた歌となるのである。そして続けて、恋人による返歌が配される。この⑩の歌で、私の他に思っている方がいらつしやって、それが妨げとなっているから逢えないのでしょうか、と女性から切り返された歌によって、この日の記事は終わる構成となっている。雅有の贈答歌の相手である「会はぬ人」は実人名不明であり、雅有の周囲の人物と照らし合わせても特定することは出来ない。この歌は、雅有が女性の立場に成り代わって、作中人物として詠んだと考えられる。野寄法眼との歌の遣り取りの後に、この「会はぬ人」との贈答歌を配した雅有は、ここで一種の別れの場を描き出すとしたのである。都と親しい人々との別れを織り込むために、『隣女和歌集』の歌の一部を変え、歌によって別れを交わす趣向としたのである。雅有による『嵯峨の通ひ』の中の虚構の跡が見える箇所でもある。

先に、『嵯峨の通ひ』に配される歌と共通する歌は、全て家集の巻二の歌であり、『嵯峨の通ひ』の成立を文永六年であると特定する重要な要素であるということは述べた。従来からのこの考えにより、『嵯峨の通ひ』の記事内容が文永六年のものであるという事実は揺らぐことはなかった。ところが、『嵯峨の通ひ』の十一月二十日に、雅有が別れの思いを込めて送った⑪の歌は、家集の巻三に収録されている。『隣女和歌集』巻三は、家集中に「自文永七年至文永八年」とあることから、文永六年の内容を記す『嵯峨の通ひ』の、翌年以降の成立である。これにより⑪の歌を含む「会はぬ人」との贈答歌は、『嵯峨の通ひ』の記事内容の翌年である文永七年に記されたという事実が見えてくる。野寄法眼との贈答歌については、他の記録や家集にも収録されていないため確かなことは分らないが、文永六年に関わりを持った人物として別れの歌の贈答はあったものと考えられる。その法眼との贈答歌に続けて、「寄舟恋」と巻三に題詠の独詠歌として収録されている歌を用いて配し、別れの場面を描き出すために加筆したのである。加筆時期は家集巻三の成立時期である文永七年から八年に掛けてのこととなる。『嵯峨の通ひ』の記事内容は文永六年のものであるが、構成、加筆が加えられたのは、『もがみの河路』に記された出来事と重なる、文永七年であった。『嵯峨の通ひ』と『もがみの河路』との結び付きの強さは、『隣女和歌集』との関わりから明らかとなった。この⑪の歌一首によって、『嵯峨の通ひ』の成立年次が文永七年であることは間違いない。季節に関しては、文永七年の春か夏までなかったのではないか。その同年の秋に『もがみの河路』に記された鎌倉への下向があったのである。雅有は構成に時間を掛けて、『嵯峨の通ひ』を作り上げた。そして、それは両日記の成立に一年もの間が空いていないことを教える。一年の間隔があったために内容によって「故意に作中時間を繋げた」のではなく、『嵯峨の通ひ』の成立時期が『もがみの河路』の執筆時期と近いことから、雅有の意識の下、両日記は繋がっているものと見たい。雅有が、『嵯峨の通ひ』の後に、紀行文『もがみの河路』を記したのは、極めて自然な流れであったと言える。

さらに、『嵯峨の通ひ』と『もがみの河路』とを雅有が繋がりをもって記したと考えると、続く『都の別れ』や、雅有の最後の日記である『春のみやまち』と構成の上で似た形となる。『嵯峨の通ひ』と『もがみの河路』とは、それぞれ異なる主題を持つ記であるが、続く『都の別れ』は鎌倉への下向の記と、鎌倉に到着してからの記とを合せて一編の日記の主題を成す。『春のみやまち』は、都で春宮に仕えた日々の記と、鎌倉への下向の記、そして鎌倉に到着してからの記が合せて記された一年に及ぶ一編である。雅有の意識の下、『嵯峨の通ひ』と『もがみの河路』の二編が繋がりをもって記されたならば、『都の別れ』、そし

て『春のみやまち』の前身とも言える形が、文永七年の時点で雅有の構成意識として出来上がっていたことが分かる。

### 第三節 『都の別れ』の場合

『嵯峨の通ひ』と『もがみの河路』が雅有の意識の下で、繋がりをもって記されたという視点を踏まえて、『もがみの河路』に続いて建治元（一二七五）年に成立した『都の別れ』を見てみたい。次に挙げるのは、その雅有の四番目となる日記『都の別れ』の序に相当する部分である。この記も『もがみの河路』と同じように、鎌倉への下向の記が中心である。

過ぎにし弥生のころより、雲の通ひ路、朝夕踏みならし、藐姑射の山、常磐の御蔭に馴れ仕へて、いとゞ都の名残、昔にもまさりて、立ち離れがたく覚ゆれど、心にかせぬ身、逃るゝ方なきことさへあれば、心ならず急ぎ出で立つ。ころは七月廿日あまりのことなれば、秋のあはれにうち添へて、都の名残を歎く。

いかにまた忘れ形見に思ひ出でん都別るゝころの有明

唐衣つまを都にとどめ置きてはるゝ行かん道をぞしぞ思ふ

賀茂の御社にて

惜しからぬ身を祈るかな帰りこん後の頼みも命ならずや

（『都の別れ』）

雅有は、前年の文永十一年九月十日に近衛中将に任ぜられている。文永六年の日記『嵯峨の通ひ』に昇進を切望する思いや昇進運動をしている旨を記してから五年が過ぎ、ようやく願いが叶ったという嬉しさに満ちあふれ、「雲の通ひ路、朝夕踏みならし」と宮仕えの身であることを言い、「藐姑射の山、常磐の御蔭」に喩えられる後深草、龜山、両院に「馴れ仕へて」いることを記している。そのため、「いとゞ都の名残、昔にもまさりて」と都から離れ難い思いは昔より増しているのだと言う。「心にまかせぬ身」とあるのは、変わらぬ京と鎌倉とを往還し仕えている身であるということ、そのため「逃るゝ方なきことさへあれば、心ならず急ぎ出で立つ。」と気が進まないと言いながら急ぎ出発する。「逃るゝ方なきこと」は、序の部分では記されないが、旅の途中に、「この浜名の橋は名を得たる所なる。人殊に情ある遊びども多ければ、今日は泊りたれど、放生会日数なければ、急ぎ過ぎんとするに、君ども来て、殊に興ありて遊ぶ。」とあることから、鎌倉の鶴岡八幡宮で八月十五、十六日に渡って行われる放生会のための下向であったことが分かる。「ころは七月廿日あまりのことなれば、秋のあはれにうち添へて、都の名残を歎く。」と歌を詠み、賀茂神社にて旅の無事を願う。

この記は『もがみの河路』の三倍近い量であり、記される内容は、全て都を顧み、偲び、歎きを含んだものとなっている。その中で、人々との別れが綿々と綴られる箇所がある。

八月朔日の暁深く発つ。留まる人々、見だに送らんとにや、車二ばかりにて、栗田

口のわたりに立てたる、轅なぐさの前を過ぐる程、言ひしらず悲し。やう／＼明けゆく空の横雲、風に乱れて、雨さへそぼ降る。松坂といふ所に、院の上北面前左馬権頭重清といふ者、追ひ来たり。歎きの日数いくほどなくて、歩きなど思ひ寄りぬほどなるを、思ひ送るもいふせければ、人目もしらずなどいふ。互ひに駒を控へて涙をぞ拭ふ。とかうためらひて、名残のことも言ひて別れぬ。これは、飛鳥井の近きわたりにて、朝夕来つゝ遊ぶ。御鞠の奉行にて、殊に言ひ馴れたり。又、端々いさゝかたづねしことも侍りし故にや、近く妻に遅れて、籠りゐて侍りしが、これまで思ひ立ち侍る、いとありがたし。相坂にて

立ち帰り・又逢坂と頼めども別れを止めぬ関守は憂し

逢坂の行来を護る神ながらなど塞き止めぬ別れなるらん

旅衣袂涼しき秋風に掬ばで杉の木蔭もる水

### 『都の別れ』

雅有が鎌倉に出発する八月一日のことである。京に「留まる人々」が車二両を連ねて、雅有を見送る姿が言いようもなく悲しく、明け方の空の雲も風に乱れ、天も泣く中進んでいく。そこへ、前左馬権頭重清という者が、妻と死別し悲しみに引き籠っていたが、人目を憚ることなく後を追いかけて来る。飛鳥井邸の近くに住んで居り、朝晩に関わらず来ては遊び、龜山院の御鞠会の奉行を務めた者でもあることから、特別親しい人物である。重清と雅有は、「互ひに駒を控へて涙をぞ拭」い、名残の言葉の数々を言い交わした後、別れている。そして逢坂では、三首の歌を詠む。重清と別れた後にも、雅有を慕うものが次の神奈備の森で待ち構えている。

神奈備の森とかやいふ所より、左衛門大夫仲頼、またかねてより待ちけると覚えて、

うち出でたり。道々名残互みに惜しみて行く。瀬田の橋渡りて、四、五丁行く。道傍

らなる所に、女の招くを見れば、京にて馴れ遊びし白拍子なり。この四、五日、物参

りとてたづねしに、こゝにて待ちけるなるべし。心ざしあはれなれば、うち入る。

### 『都の別れ』

左衛門大夫仲頼が待ち構えており、「道々名残互みに惜しみて行く」。さらに行けば「女の招くを見れば、京にて馴れ遊びし白拍子」で、別れの酒宴を催し、懷中から笛や笙、箏などを取り出して合奏し、「名残の句など数ふるに、皆涙落とす。いとど来し方恋しくて、進まれず。さのみあるべきならねば、心は留まりながら、出でぬ。」と人々との別れに、名残惜しさは増すばかりであることを言う。仲頼は、神奈備の森から、鏡山にも同行する。

鏡に、暮るゝ程に着きぬ。仲頼、なほこれまで慕ひ来ぬ。また、土器一流れくたり

て、物語りしつゝ、蓬の丸寝皆したり。

来し方の面影と見よ鏡山今日より後の忘れ形見に

『都の別れ』

「仲頼、なほこれまで慕ひ来ぬ。」とあり、都からこれまでの出来事を面影として写し留めておいて欲しい、鏡の名を持つ山よ、今日より後の忘れ形見として、と詠む。『もがみの河路』では、日記中の十七首中十六首が『隣女和歌集』の収録歌であった。実際に旅の間に詠まれた歌を配すと共に、旅情を表出するために「互思恋」や「寄雪恋」などの題詠の独詠歌を織り交ぜた構成になっている。一方、『都の別れ』では、『隣女和歌集』巻四の収録歌と一致するのは、四十二首あるうち十四首である。鏡山で詠まれた歌が、『都の別れ』の中で初めて『隣女和歌集』巻四・雑に収録されている歌である。この鏡山の歌までに、「秋のあはれにうち添へて、都の名残を歎く」として詠んだ歌二首、「賀茂の社にて」と詠んだ歌一首、さらに「相坂にて」と三首の歌を日記中に配しているが、実際の旅では、鏡山に到着するまで、下向中の雅有は歌を詠んでいない。人々との別れを惜しむ場面は、日記のために書き下ろした歌と共に配されているのである。

また、旅程、旅先での光景は、京と鎌倉とを幾度も往還している旅馴れた雅有にとつては、よく見知ったものである。それでも旅の醍醐味とも言える珍しい出来事も記している。

愛智川といふ所に下りたれば、十一、二ばかりなる尼の、白子とかやいふなる、髪よりもはじめて、眼の中まで、黒き所なき者出で来て、物を乞ふ。年ごろ名ばかりは聞けども、いまだ見ざりつるに、目当てられずかはゆし。これも様変はりたりと思ひて行くに、また六、七ばかりなる幼き者、行き合ひたり。見れば、額のなかばより鼻の端まで、丸く毛生ひたり。かゝる姿こそ、世になきものなれ。かようなことゝも、旅ならではないかで見ることができ、させる事ならねど、例少なきによりて記しておく。暮れ方に、摺針山を越ゆ。限りなく都恋しく、物あはれなり。またなく悲しきは、旅の山路の夕べの景色なりけり。思ふ人々ある都だに、秋の夕はなほ身しむものなるに、たゞ言はん方なし。

これならで何を寂しと思ひけん旅の山路の秋の夕暮

『都の別れ』

「かようなことゝも、旅ならではないかで見ることができ、させる事ならねど、例少なきによりて記しておく。」と、何度も同じ旅程で上洛、下向を繰り返している雅有であるが、その都度、目新しい出来事と出合ったようである。しかし、摺針山を越え、都恋しさは言いようもなく、旅の山路は喩えようもなく寂しい。親しい人々と都にいる時でさえ、秋の夕べは身にしみるものであるのに、旅の途中である身には、言いようもなく寂しいものである、と言う。旅での出来事を記し、旅人としての心情も記す雅有は、『都の別れ』の中で、度々都を顧みている。雅有は仲頼を伴ったまま、こうした旅ならではの珍しい光景を記している。

その愛知川を過ぎ、番場にて「これより帰らん」と仲頼が言うので別れの宴を催し、皆が涙で袖を濡らす。仲頼はそれでも帰るのを惜しんで、垂井まで同行している。

仲頼さのみ日を送り侍らんも不便なれば、人々これより帰す。侍従、我が着たる帷子を取らず。側にて詠み侍りし。

降る雨の簀代衣塩垂れば恋ひん涙の形見とも見よ

『都の別れ』

仲頼がこうまでして付いて来るのを、「さのみ日を送り侍らんも不便なれば、人々これより帰す。」と、都との名残を断ち切るかのように、人々は仲頼を帰らせている。佐藤恒雄氏は、この場面を「ここに至るまで、名残惜しさ、都を離れたい旅人の心を執拗に書き重ねて表現しており、仲頼はさながら、その名残惜しさの象徴であるかのごとくに形象されている(注60)。」と述べておられる。こうした人々との尽きぬ別れの場面は、歌で綴られた『もがみの河路』では描かれなかったことである。

旅先で興味をひかれる出来事や人物に行き会う度に、ずっと留まっていたいという思いに駆られる雅有であるが、放生会に間に合うように戻らなくてはならないと「心ならず急ぎ出で立ち」、八月一日に出発し、同月十三日には鎌倉に到着する。先に成立した紀行文『もがみの河路』は、鎌倉に到着した時点で終わっているが、この『都の別れ』で雅有は続けて鎌倉での様子を、日付を記す形で残している。

十三日、故郷に帰れたれば、見しにも似ず荒れまさりたり。こゝには誰こそありしかなど、さまざま昔恋しくて、目も合はず。

都人今日古里の月見ると日を数へてや空に待つらん

虫の音も月も昔の秋ながら我が独寝の床ぞ変れる

山路まで慕ひにけりな久方の雲井に馴れし夜半の月影

『都の別れ』

ここでは荒れ果てた故郷・鎌倉を見、「さまざま昔恋しくて」と、懐旧の情を詠む歌となるはずだが、雅有の心は依然、京にある。詠む歌は自然に都を恋しく思う歌になってしまふ。都に残して来た人々は、故郷である鎌倉の月を雅有が見ていることを思つて、帰京の日を指折り数えて待っていることだろう、という。また、虫の音も月も昔と変わらぬ秋であるのに、独り寝の身は、都を思う心が変わってしまったと詠み、最後には「雲井に馴れし夜半の月影」と詠み、旅の途中まで雅有を慕つて来た人々と同じように、京の宮中で見馴れた月も後を慕つて山路まで来たことだ、と詠む。この歌は、家集の巻四・秋・二〇八五番に「山路月」という題で詠まれた歌とされているが、ここでは雅有の都への思いを表した一首として配されている。鎌倉に到着してから、雅有の都への思いは途切れること

はない。続いて放生会の行われた八月十五日の記事がある。

十五日、放生会にて、侍従・丹後の守引き連れて供奉。かやうのことにつけても、

まづ都の事のみ恋しけ□□何のあやめも見分かず。眺めのみして、舞端々も見ねば、人々いかななど言ふ。帰さに、道に月出でたり。わが住む峰高ければ、月まだ隠れて待たる。

谷隠れ我がある山の高ければ道に出でにし月ぞ待たるゝ

秋の月眺めがらなる光かと今宵を知らぬ人に問はゞや

苦しさいひ、また、明日の出作ことに解かるべしとて奉行人申せば、名高き月をも見ず、樂三ばかりして寝ぬ。

### 『都の別れ』

『都の別れ』の中で、下向の目的であつた放生会の記事である。しかし、雅有は「かよの事につけても、まづ京の事のみ恋しければ、何のあやめも見分かず。」と、ここでも離れた都を思い続け、「眺めのみして、舞端々も見ねば、人々いかななど言ふ。」と、周囲が不審に思うほど、ぼんやりとしてしまう。帰り道で月が出たが、雅有が住む場所は、峰が高く月が隠れている。そのことを地の文で述べた後、もう一度歌で、月の出を心待ちにする心情を詠む。さらに、秋の月は眺めるのに相応しい光だからであろうか、月の出を待つ今宵の様子を知らない人に問いかけてみたいものだ、と詠む。この二首目の歌は、「八月十五夜」の詞書で巻四・秋・二〇九七番の収録歌である。実際は、中秋の名月を見ながら詠んだ歌であるかもしれない。しかし、『都の別れ』では、月の出を待ち望む歌を配すものの、「名高き月をも見ず、樂三ばかりして寝ぬ。」と中秋の名月を待つことなく寝たのだとする。鎌倉での名月も、雅有に鎌倉においての感慨を詠ませるには至らなかった。それだけ、都への思いが強く表れている。

翌日も、気分は回復しないまま、和歌会を催すことが出来ない。

十六日、あまり苦しうて、今日は百日の歌の果てなれば人々呼びて会などあるべけれど、叶はねば、いま百日を延べぬ。

和歌浦や百夜の数をかき延べて藻屑の外の玉を尋ねん

### 『都の別れ』

この歌は、「和歌会百日満ち侍りて、又百日始め侍らんとて」と詞書して、家集の巻四・雑二四九九番に収録されている。十三日、十五日、十六日にそれぞれ、『隣女和歌集』と同じ歌が一首ずつあるのは、それぞれの歌を核として、記事を作り上げたからであろう。歌によつて、都恋しさをいう雅有は、『都の別れ』の最後に、日付を記すことなく、歌を十首配している。

折々詠み侍りし歌。

月を見て

眺めつゝ契りし事を忘れずは月にや人の思ひ出づらん

山里の月は雲井の外ならば都忘るゝ夜半をあらまし

月影は同じ雲井の秋ながら千里の外に見るぞ悲しき  
蟋蟀の枕近く鳴き侍りしかば

都思ふ枕の下のきりぐす我が泣く音をもあはれとや聞く  
きりぐす我がなく友となりにけり汝も都や恋しかるらん  
時雨降る日

かきくらし都の方も時雨せばひたすら恋ふる涙とをしれ  
大空に掩ふばかりはなけれども時雨にまけぬ袖の村雨  
野分したる夕に

野分する荒れたる宿の夕暮れにひとり眺むる袖を見せばや  
独寝は、夏の夜だに長きものなるを、名に負ふ長月の夜なれば明けやらず。

明けやらぬ寢覚のまた寢覚めかへり幾度鶏の声を待つらん  
踏み初めし雲の通ひ路立ち帰りまた山里に身を隠すかな  
京なる人のもとに遣はし侍りし

恋しさのあまりになれば水茎に書き流すべき言の葉もなし  
『都の別れ』

この「折々詠み侍りし歌」は、家集の収録歌と重なるものは、次の三首である。

2059 垂の枕辺になくを  
都思ふ枕の下のきりぐす我が泣く音をもあはれとや聞く『隣女集』巻四・秋  
2423 鶏  
明けやらぬ寢覚のまた寢覚めかへり幾度の鶏の声を待つらん（巻四・雑）  
2392 京なる人のもとへ申しつかはし侍りし  
恋しさのあまりになれば水茎に書き流すべき言の葉もなし（巻四・恋）

家集から場面に合った歌を探し出して配し、日記執筆時に新たに作歌することで主題を補強し、都を偲ぶ心を表出しようとしていることが分かる。『都の別れ』の最後の歌は、離れた都にいるあなたを恋しく思う気持ちが募って、さらさらと書くに相応しい言葉も見つかりません、と都恋しさが強まり、言葉にすらなくなつたとして筆を置いている。

『都の別れ』は、「秋のあはれにうち添へて、都の名残を歎く。」と序に相当する部分で明確に示した箇所参照させ、秋の景物を連ね、歌でもつてこの記を結ぶ。雅有は『都の別れ』において、下向の記から鎌倉に到着してからの感慨を散文的な地の文と歌との両方で描き出している。鎌倉で秋の景物に寄せて歌を詠みながら、雅有の意識は離れた都を思う。『仏道の記』の旅の歌を連ねて括った部分と構成は似ており、『もがみの河路』で一貫して、歌を用いて都を顧みる心情を綴る方法と似ている。序から結びに至るまで、秋の情景と合わせて一貫して都を顧み、名残を惜しむ人々を描き、最後にも秋の景物と合わせて



詠んだ歌を配す。先に成立した『もがみの河路』は、「上れば下るに」という『古今集』を踏まえた慌ただしく上洛、下向を繰り返す身の上を表すために歌と短い地の文で記した、紀行文のみの主題であったが、『都の別れ』に至ると、下向の様子を記す紀行文と鎌倉においての記とを一つの主題で描き出していることが見えてくる。

最初の日記『仏道の記』の終盤で旅の歌を配した部分には、一貫した主題意識というものは見られなかった。続く紀行『もがみの河路』は、『都の別れ』と同じ下向の旅程を辿るが、その殆どを歌による心情で綴り、紀行文として独立した主題を持ち、『嵯峨の通ひ』の続きと読めるような内容が記されており、二編の成立時期も重なることこそないものの、従来考えられてきたよりも、かなり近い成立時期であると考えられる。しかし、それぞれが独立した主題を持つ日次日記と紀行文であった。その二編を合わせて発展させた形となった『都の別れ』は、日記と紀行を併せ持ち、一貫した主題を持っている。紀行部分に日付を記すようになったのも、『都の別れ』からである。雅有の紀行文における、このような主題の強調、日記全体で一つの主題を持つ方法は、雅有の弘安三年に記された最後の日記『春のみやまち』へと繋がっていく。

『春のみやまち』は、一月一日から十二月最終日までの一年間を通しての記であり、後に伏見天皇となる春宮・熙仁親王に近侍した日々を、和歌に関わること、蹴鞠に関わること、春宮への『古今集』の進講や、下向する雅有を囲んで別れの盃を交わす場面等を、月毎に主題を区切って記している。続けて記される鎌倉への旅路では、『都の別れ』で都を顧みるのと同様、望郷の思いを記すと共に、都にいる春宮のことを度々思い起こす。紀行文に古典作品を踏まえた描写が見られるのも『春のみやまち』の特徴である。さらに、十二月の最終日に鎌倉においても春宮のことを思い起こし、春宮の歌を共に配し、唱和する歌によって一編を閉じる方法を探っている。最後に、『春のみやまち』の最終日の記事を挙げたい。

師走の晦日の日は精進にて、過ぎぬる年の日数にあてゝ、滅罪のために光明真言見て、  
来む年の日数にまた心経読みて祈りつつ、苦しければ、休まむとする程に、中納言の  
律師まうで来たれば、年の名残惜しまむとて、積れば老いとなる盃差し出で、年の  
暮れともいはず、心のどこかに物語するに、京より文どもあり。見れば、春宮の御方よ  
りとてあるを、まづ慌て見れば、右衛門督の局の文細かにて、下りし後の御日記、御  
探り題の短冊下し賜る。目も眩れて読みも解かれねば、律師に読ませて泣き居たり。  
かゝらぬにだに酔ひ泣きはする癖に、ましてかやうに仰せ下さるれば、止めがたき涙  
ならむかし。

探り題に旅といふことをとて、

空にのみ心は行きてかよふとも知らでや越ゆる関の旅人

十一月十五日御手習に、

旅人は移りにけらし鏡山見馴れし跡に影もとまらず

今宵は二番なれば、女房とて、二番は当番なり

書き付けしその名ばかりを水茎の跡にぞ忍ぶ人のおもかげ

十二月一日、東へ便ありとて、文書く所にて、

今もなほ木綿付鳥の音をや鳴くいひしに変わる心ならずは

この歌は下り侍りし時、御会に「かねてより木綿付鳥の音をぞ鳴く越えむ日近き関の此方に」と詠み侍りし事を思し召し出でたるなめり。取り敢へぬ涙のまぎれに。

逢坂の木綿付鳥よいつまでと関路隔てて音を尽すらむ

『春のみやまち』

十二月二十六日に鎌倉に到着した雅有は、「師走の晦日」には精進ということで、滅罪のために光明真言、般若心経を読んでいたところ、中納言の律師が来て、二人で今年の名残を惜しもうと盃を交わす。そこに、都から手紙が届く。見ると、春宮の許からで、雅有の下向後に春宮の手によって記された御日記と、探題和歌の短冊が下賜されたのであった。雅有は、感激の涙で読むことすらできず、中納言の律師に読み上げてもらう。「探題に旅といふことをとて」、「十一月十五日、御手習に」と、雅有が鎌倉へ下向する間に春宮も随時、旅人である雅有を思い遣って歌を詠んでいたのである。それらを、この『春のみやまち』の最終日に雅有は記している。

鎌倉の雅有宛に手紙を届けるにあたつて、「十二月一日」に春宮は歌を詠んでいる。雅有が下向の折に詠んだ「かねてより木綿付鳥の音をぞ聞く越えむ日近き関の此方に」と、前もって木綿付鳥のように声を立てて泣くことであるよ、越える日の近い関のこちら側で、と詠んだ歌と修辭を重ねた歌である。春宮は、「今もなほ木綿付鳥の音をや鳴くいひしに変わる心ならずは」と関を越えて行つた雅有は、今でもやはり泣いているのであるうか、出発前と違わぬ心でいるのであれば、と詠む。雅有はそれに唱和する形で歌を詠み、「逢坂の木綿付鳥よいつまでと関路隔てて音を尽すらむ」と、いつまでこうしていなければならぬのであるうか、と関を隔てて鎌倉にいる我が身を歎いて、『春のみやまち』の筆を置く。

月毎の主題が明確にある点は、『嵯峨の通ひ』、紀行文が古典作品をも踏まえて日を追つて記される点は、『もがみの河路』と『都の別れ』の都を本拠と思ひ、嘆きながらも旅を語り、都への思いへと返つていく部分と構成が同じである。『春のみやまち』という題名にある通り、「春宮に仕える日々」を全体の主題とし、雅有はこの一編を記している。既に成立した四編で見せたさまざまな構成、一つの主題を中核に記す方法などを受けての集大成が『春のみやまち』となるのである。雅有の日記の始まりである『仏道の記』にあった、主題意識、構成意識とそれに伴う虚構など、それぞれの要素を拾い上げて、雅有は続く四編の仮名日記を充実させていく。雅有の五編の仮名日記から見える推移から、雅有の日記が年を経るにつれて充実し、確かな構成意識を持つて記されていることが見えるのである。

## 結び

従来、『嵯峨の通ひ』は、古典講読の様子や他の記録に見られない藤原為家・阿仏尼夫妻の嵯峨の中院での様子を知らせる、資料的な価値に重きがおかれてきた。それは、日を追って記す構成であることから、事実に基づいた記であり、虚構の入り込む余地はないものと考えられてきたからである。しかし、それは雅有が事実を改変しながらも、より現実らしく見えるように、構成に工夫を凝らして作り上げた結果であることが分かった。日を追って進む『源氏物語』講読のみを記すのではなく、蹴鞠や神楽の練習をした日などを記事とし、そうした遊興の日々に、大堰河に出掛けたとする虚構の一日を挿入している。家集との比較、『源氏物語』の野分巻の一卷分の講読をした記録がないことなどから、虚構の記事であることが分かる。雅有は和歌や詩句の情景を重ね合わせ、九月の最終日の情趣を描き出し、「秋果つる日」に大堰河に出掛ける意義を強調しながら、なかなか叶わない近衛中将への昇進を切望する歌を配し、日記中に自らの心情を吐露する。最初の記である『仏道の記』でも虚構を用い、そこから雅有による日記の作品化、物語化の意図が見え、続く『嵯峨の通ひ』の中にも大堰河の日と共に、小さいながら幾つかの虚構の痕跡が認められることから、虚構を用いるのは雅有の方法の一つであったと言いうことができる。

その『嵯峨の通ひ』の中で、『源氏物語』の講読が大きな主題である。雅有は、講読の様子を記す日記中の表現に、講読したばかりの『源氏物語』の表現を反映させ、また、『嵯峨の通ひ』の中の講読を受ける前の記事に、『源氏物語』と重ね合わせた描写が見えることから、雅有には既に『源氏物語』の素養があったことも分かる。文永三年まで、雅有は鎌倉において、六代將軍・宗尊親王に近侍していた。そこでは、『源氏物語』の進講があり、源親行などの、鎌倉に本拠を置く源氏学者との交流もあったようである。そして、『嵯峨の通ひ』の前に成立した『仏道の記』では、「植ゑ置きし若木の桜咲き初めば告げよわが背子見にかへりこん」と詠み、『源氏物語』須磨巻と合致する語句、語順を用いた歌を配している。そして続く歌で家道の蹴鞠と結びつけて、『源氏物語』から自らの感慨を詠むことに繋げて、「若木の桜」と我が身とを対照させている。やがて、雅有は弘安三年の『弘安源氏論義』において、「源氏の聖」と称されるに至る。『嵯峨の通ひ』で、為家が同じ古典に親しむ者として、『源氏物語』の素養を持つ雅有を敬待し、『源氏物語』の巻に合わせた趣向に行動を似せるなどしたのは、偏に、雅有の鎌倉の頃から培われてきた、純粋に古典を楽しむ、『源氏物語』の本文にも親しむという姿勢が見えたからであろう。

雅有の仮名日記は、五編それぞれ色合いが違って見える。日記、紀行、また両者を併せ持った記があり、それぞれが記の中核を成す主題を描き出す。雅有は、主題に合わせて構成を考え、その場に合った記事や描き方を選択しているのである。日次日記『嵯峨の通ひ』の次に記された『もがみの河路』は、紀行文として独立していながら、内容から『嵯峨の通ひ』との繋がりが見え、さらに、両日記の成立は、これまで考えられてきた一年の断絶よりも短い、数ヶ月の日が空いているだけであることが分った。この二編の記が、雅有の繋げようとする意識の下に記されたと考ええると、後に続く『都の別れ』そして雅有最後の日記『春のみやまち』に至る構成意識の流れが見えてくる。雅有の構成意識が、一編全体に及ぶ主題を持つ、『春のみやまち』に集約していくことが見えたが、弘安三年の一年間を通して記された、この記の詳しい内容検討については、別の機会を持ちたい。

注

(1)、水川喜夫著『飛鳥井雅有日記』(勉誠社文庫<sup>136</sup>・一九八六年)を底本とし、底本文はルビとして示した。仮名の本文に漢字をあてた箇所もある。本文には無い送り仮名には、中黒(・)をルビとして示している。虫損の箇所は□を文字数分、充てている。

(2)、兼明親王(延喜十四(九一四)年―永延元(九八七)年)は、醍醐天皇の皇子で、母は藤原菅根女の淑姫。後中書王と呼ばれた具平親王に対し、前中書王、嵯峨の小倉山荘に隠退したことから小倉親王とも呼ばれた。雅有と直接の関わりはない。「中書王」は、親王で中務卿に任ぜられた者の称で、雅有が鎌倉で文永三年まで仕えていた宗尊親王もこう称された。

(3)、『吾妻鏡』の建長三(一二六三)年七月二十三日の記録には次のようにある。「廿三日、庚子、天晴る。將軍家五百首の御詠歌、前右衛督教定卿に付して、合點のために入道民部卿(為家)の許に遣はさる。」とある。宗尊親王の詠歌への合點の依頼を教定を通じて為家に行っている。雅有と為家が『嵯峨の通ひ』で関係が深いことが分かるように、教定と為家とも密接な関係にあったことが分かる。

(4)、『嵯峨の通ひ』の為家の年齢については、九月二十一日の記事に「酔ひにすゝめられて」、主人の為家が雅有に蹴鞠を勧め、再三辞退する雅有に「なほ否べど、七十二の老入道立たれてひらに責めらるれば、かつは歌の師といひ、おとなしき人の命といひ、さのみは返さひがたければ、裸足にて立つ。」とあることから分かる。『嵯峨の通ひ』は、題号の下にあるはずの年号が虫損のため不明である。そのため、雅有の後裔である飛鳥井雅威が朱書きで「文永六年也。入道大納言為家此記に七十二のよし所見、此年齢を以て年号を考しむ。」と注記している。この為家の「七十二」という年齢と、家集『隣女和歌集』巻二の収録歌と日記中の歌が重なることにより、『嵯峨の通ひ』に記された事が文永六年の出来事であったことが特定される。

(5)、三田村雅子氏『嵯峨の通ひ』の源氏物語(記憶)の中の源氏物語<sup>12</sup>」「『新潮』第一〇二六巻・二〇〇五年六月)二三六頁。

(6)、『井蛙抄』の本文は、佐々木孝浩他校註『歌論歌学集成』第十巻(三弥井書店・一九九九年)三二一頁。

(7)、井上宗雄氏「飛鳥井雅有の日記と趣味生活」『國文學』第一〇巻第一四号・学燈社・一九六四年十二月)一〇八頁。

(8)、森田兼吉氏「飛鳥井雅有と日記文学」『日本文学研究』第十九号・梅光学院大学日本文学会・一九八三年十一月)一〇五頁。

(9)、『玉葉集』『新編日本古典文学全集』第四十九卷・小学館・二〇〇〇年)

(10)、『後撰和歌集集』(『新日本古典文学大系』第六卷・岩波書店・一九九〇年)。

(11)、『和漢朗詠集仮名注』(伊藤正義・黒田彰共編著『和漢朗詠集古注釈集成』第二巻下・大学堂書店・一九九四年)には、「時ニ、九月ノ末ニ、通夜セリ。次ノ日ハ、冬ノ節ニ入。其ノ心ヲ作ル也。三秋ハ、々三月也。而レトモ、今ハ九月ト可心得也。心ハ、九月ノ末ナトニ、此コ彼コノ岸ニ、霜ノフリタルヲ見テ、余リニ興アル故ニ、雪ノ花、初テ開クニ似リト也。」とある。「三秋」は秋の三月のことであるが、ここでは九月のことを指し、九月の終わりに一夜で秋の光景が冬に変わってしまう情景を表す。雅有の見たとする情景は、この詩句と重なり合うものであった。

本文引用は『和漢朗詠集』(『新編日本古典文学全集』第十九巻・小学館・一九九九年)に拠る。

(12)、『本文引用は、新編日本古典集成』『古今著聞集』上、下(新潮社・一九八三年)一四七頁に拠る。また、日本古典全書『土佐日記』(萩谷朴校註・朝日新聞社・一九五〇年)に収録されている『大井川行幸和歌序』は、『古今著聞集』と『扶桑集』とを校合したものである。

(13)、『古代中世暦 和暦・ユリウス暦 月日対照表』(日外アソシエーツ・二〇〇六年)で確認すると、文永六年(己巳)九月の最終日は、二十九日(壬申)とある。

(14)、『引用は、『拾遺和歌集』(『新日本古典文学大系』第七巻・岩波書店・一九九〇年)。

(15)、『御蓋山』という字も当てられ、大和の歌枕。山名は、天皇など高貴な人にさしかける天蓋の意。天皇の御蓋として近侍する意に掛けて、近衛の大将・中将・少将の異称となる。『日本文学地名大辞典』詩歌編(下)(大岡信監修・遊子館・一九九九年)に拠る。)

(16)、『公卿補任』(『新訂増補 国史大系』第五十四巻 公卿補任 第二篇(吉川弘文館・一九六四年)によると、雅有は「正嘉二七九正五位下。同十二月十四左少将。」とあり、正嘉二(一一五八)年七月九日には正五位下、同年十二月十四日に左少将となっている。『嵯峨の通ひ』の記事内容である文永六(一二六九)年には、正四位下左少将である。

(17)、『隣女和歌集』の引用は、内閣文庫本を底本として校訂された『新編国歌大観』に拠る。同じ内閣本を底本とした『私家集大成』と、群書類従本は完本が残されている。また、巻一が欠けているが、雅有の自筆本とも言われる諸伝本のうちの最古本が、高松宮旧蔵で国立歴史民族博物館蔵本があり、異同の確認の際、これらを参考とした。

(18)、『隣女和歌集』は、各巻の下に年号が記されている。巻二の下には、「自文永二年 至文永六年」とあることから、この五年の間の成立であることが分かる。

(19)、『公卿補任』によると、雅有は文永五(一二六七)年十一月九日に正四位下に叙せられ、文永十一(一二七四)年九月十日に右中將に任ぜられている。

(20)、弘安元(一二七八)年に完成を見た十二番目の勅撰集『続拾遺集』に入集している。

中將をのぞみ申て年久しくなりにける、五月雨の頃人のもとにつかはしける  
侍従雅有

552 いかにせむ我身ふりゆく五月雨に頼む三笠の山ぞかひなき『続拾遺集』雑・春)

また、『春のみやまち』弘安三(一二八〇)年四月二十八日に、次のような記事がある。

内裏さまには、中將に遅くなりし憂への歌を御口につけらるゝ由、宰相の典侍これ  
を語れば、方々面目也。  
『春のみやまち』

三笠の山を詠んだ雅有の歌に関わる記事である。女房達と共に『続拾遺集』を後宇多天皇が御覧になつていた折、天皇が雅有の「中將に遅くなりし憂への歌」を口ずさむ。この歌が、先に挙げた『続拾遺集』に入集した五五二番の歌を指す。それを天皇が口ずさんでおられた、と宰相の典侍(雅有の娘)が雅有にそつと知らせたのである。人事の最終決定者である後宇多天皇は、雅有の昇進がなかなか叶わなかったことを気にして、この歌を口ずさまれた。勅撰集への入集と共に、雅有にとって嬉しい出来事であつたという記事である。

(21)、この記は、首部が欠落していることから、雅有が付けた題名は不明である。佐々木信綱氏は、『無名の記』と命名した。『仏道の記』と呼ぶのは、仏道修行の記が内容として大きな割合を占めていること、飛鳥井雅威による注記に「右雅有卿仏道の記也」とあることから仮称である。

(22)、『仏道の記』については、明石での観月の記と、仏道修行の記との二部構成と見る説もある。佐藤智氏は、〈明石観月〉と〈芦屋隠棲〉と名付けて二つに纏めて考えておられる(「飛鳥井雅有の芦屋隠棲―『仏道の記』の作品化について―」『日本古典文学の諸相』・勉誠社・一九九七年)。しかし、(一)鎌倉から嵯峨、芦屋への上洛の記と、(四)帰京と奈良、伊勢への旅の記は、短い散文と歌を配した箇所でありながら、雅有の構成の跡が見え、『嵯峨の通ひ』の後に成立した紀行文の、前身であるとも考えられる。従って、ここでは四部構成と見たい。

(23)、『伊勢物語』の引用は、福井貞助校註・訳『伊勢物語』(『新編日本古典文学全集』第十二巻・小学館・一九九四年)に拠る。

(24)、佐藤恒雄氏「飛鳥井雅有『無名の記』私注―作為または虚構について―」(『中世文学研究』第七号・一九八一年八月)五十二頁。

(25)、『白氏文集』「琵琶引」の本文引用は、平岡武夫・今井清著『白氏文集歌詩索引』下冊・白氏文集歌詩篇（同朋社・一九八九年）に拠る。

(26)、佐藤恒雄氏 前掲論文（注<sup>24</sup>）五十九頁。

(27)、佐藤智広氏は、仏道修行の果てに、雅有が「談義して、座禅時を移すに、柴垣の真白く見ゆるに、明けぬる心地して、松の戸を押し開けたるに、霜夜の月光ことに清く、心の闇も晴れぬらんかし。」という明け方の情景を記すことに注目され、明石観月と仏道修行の記という『仏道の記』の中の二つの大きな虚構の箇所を、「二つの実体験を素材とし、雅有は日記文芸としての作品化を行っている。そこには、月に心を捉えられた雅有自身が造型されている。よって、この場面における庵での修行生活も、月との出会いを際立たせるための装置でしかなかったのである。」と述べておられる。（「飛鳥井雅有の芦屋隠棲―『仏道の記』の作品化について―」『日本古典文学の諸相』桑原博史編・勉誠社・一九九七年）

(28)、『古今和歌集』（『新編日本古典文学全集』第十一巻・小学館・一九九四年）

(29)、「心の隈」は、『源氏物語』に野分巻、夕霧巻、総角巻、にそれぞれ登場する。

①さるは、心の隈多く、いと賢き人の、末の世にあまるまで、才たぐひなく、うるさながら、人として、かく難なきことは難かりける。『源氏物語』野分巻

野分巻では、源氏が夕霧との話の中で、内大臣（頭中将）を評した際の言葉である。批判した後、「さるは」以下、褒めており、この場合の「心の隈」は、人には察知できない考え、思慮深さの意になるうか。

②にはかにと思すばかりには何ごとか見ゆらむ。いとうたてある御心の隈かな。よからずもの聞こえ知らする人ぞあるべき。あやしう、もとよりまろをばゆるさぬぞかし。『源氏物語』夕霧巻

夕霧巻では、夕霧が雲居雁に向けて発した言葉である。落葉宮の母・御息所からの手紙を後ろから奪い取った雲居雁との間の「心の隈」は、心の隔ての意。

③ただかやうに物隔てて、言残いたるさまならず、さしむかひて、とにかくに定めなき世の物語を隔てなく聞こえて、つつみたまふ御心の隈残らずもてなしたまはむなん、兄弟などのさやうに睦まじきほどなるもなく、いとさうざうしくなん、世の中の思ふことの、あはれにも、をかしくも、愁はしくも、時につけたるありさまを、心にこめてのみ過ぐる身なれば、さすがにたづきなくおぼゆるに、疎かるまじく頼みきこゆる。『源氏物語』総角巻

総角巻では、宇治の八の宮亡き後、薫は弁の尼に内情を打明ける。その際、薫は大君と語らい、心の内のことを話して欲しいのだ、と訴える。

以上挙げたように、『源氏物語』中に三例ある「心の隈」であるが、本稿では、「九月十三夜」、「華やかにさし昇る」、「小倉の山」との関連から、『源氏物語』と『嵯峨の通ひ』との重なりを見たいため、参考として注に挙げるに留める。

『源氏物語』の本文引用は、『源氏物語』第一巻―第六巻（『新編日本古典文学全集』

第二〇巻―第二十五巻）小学館・一九九四―一九九八年）に拠る。

(30)、渡辺静子氏『『嵯峨のかよひぢ』の研究―私注と現代語訳』（『大東文化大学紀要』人文学・第二十八号・一九九〇年三月）三七五頁。

(31)、『吾妻鏡』の本文は、永原慶二監・貫志正造訳注『全譯吾妻鏡』（新人物往来社・一九七七年）に拠る。

(32)、教定の死について、『吾妻鏡』によれば「日来所煩瘡。」、『尊卑分脈』によれば「腫物所勞。」とある。死の直前の文永三年三月三十日に鎌倉において行われた、御所当座歌会に出席していたことから、急逝であったと思われる。

(33)、松原正子氏「飛鳥井雅有の研究」『日本文学』第十四号・立教大学・一九六五年六月）四十六頁。

(34)、本文は、『源氏物語古註釈叢書』第五卷（武蔵野書院・一九八二年）所収の『源氏秘義抄』に附属の『源氏絵陳状』に拠る。

(35)、稻賀敬二氏は、論（『源氏秘義抄』附載の仮名陳状―法成寺殿・花園左府等筆廿巻本源氏物語絵巻について）『国語と国文学』第四十一巻六号・一九六四年六月）の中でこのように判じておられ、この点について、寺本直彦氏は「これも一応不審であるが、この点は教定に一時改名したような事情でもあったかとして、『二条の兵衛の督』を教定とみる稲賀氏説に賛したい。」（寺本直彦著『源氏物語受容史論考 正編』（風間書房・一九七〇年）八二九頁）と述べておられる。確かに宗尊親王の時代の「二条の兵衛の督」で、前二条中将雅経の子息という二点が符合するのは、教定であると考えられる。前揚論文（注33）の松原氏も、この人物を教定と解して論を進めておられる。

(36)、三田村雅子氏「『源氏物語』の神話学―権力者たちの源氏物語―」（『源氏研究』第三号・一九九八年）一四一頁。

(37)、「揚名介」は、『源氏物語』夕顔巻で、源氏が夕顔の素性を知ろうと惟光に聞き込みをさせ、宿守である男が答えた言葉の中に出て来る役職である。

「憎しとこそ思ひたれな。されど、この扇の尋ぬべきゆゑありて見ゆるを。なほこのわたりの心知られん者を召して問へ」とのたまへば、入りて、この宿守なる男を呼びて問ひ聞く。「揚名介なる人の家になんはべりける。男は田舎にまかりて、妻なん若く事好みて、はらからなど宮仕人にて来通ふと申す。くはしきことは、下人のえ知りにはべらぬにやあらむ」と聞こゆ。さらば、その宮仕人なり、したり顔にもの馴れて言へるかなと、めざましかるべき際にやあらんと思せど、さして聞こえかかれる心の憎からず、過ぐしがたきぞ、例の、この方には重からぬ御心なめるかし。

（『源氏物語』夕顔巻）



『原中最秘抄』には親行による解釈があり、また雅有の参加した『弘安源氏論義』にも「揚名介」は難義として登場している。

小川剛生氏は「二条良基と「揚名介」―除目の秘事、および『源氏物語』の難義として―」（『三田国文』二十二 一九九五年六月）で、「年給の権利が行使されない事（未給）を救済するために設けられた、正・権官の外の、職掌も得分もない官。揚名史生や揚名目がまず行われ、さらに介に及んだと考えられる。故に特定の任国を定めることはない。『源氏物語』の揚名介はこれに該する。」と判じておられる。

（38）、池田亀鑑著『源氏物語大成』第十二冊・研究編（中央公論社・一九八五年）一二六頁。

（39）、『弘安源氏論義』は、源具顕の手により記された記録であり、「具顕朝臣仮名記」の名称で呼ばれることもある。池田亀鑑著『源氏物語大成』研究資料編（中央公論社・一九五六年）と『群書類従』（第十七輯・連歌部物語部・塙保己一編・平文社・一九三一年に本文はある）。

（40）、「源氏の聖」とあるのは、『古今集』の仮名序に準えて記された『弘安源氏論義』において、柿本人麻呂の位置に雅有を置いていることにある。両者を並べてみると、次のようになる。

「古よりかく伝はれる中にも、堀川院の御時よりぞもてなされける。又、今の世には三の位藤原雅有なん源氏の聖なりける。これは君も臣も皆ゆるせるなるべし。又、藤原の康能といふ人、あやしく源氏にたへなりけり。雅有は康能が上に立たんこと難く、康能は雅有が下に立たむこと難くなん有りける。」（『弘安源氏論義』）

「古よりかく伝はるうちにも、ならの御時よりぞひろまりにける。かの御時に、正三位柿本人麿なむ歌の聖なりける。これは、君も人も身を合はせたりといふなるべし。秋の夕、龍田河に流るる紅葉をば帝の御目に錦と見たまひ、春の朝、吉野の山の桜は人麿が心には雲かとのみなむ覚えける。また、山部赤人といふ人ありけり。歌にあやしく妙なりけり。人麿は赤人が上に立たむことかたく、赤人は人麿が下に立たむことかたくなむありける。」（『古今集』仮名序）

ここでは一部分を示したが、『弘安源氏論義』には問答を記した第一部と、このように『古今集』仮名序に準えて記された第二部がある。この論議に参加した八人の近臣たちのうちの最年少と思われる源具顕がこの記を残している。雅有の日記『春のみやまち』において、雅有が春宮・熙仁親王に『古今集』を進講した際、具顕は講師として参加している。

その後、具顕の朝臣参りたれば、御談義を始めらる。古今は仰せによりて、秘本を

参らせ入る。講師具願の朝臣、書き手定成、細かに子細を申せば、殊に御興あり。  
『春のみやまち』

弘安三（一二八〇）年六月二日のことである。その際、雅有の持つ秘本を用いて、『古今集』仮名序も進講されている。具願は、この仮名序の進講の場に居合わせ、同年十月に仮名序に準えて『弘安源氏論義』を記している。春宮への進講の場に居合わせたことで、『弘安源氏論義』を『古今集』仮名序に準える契機となったか。雅有が直接この記録の執筆に関与したのかもしれない。しかし、雅有の同年の日記『春のみやまち』には、『弘安源氏論義』が行われたという記載さえない。この点、雅有の意図する所が不明であり、疑問が残るところである。

(41)、古来より月の名所である明石の地で、雅有と同時代の鎌倉中期に、月を詠んだ歌には次のようなものがある。

為家

627 明石がた昔の跡を尋ねきてこよひの月も袖ぬらしつつ 『為家集』

宗尊親王

141 ふなですする明石のとなみ霧晴れて島がくれなき月を見るかな

（宗尊親王三百首・第十巻・秋）

為家が嵯峨の中院で詠んだ歌と、雅有が鎌倉で仕えていた宗尊親王の詠歌である。この時代には、遊興の地として明石は定着していたということであろうか。

(42)、渡辺静子著『飛鳥井雅有卿記事』（『中世日記紀行文学全評釈集成』第三巻・勉誠出版・二〇〇四年）一七〇頁。

(43)、『内外三時抄』の引用は、渡辺融・桑山浩然著『蹴鞠の研究 公家鞠の成立』（東京大学出版・一九九四年）三四七頁。

(44)、正式な鞠場は四本懸である。しかし狭い坪庭では一本懸、二本懸、三本懸などもあった。『春のみやまち』二月九日の記事には、春宮・熙仁親王の坪庭に懸木を埋める雅有の姿がある。

この飛鳥井のあばら屋の若木の桜掘りて、春宮へ持たせて参る。朝餉の御坪に植うべき由、沙汰あれば、四方みな塞がりたる御坪なれば、対の屋の上より越して植ゑぬ。これは日頃申し行ふによりてなり。うるはしき懸は人数なき時は叶はず。これは御一所も、又人二、二人も参りて、常に御慣らしのためなり。やがて神祇伯猫播参らせれば、敷かれぬ。まことや、木に結び付けたう侍りしかども、我が持ちて参り侍れば、さもえし侍らで、心のうちに思ひ続け侍りし。

移し植うる春のみやまの山桜雪居にうつる色をこそ待て

、『春のみやまち』

飛鳥井邸の庭から掘ってきた、「若木の桜」を春宮の「朝餉の御坪」庭に移し植えたのだ、という。春宮の蹴鞠の練習用のため、人数が揃わず少人数でも良いように、桜のみの一本懸である。ここでも「若木の桜」が登場しており、『源氏物語』が背景にある。ここには、蹴鞠の家である飛鳥井家の繁栄を望む気持ちも込められている。そして、『春のみやまち』の「若木の桜」は、春宮の即位を望む歌の「春のみやまの山桜」と詠まれるに至る。この歌が、『春のみやまち』という題名に繋がっている。

『仏道の記』で詠まれた「若木の桜」は、後鳥羽院の離宮であり、『隣女和歌集』には朽ち木の「柳」が詠まれていることから、おそらく正式な四本懸であったと思われる。残る二本の懸木、楓と松も残っていたか。

(45)、「箕裘」は、『大漢和辞典』巻八(諸橋轍次著・大修館・一九六七年)に拠ると、「良い弓師の子は、父が堅い幹角を矯めて弓を造るのを觀て、軟かな柳條を曲げて箕を作ることを學び、良い鍛冶の子は、父が堅い金鐵を鍛じて破れた鍋釜を補繕するのを觀て、軟かな獸皮を補綴して裘を作ることを學ぶといふこと。」また、「次第に難しい本業に習熟してゆく義といふ。轉じて、父祖の業を受けつぐ喩。」とある。『隣女和歌集』の序にこの言葉があることから、雅有にとつての和歌を指す。また蹴鞠も雅有にとつて「父祖の業」に当たる。

(46)、第一章で述べたように、『源氏物語』五十四帖の講読のうち、野分巻のみ講読が行われたことが記されていない。しかし、講読は五十四帖全てに渡って行われている。

(47)、雅有にとつての管絃は、『嵯峨の通ひ』の中では、二条中条入道との関わりから見える。

廿九日、内侍所の御神樂に、二人出でんと思へば、馴しのために、古き所作人、中将入道呼びたれば、来たれり。例の源氏の、橋姫のをはりほどに、来合ひたり。草子果てゝ、酒飲み、五節の詠曲次第にして、鬢多々良のあごゑなどして、舞ひのゝしる。殊に興あり。具して歸りて、夜更くるまで神樂鳴らす。本の拍子中将入道、末侍従、和琴は弾く。暁になれば寝ぬ。かの入道、とみにも寝入らで、朗詠、今様しつゝ、心を澄ましたり。天の下の上手なれば、おもしろし。この人は、声方のみにあらず、琵琶も残りなく究めたる、競べ馬はた上手なり。歌の道、声方までこそなければ、続後撰集に一首入りたり。鞠上手なる、かたぐ能ありて、心持ち優しく、濁りに染まぬまでこそなければ、諂へる事なし。その上にや、今の世には用ゐられずして、世を逃れり。世の人皆惜しみて、天の下の物の上手失せぬ、口惜しき世かな、と心ある人は言ふとかや。

『嵯峨の通ひ』

十月の最終日、二十九日の記事である。この日「中将入道」、「かの入道」という呼称で登場する人物は、雅有の子孫である飛鳥井雅威によって『嵯峨の通ひ』の本文に施された朱注に「伊嗣朝臣歟」とあったことから、藤原伊嗣かと思われた。他にも藤原資季かなど、諸説言われていたが、藤原経定であることを佐藤智広氏が特定されたので、従う。さて、雅有は、弟の基長と共に内侍所の御神楽の練習をするため、「古き所作人」である経定を呼ぶ。経定は、蹴鞠の日にも呼ばれているが、この日は、「五節の詠曲次第にして、鬘多々良のあごゑなどして、舞ひのゝしる」などした後、夜更けまで神楽を鳴らす。この経定に関して、雅有は、「かたがた能ありて」と琵琶も奥義に達していること、競べ馬も上手であること、和歌の道、蹴鞠も優れていると賞賛する。佐藤智広氏は、雅有が経定について記したことを、次のように解しておられる。

文永六年、雅有は二十九才、三年前に父を失った若き家督者であった。祖父雅経・父教定は、共に御遊の席で所作役人として供奉した「古き所作人」であった『御遊抄』。もはや教えを受ける近親者のない折、雅有は経定に接した。経定は後嵯峨院治世の公事に供奉した「古き所作人」であったのである。雅有の喜びは余りあるものであったろう。また、それを書き留めることで、正統的な作法を伝えられたという自身の存在証明を果たしたのである。(佐藤智広氏「二条中将入道について―飛鳥井雅有『嵯峨の通ひ』注釈小考―」『解釈』第四十四巻八号・一九九八年八月)

昔から管絃の道に携わっている経定に教えを受けたことで、雅有自身の習得したのも確かな証を得たことになるという。『嵯峨の通ひ』の中で、管絃は雅有にとつて重要な事柄であった。この日、集まった者たちと夜更けまで神楽を鳴らして遊んだ。本の拍子は経定が、末は雅有の弟・基長が、阿仏尼の勧めで和琴を弾いた時と同じく、この日の和琴も雅有が弾いている。

(48)、渡辺静子著 前掲書(注42) 一九六頁。

(49)、佐藤恒雄氏「中世紀行文学の再評価―飛鳥井雅有の作品から―」『国文学』第五十四巻十二号・至文堂・一九八九年十二月 一四六頁。

(50)、佐藤智広氏「日記文芸としての『最上の河路』―『嵯峨の通ひ』との関わりを中心として―」『日本伝統文化研究報告』一九九三年一月 五十三頁。

(51)、雅有の日記は、天理図書館蔵本『飛鳥井雅有卿記事』と外題が付けられており、『仏道の記』『嵯峨の通ひ』『もがみの河路』は合巻となっている。そのうち『嵯峨の通ひ』のみ国文学研究資料館蔵本があり、雅威が享和三(一八〇三)年に書写したものである。『春のみやまち』は、宮内庁書陵部蔵本、平野神社蔵本、内閣文庫本がある。

(52)、水川喜夫著『飛鳥井雅有日記』(勉誠社文庫<sup>136</sup>) (勉誠社・一九八六年) 二二二頁。

(53)、佐藤智広氏 前掲論文(注50) 五十四頁。

(54)、『仏道の記』は首部が欠落しているため、序については不明である。他三編の序は次の通り。

過ぎにし春の睦月より、昔屋の里を住み離れて、花の都に帰り上りたれど、早くより病身を去らぬものなれば、近き衛の名のみして、雲井のよ所に隔たりて、小倉の山の麓に、母なる人の山里あれば、籠りゐて月日を送る。(後略) 『嵯峨の通ひ』

過ぎにし弥生のころより、雲の通ひ路、朝夕踏みならし、藐姑射の山、常磐の御蔭に馴れ仕へて、いとゞ都の名残、昔にもまさりて、立ち離れがたく覚ゆれど、心にまかせぬ身、逃るゝ方なきことさへあれば、心ならず急ぎ出で立つ。ころは七月廿日あまりのことなれば、秋のあはれにうち添へて、都の名残を歎く。 『都の別れ』

都の住まひも、思はずに、今年四年になりぬるにや。過ぎにし三年の程は、うち続き心の闇にのみ暗されながら、涙のひまひまには出で仕ふこともありしかども、よろづ物憂くて、記すこともなかりき。 『春のみやまち』

いずれも、「過ぎにし」と回想を含めた書き方をし、雅有の当時の状況を伝え、『嵯峨の通ひ』では、仮名日記の執筆動機も序の部分で記している。

(55)、佐藤智広氏 前掲論文(注50) 五十六頁。

(56)、水川喜夫著『飛鳥井雅有日記全釈』(風間書房・一九八五年) 六十八頁。

(57)、引用は、『万葉集』(『新編日本古典文学全集』第八巻・小学館・一九九五年)。

(58)、国立民俗博物館蔵の『隣女和歌集』は、序と巻一が散逸。雅有の自筆本と見る認識もあるが、ここは最古の写本であり、雅有の方法が見えるという点から、異同の確認のために用いた。

中川博夫氏は、「結局該本は、現存諸本中では圧倒的に書写年代が古く、また本文の性質も系統上高く遡るのであり、編纂者に極めて近いところで書写成立したかと考えられる。序と巻一を欠くことが惜しまれるが、諸本間における優位性は疑う余地がないであろう。」と判じておられる。(『国立歴史民俗博物館蔵 貴重典籍叢書』文学篇・第十巻・私家集四(臨川書店・二〇〇一年) 解題)。

(59)、浜口博章著『飛鳥井雅有日記注釈』(桜楓社・一九九〇年) 九十四頁。

(60)、佐藤恒雄氏 前掲論文(注49) 一四八頁。

参考文献目録

底本

渡辺静子校註『春のみやまち』（影印校注古典叢書31）  
 水川嘉夫編『飛鳥井雅有日記』（勉誠社文庫136）  
 新典社 一九八四年  
 勉誠社 一九八六年

翻刻・注釈書

佐佐木信綱著『飛鳥井雅有日記』（古典文庫 第二十五冊）  
 風間書房 一九四九年  
 水川喜夫著『飛鳥井雅有日記全釈』  
 風間書房 一九八五年  
 浜口博章著『飛鳥井雅有日記注釈』  
 桜楓社 一九九〇年  
 浜口博章著『飛鳥井雅有「春のみやまち」注釈』  
 桜楓社 一九九三年  
 外村南都子他著『中世日記紀行集』（新編日本古典文学全集）  
 小学館 一九九四年  
 渡辺静子他著『中世日記紀行文学全評釈集成』第三卷  
 勉誠出版 二〇〇四年

書籍

玉井幸助著『日記文学の研究』  
 塙房書 一九六五年  
 寺本直彦著『源氏物語受容史論考 正編』  
 風間書房 一九七〇年  
 『私家集大成』第四卷（中世二）  
 明治書院 一九七五年  
 池田亀鑑著『源氏物語大成』第十二冊 研究篇  
 中央公論社 一九八五年  
 平岡武夫・今井清編『白氏文集歌詩索引』下・白氏文集歌詩篇  
 同朋社 一九八九年  
 渡辺静子著『中世日記文学序説』  
 新典社 一九八九年  
 『新編国歌大観』第七卷（私家集編三）  
 角川書店 一九八九年  
 犬養廉他編『和歌大辞典』  
 明治書院 一九九二年  
 渡辺融・桑山浩然著『蹴鞠の研究 公家鞠の成立』  
 東京大学出版会 一九九四年  
 古代文学論叢『源氏物語とその前後研究と資料』第十四輯・紫式部学云  
 武蔵野書院 一九九七年  
 『源氏物語』第一巻～第六巻  
 小学館  
 （『新編日本古典文学全集』第二〇巻～第二十五巻）  
 一九九四～一九九八年  
 『角川古語大辞典』  
 角川書店  
 一九八二年～一九九九年  
 久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』  
 角川書店 一九九九年  
 『国立歴史民俗博物館蔵 貴重典籍叢書』文学篇 第十巻 私家集四  
 臨川書店 二〇〇一年  
 『日本文学地名大辞典』詩歌編・散文編  
 遊子館  
 一九九九～二〇〇三年  
 『古代中世暦 和暦・ユリウス暦 月日対照表』  
 日外アソシエーツ 二〇〇六年

植谷元氏「飛鳥井雅有「別本隣女和歌集」について」

『ビブリア』第十四号 一九五九年六月

塚本康彦氏「飛鳥井雅有の日記」

『古典と現代』第九号 一九五九年九月

稲賀敬二氏「源氏秘義抄」附載の仮名陳状―法成寺殿・花園左府等筆廿卷本源氏物語繪巻について―

『国語と国文学』第四十一巻六号 一九六四年六月

斎藤清衛氏「飛鳥井雅有の文芸」

『甲南国文』第十二号 一九六五年二月

須田哲夫氏「源氏物語」古註の初期における「準拠説」

―『原中最秘抄』『弘安源氏論義』を中心に―『大東文化大学紀要』第三号 一九六五年四月

塚本康彦氏「飛鳥井雅有の日記」再論

『中央大学文学部紀要』第三十七号 一九六五年五月

松原正子氏「飛鳥井雅有の研究―歌人・日記作者・古典学者としての生涯―」

『立教大学日本文学』第十四号 一九六五年六月

井上宗雄氏「飛鳥井雅有の日記と趣味生活」

『国文学』第一〇巻十四号・学燈社 一九六五年十二月

樋口芳麻呂氏「宗尊親王の和歌―文永三年後半期の和歌を中心に―」

『文学』第三十六巻 岩波書店 一九六八年六月

沓名和子氏「飛鳥井雅有日記」成立論

『愛知大学国文学』 一九七九年三月

佐藤恒雄氏「飛鳥井雅有『無名の記』私注―作為または虚構について―」

『中世文学研究』第七号 一九八一年八月

清田倫子氏「飛鳥井雅有の人間像と当時の公家風俗」

『風俗』第二十一巻四号・日本風俗史学会 一九八二年十二月

森田兼吉氏「飛鳥井雅有と日記文学」

『日本文学研究』第十九号・梅光学院大学日本文学会 一九八三年十一月

渡辺静子氏「中世男女のかな日記論―飛鳥井雅有の日記を中心に―」

『日本文学研究』第二十四号・大東文化大学日本文学会 一九八五年

高橋善浩氏「飛鳥井雅有の和歌活動について―宗尊親王・藤原為家との関係を中心にして―」

『語文』第六十九号・日本大学国文学会 一九八七年十二月

田坂憲二氏「中世源氏物語享受の一面―『原中最秘抄』を中心に―」

『語文研究』第六十四巻・九州大学文学部 国語学国文学研究室編 一九八七年十二月

岩坪健氏「『原中最秘抄』の系統―中世における秘書の享受―」

『国語国文』第五十七巻三号・中央図書出版社 京都大学文学部編 一九八八年三月

佐藤恒雄氏「中世紀行文学の再評価―飛鳥井雅有の作品から―」

『国文学』第五十四巻十二号・至文堂 一九八九年十二月

渡辺静子氏「中世文学研究への提言―かな日記の構造と表現をふまえて―」

『日本文学研究』第二十九号・大東文化大学日本文学会 一九九〇年二月

中村光子氏「宗尊親王『三百首和歌』と『隣女集』」

『日本文学研究』第二十九号・大東文化大学編 一九九〇年二月

- 渡辺静子氏「『嵯峨のかよひぢ』の研究―私注と現代語訳」  
『大東文化大学紀要』人文科学 第二十八号 一九九〇年三月
- 中川博夫氏「藤原教定について（上）―関東祇候の廷臣歌人達（二）―」  
『中世文学研究』第十六号 中四国中世文学研究会 一九九〇年八月  
末崎教子氏「飛鳥井雅有「仏道の記」成立考」  
『国文白百合』第二十二号 一九九一年三月
- 中川博夫氏「藤原教定について（下）―関東祇候の廷臣歌人達（二）―」  
『中世文学研究』第十七号 中四国中世文学研究会 一九九一年八月
- 佐藤智広氏「日記文芸としての『最上の河路』―『嵯峨の通ひ』との関わりを中心として」  
『日本伝統文化研究報告』一九九三年一月
- 渡辺静子氏「『飛鳥井雅有卿記事』と『隣女集』―『無名の記』と『隣女集巻二』の関連―」  
日記文学懇話会編『日記文学研究』第一集・新典社・一九九三年
- 下西忠氏「日記から紀行へ―飛鳥井雅有を通して―」  
『高野山大学国語国文』第二〇号・一九九四年三月
- 中川博夫・小川剛生氏「宗尊親王年譜」  
『言語文化研究』第巻一 徳島大学総合科学部編 一九九四年三月
- 佐藤智広氏「飛鳥井雅有の明石観月―『仏道の記』の作品化について」  
『緑岡詞林』第十九号 一九九五年三月
- 小川剛生氏「二条良基と「揚名介」―除目の秘事、および『源氏物語』の難義として―」  
『三田国文』第二十二号 一九九五年六月  
↓  
小川剛生著『二条良基研究』笠間書院・二〇〇五年
- 佐藤智広氏「飛鳥井雅有の芹屋隠棲―『仏道の記』の作品化について―」  
『日本古典文学の諸相』桑原博史編・勉誠社・一九九七年
- 佐藤智広氏「序のある日記文芸―飛鳥井雅有の一特質―」  
日記文学研究会編『日記文学研究』第二集・新典社・一九九七年十二月
- 佐藤智広氏「二条中条入道について―飛鳥井雅有『嵯峨の通ひ』注釈小考―」  
『解釈』第四十四巻八号・一九九八年八月
- 三田村雅子氏「源氏物語の神話学―権力者たちの源氏物語―」  
『源氏研究』第三号 翰林書房 一九九八年
- 青木経雄氏「『春のみやまち』私論―序文の解釈をめぐって―」  
『解釈』第四十五巻九・一〇号・一九九九年一月
- 岩井宏子氏「『若木の桜』考」  
『帝塚山学院大学日本文学研究』第三十六号・二〇〇五年二月
- 三田村雅子氏「『嵯峨の通ひ』の源氏物語（記憶）の中の源氏物語（十二）」  
『新潮』第一〇二巻六号新潮社 二〇〇五年六月
- 中川博夫氏「歴博本『隣女和歌集』翻印」  
『鶴見大学紀要 第一部国語国文学編』第四十三号 二〇〇六年三月
- 中川博夫氏「桃園文庫本『隣女和歌集』第一翻印・解題」  
『国文鶴見』第四十号 鶴見大学日本文学会 二〇〇六年三月